



令和7年度

福島県教職員 特選研究論文集

福島県教育委員会

目 次

はじめに

令和7年度福島県教職員研究論文入賞者一覧 2

■ 特選研究論文

○ 学校指導 相馬市立桜丘小学校 校長 木村 裕之
子どもたちが今日学校にきてよかった、明日学校にくるのが楽しみな学校を目指して
～学校課題解決に向け、学校経営方針の
具現化を図る校長のマネジメントサイクル～ 3

○ 学習指導（体育科） 西郷村立羽太小学校 教諭 若松 優
運動の楽しさや喜びを仲間と共に育んでいく体育学習
～運動が苦手な児童に視点を当てた、
指導と評価の一体的な充実を目指して～ 23

○ 特別支援教育 只見町立朝日小学校 教諭 横田 みなみ
通級指導教室における特別支援教育のセンター的機能を意識した取り組み
～縦横のつながりを活かした切れ目のない支援体制の充実を目指して～ 42

○ 学習指導（総合的な探究の時間） 福島県立猪苗代支援学校 教諭 本間 久登
総合的な探究の時間における地域資源を活用した協働的な学びの実践
～万能調味料「うまくてごめんな山菜」の開発を通して～ 56

審査の観点及び審査総評 71

令和7年度福島県教職員研究論文応募状況..... 72

令和7年度福島県教職員研究論文応募者一覧..... 73

おわりに

はじめに

本研究論文の募集は、教職員の自主的な研究を奨励し、効果的な実践や先進的な取組を論文としてまとめることを通して、専門性の向上と資質・能力の高揚を図ることを目的としております。昭和46年度の開始以来、東日本大震災及び原発事故の影響による一年の中断を経て、本年度で第54回を数えるに至りました。半世紀を超える歩みの中で、数多くの教職員がその時代ごとの教育課題に真摯に向き合い、たゆまぬ研鑽の成果を積み重ねてきたことは、本県教育の大きな財産です。

今年度も、学校経営、教科指導、学校保健、特別支援教育など、多岐にわたる校種・領域から26点の論文が寄せられました。それぞれの学校や個人の課題、目指す学校像や児童生徒像の実現に向かって、独自の視点や工夫をもち、日々の多忙な業務の中においても熱意をもって追究された努力の証とも言える論文が集まりました。

令和4年度にスタートした第7次福島県総合教育計画では、これからの本県の教育の柱に「学びの変革」を掲げています。これは、一方通行の画一的な授業から、個別最適化された学び、協働的な学び、探究的な学びへの転換を進める「学びの変革」と、その実現のための環境づくりとしての「学校の在り方の変革」を目指すものです。今回寄せられた論文からは、この「学びの変革」の実現に向けた学校や教職員の不断の取組が見え、大変心強く感じております。

この論文集には、厳正な審査により選ばれた特選の論文を掲載しております。どの論文も各学校の教育課題の解決、教育活動の更なる充実に向けた貴重な道標となるものです。各学校等におかれましては、この知見と研究成果を参考にし、「学びの変革」の実現とともに、学校教育の充実・改善に役立てていただければと思います。

結びに、応募されました皆様の並々ならぬ努力と熱意に心から敬意を表すとともに、本県教職員の研修意欲や専門性がさらに高まり、児童生徒一人一人の健やかな成長と各校のさらなる発展につながることを心から期待いたします。

令和8年2月

福島県教育庁参事兼義務教育課長 佐藤敏宏

令和7年度 福島県教職員研究論文 入賞者一覧

【特選】

領域等	個人 団体	学校名	職名・氏名	研究主題
学校経営	個人	相馬市立桜丘小学校	校長 木村 裕之	子どもたちが今日学校にきてよかった、明日学校にくるのが楽しみな学校を目指して～学校課題解決に向け、学校経営方針の具現化を図る校長のマネジメントサイクル～
学習指導 (体育科)	個人	西郷村立羽太小学校	教諭 若松 優	運動の楽しさや喜びを仲間と共に育んでいく体育学習 ～運動が苦手な児童に視点を当てた、指導と評価の一体的な充実を目指して～
特別支援教育	個人	只見町立朝日小学校	教諭 横田みなみ	通級指導教室における特別支援教育のセンターの機能を意識した取り組み ～縦横のつながりを活かした切れ目のない支援体制の充実を目指して～
学習指導 (総合的な探究の 時間)	個人	福島県立猪苗代支援学校	教諭 本間 久登	総合的な探究の時間における地域資源を活用した協働的な学びの実践 ～万能調味料「うまくてごめんな山菜」の開発を通して～

【入選】

領域等	個人 団体	学校名	職名・氏名	研究主題
学年経営	個人	郡山市立富田小学校	教諭 齋藤 純子	OJT による若手教員を活かし育てる学年経営 ～日々の授業実践を通して～
学習指導 (放射線教育) ・教育課程	個人	相馬市立向陽中学校	主幹教諭 佐藤 拓也	福島で学び、福島に誇りを持つことができる「福島を生きる」教育の実践(2年次) ～中学3年間を見通した放射線教育を通して～
学習指導 (理科)	団体	いわき市立郷ヶ丘小学校	(代表) 校長 蛭田 紀隆	自ら見いだした問題を科学的に解決しようとする児童の育成
学習指導 (総合的な学習の 時間)	団体	天栄村立天栄中学校	(代表) 校長 市川 知広	探究的な学びを通して、夢の実現に向かう生徒の育成(3年次) ～『「天栄ならではの」教育』を目指して～
学習指導 (国語科)	個人	福島県立葵高等学校	教諭 松村こずえ	本質を掴み、解決策のヒントを異なる分野から見つける力の育成 ～思考ツールによる可視化と、具体と抽象を往還することを通して～
特別支援教育 (進路指導)	個人	福島県立猪苗代支援学校	教諭 佐藤 修一	施設併設特別支援学校における進路指導の在り方について ～学校、家庭、関係機関との連携をとおした子どもたちの夢の実現～
特別支援教育	個人	福島県立平支援学校	教諭 昆 瑞希	肢体不自由を伴う盲ろう児の自分らしく生きる力を育むために ～「わかる」「できる」を積み重ねる授業実践～

【奨励賞】

領域等	個人 団体	学校名	職名・氏名	研究主題
学習指導 (校内研修)	団体	いわき市立平第五小学校	(代表) 校長 渡辺 貴生	たくましく学ぶ ～児童と教職員を育む校内研修を目指して～
学習指導 (算数科)	個人	福島市立佐原小学校	教諭 上遠野雄喜	「分かった！できた！」成功体験を積み、主体的に学ぶ児童の育成 ～授業のユニバーサルデザインを目指す、算数科学習指導を通して～
学習指導 (体育科)	個人	猪苗代町立猪苗代第二小学校	教諭 町野 藍	意欲的に運動に励み親しむ子どもの育成 ～体育科の授業における「できる」「楽しい」という実感を伴った 運動の経験を通して～

研究主題

子どもたちが今日学校にきてよかった、
明日学校にくるのが楽しみな学校を目指して
～学校課題解決に向け、学校経営方針の具現化を図る
校長のマネジメントサイクル～



相馬市立桜丘小学校 校長 木村 裕之

I はじめに

今年度 60 歳となり、役職定年を迎える。振り返ると、たくさんの児童・保護者や地域の方々・先輩や同僚に支えられた 36 年間だった。30 代半ばから 40 代半ばまで勤務した相馬市立中村第一小学校においてご指導をいただいた 5 人の校長先生方の教えは、現在校長を務めるうえで、大きな道標となっている。学校経営の基軸としている PDCA のマネジメントサイクルを強く意識したのはあの時だった。OT 校長先生から、「日頃の取組を福島県教職員研究論文にまとめてみては」と助言をいただき、「研究主題：学校課題解決に向けて、教育課程を有効に機能させる教務主任のマネジメントサイクル」で応募した時だった。

そこで、この教員生活の節目に、支えてくださった方々への恩返しの一つとして、校長としての取組をまとめることにした。

II 主題設定の理由

1 今日の課題から

情報が経済的な発展のための道具から、環境面や人の暮らしも含めた社会基盤を支える道具になる社会 Society5.0 においては、社会は劇的に変化し、必要とされる知識も急激に変化し続けることが予想される。しかし、「Society5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会」では、義務教育に求められるのは、常に流行の最先端の知識を追いかけるのではなく、学びの基盤を固めることであると確認された。共通して求められる力は、「文章や情報を正確に読み解き、対話する力」「科学的に思考・吟味し活用する力」「価値を見つけ生み出す感

性」と力、好奇心・探求力」が重要であると提言している。これは、新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学びの実現」や、これまで進めてきた「生きて働く力の育成」といった取組が大きく変わることではないと考える。

ただし、私たち教師の役割については、再構築が必要な面がある。それは、元来の役割であった教え導くに加え、学びの支援者として「教えることから学ばせること」への意識や方法の転換である。

2 本県教育施策から

本県では、「第 7 次福島県総合教育計画」において、全ての子どもに必要な資質・能力の育成とともに、一人一人の多様な幸せと社会全体の幸せである Well-being の実現を目指し、個別最適化された学び、協働的な学び、探究的な学びへの転換を進める「学びの変革」と、その実現に向けた環境づくりとしての「学校の在り方の変革」を柱に掲げ、6 つの施策を展開している。施策 2 「『学校の在り方の変革』によって教員の力、学校の力を最大化する」では、改定した「教職員働き方改革アクションプラン」に基づき、教員が自ら学び、児童生徒と向き合う時間の確保に努めることで、持続可能な教育環境の整備を推進している。

3 本校の実態から

(1) 児童

明るく素直で、人懐こい児童が多い。授業時の反応がよく、教師は一斉指導を進めやすいと感じている。一方、論理的思考が必要な問題や時間がかかる問題などに対しては、面倒がったり最後まで集中して取り組めなかったりする

児童が少なくない。

社会問題として取り上げられることが増えた、普通学級に在籍する特別な支援や配慮を要する児童については、本校においても増加傾向にある。年度当初に、発達面・健康面・生徒指導面から共通理解を図った「気になる児童」は、445名中59名であり、全校児童の約13%に当たる。そのうち普通学級に在籍している児童は46名である。

(2) 教職員

学級数が多く、言語指導通級を2学級有しているため、多くの教職員を配置していただいている。また、子どもたちの成長のために熱心に教育活動に励む教職員がほとんどであり、これらは大きな強みである。

一方その構成には課題がある。常に児童と対面して教育活動を行っている教員は、管理職、産・育休中の教員や初任研メンターを除くと26名。内訳は、男性7名・女性19名で男女比が約2.7倍あり、20代10名・30代3名・40代3名・50代7名・60代3名、30代の最年長が32歳、40代の最年少が46歳、中間層の14年間分がすっかり抜けている。つまり、男女比が大きく、年代が若手とベテランの二極化した教員構成になっている。

(3) 保護者・地域

創立70年と市内では最も歴史の浅い学校である。核家族世帯が多いものの、保護者が卒業生である家庭や近くに祖父母が住んでいる家庭が多い。市の中心地にあってアパート住まいの家庭が約13.8%いるが、ひとり親世帯は約11.5%と少ない。比較的安定した家庭環境で育っている児童が多い。

また、図書廃棄や受け入れ作業に苦慮をし、保護者ボランティアを募ったところ、多くの申し出があった。ボランティアで学校花壇の面倒を見てくださっている地域の方もいる。これらは、諸先輩方が築いてこられた、保護者や地域の方々との信頼関係があるからこそである。それゆえ、信頼し続けていただけるよう努力して

いく必要がある。

(4) 研究経過

「表1 重点目標の変遷」のとおり、平成29年度からの7年中5年間は、さくらっ子（＝桜丘小学校児童の愛称、以下同じ）の弱みである低い自己肯定感と互いを認め合う心の希薄さの強化・改善をねらい、【よさ】に焦点を当てた重点目標を設定してきた。しかしながら、期待した結果を得られず、繰り返し取り組んできた」と推測する。

年度	重点目標
29	自分のよさ 相手のよさを 認め合おう
30	もっと認め合おう 自分のよさ 相手のよさを
R元	よく考えて 行動しよう
2	よさに気づき 高め合おう
3	よさを見つけ 高め合おう
4	・認め合い ・伝え合い ・学び合い
5	よさや考えを伝え合おう

表1 「重点目標の変遷」

学年の学級数が多いため、学年集団としてのまとまりが強かった。委員会等の各分掌においては、多い職員数を生かして複数人配置されていた。しかし、実際に機能していたのは主任に任命された教員だけであった。そのため、ベテラン教諭に学年主任や各種主任の役割が偏り、ベテラン講師が力を発揮する機会や若手教員が力を育み鍛える環境が十分ではなく、チーム学校として力を発揮できていないと感じた。

Ⅲ 研究の構想

1 研究主題

子どもたちが今日学校にきてよかった、明日学校にくるのが楽しみな学校を目指して
～学校課題解決に向け、学校経営方針の具現化を図る校長のマネジメントサイクル～

2 研究仮説

次の3つの学校経営方針を具現化していくことで、「Ⅱ 主題設定の理由」で挙げた諸課題に対応し、研究主題に近づく学校にしていくことができるであろう。

3 学校経営方針 [資料1](#)

(1) 児童自身に「できた・わかった」の成長実感を積み重ねさせる

ア 重点目標を軸に据えた教育活動の展開

イ 特別支援教育の推進

(2) 学校チーム力、教師力の強化・充実を図る

ア 校務分掌のグループ制の導入・構築

イ 授業力向上につながる校内研修推進

ウ アイの取組を、人事評価の目標・手立てと連動

(3) 安全・安心で信頼される学校であり続ける

ア 教職員一人一人が危機管理意識をもち、学校事故防止と児童の危険回避能力の育成

イ 教職員一人一人が高い倫理観をもった職務や立場に誠実に向き合い、不祥事防止

ウ 家庭・地域と密接に連携をして開かれた学校づくり

IV 研究の実際

1 児童自身に「できた・わかった」の成長実感を積み重ねさせる

(1) 重点目標を軸に据えた教育活動の展開

教育目標の達成状況、学校課題解決に向けた取組の評価、児童の強みや弱み等を様々な角度から検証し、次年度の教育活動の柱として設定するのが重点目標であることは言わずもがなである。それゆえ、出来る限りの教育活動をこの重点目標に関連付けて計画・実施していくことが目標達成につながる。

ア PLAN

令和6年度の教育課程編成に向け、全教員が参画して日頃の教育活動からさくらっ子の強みと弱みを分析した。この結果をもとに鍛え伸ばしていきたい力について話し合いを行い、相馬市の重点事項である「自己マネジメント力の育成」と関連付けた。児童のこうしたい・こうなりたいという思い(＝なりたい自分)が、児童自身を具体的に行動(＝努力)させる。つまり、【なりたい自分】を具体的にイメージさせて目標とし、その目標の実現のために努力を重ねさせることが、より良い自分へと成長させ、自己肯定感を高めることにつながると考えた。ここから導き出して令和6年度重点目標を、

【めざそう！なりたい自分】とした。

イ DO

毎日多種多様な教育活動の実施計画案が起案されてくる。児童の安心・安全や教育効果だけではなく、重点目標との関連性や整合性の観点から意識的に指導・助言をしてきた。場合によっては、一緒に方向性や内容を確認しながら作成に関わった。

校長は、教職員を介して児童へアプローチするのが基本である。具体的には、後述する校務分掌グループに校長が働きかけ、「イ 縦割り班活動」を新規事業として令和6年度2学期に立ち上げた。また、校長が児童へダイレクトにアプローチをする機会は、「ア 全校集会」や行事等での校長挨拶や講話がある。

(ア) 全校集会 [資料2](#)

年間計画に月に1回の頻度で全校集会が位置付けられ、内容は校長に委ねられている。児童の状態や時期に応じ、スライドや具体モデルを使って視覚に訴えながら話してきた。話し始めは毎回必ず重点目標を児童に問いかけ、主内容は重点目標に関連付けて話すことを意識してきた。話し終わりも、スライドで重点目標を提示し、【なりたい自分】をイメージして努力をしていこうと呼びかけて締めた。

児童の【よさ】を認めて広げるため、朝の登校指導時に把握していた相手に伝わるよい挨拶ができる児童や、班長・副班長がしっかりと役割を務めて安全に気をつけて歩行している登校班等を、全校児童に継続して紹介した。

(イ) 縦割り班活動 [資料2](#)

○ ねらい：活動を通して交流を深め、協調性や仲間意識を育む。協力して活動を楽しみ、その活動を通して自主性と実践的な態度を育む。

○ 内容：1～6年生を38グループに分け、6年生の班長を中心に班活動(月に一度)。

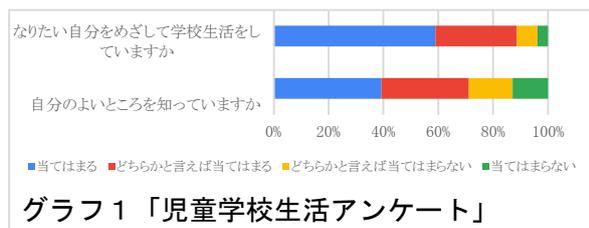
○ 活動の実際：6年生が良いリーダーシップを発揮し、1～6年生の異学年混在でも楽しめるように配慮して活動が繰り広げられた。

○ 6年生を送る会：「縦割り班活動」が、目的

達成や重点目標の具現化に機能していたため、実施計画案検討時に、後述する校務分掌グループに対して「縦割り班活動」を「6年生を送る会」に取り入れることを助言した。

ウ CHECK

「全校集会」や行事、学期の節目等で、【なりたい自分】を意図的に意識させてきた。重点目標【めざそう！なりたい自分】を、全児童が言えるほど浸透し、一般化した。しかしながら資料3にあるように、令和6年12月に実施した「グラフ1 児童学校生活アンケート」では、「なりたい自分をめざした学校生活」の問いでは、「当てはまる・どちらかと言えば当てはまる」の肯定的な回答が88.7%だった。ところが、「自分のよいところの認知」の問いに対する肯定的な回答は71.2%だった。17.5%もの大きなギャップが生じた。



自己肯定感を高めることにつながらなかった。2つの要因があると分析した。1つは、児童なりに集団を意識し、相対的に優れた力でなければ【よさ】として認めない傾向にあること。もう1つは、1年後や学期末の【なりたい自分】という大目標に対し、必要な条件や努力を小目標の【なりたい自分】として取り組む構造の理解は、児童にとって難しいものであったこと。つまり、「自己マネジメント力」自体が未熟であったことである。

エ ACTION 資料1

令和7年度の重点目標は、【見つけよう！自分のよさ めざそう！なりたい自分】とした。児童に浸透した【めざそう！なりたい自分】は継続し、【見つけよう！自分のよさ】を加えた。前述したとおりに何年もチャレンジをしてきたにもかかわらず、成果を出すことが難しかった【よさ】にあえて斬り込むことにした。さく

らっ子の弱みを、強化・改善していくためには避けては通れないと判断したからである。

それゆえ、覚悟を決めて前年踏襲を改め、取組の再構築をし、自己肯定感を高めるため、「さくらっ子スマイルカンパニー」と「さくらっ子賞」の2つの新規事業を、校長から各分掌グループに提案する形で立ち上げた。自己肯定感を高めるためには、勉強や運動に偏りがちな【よさ】を、様々な人格構成要素に広げて絶対的な価値として捉えられる必要がある。そこで、これらの活動を通して児童が異学年の仲間や教職員と関わることで、自分の【よさ】の価値を広げ、【よさ】に気付く機会とした。

(ア) さくらっ子スマイルカンパニー 資料4

○ 培う力：よりよい学校生活を築く自主的・実践的態度。よりよい人間関係を築く力。役割や目標を考えた責任ある行動力

○ 会社設立の条件と制限：人のために活動、自主性を尊重、笑顔を広げる活動、校内で活動、費用がかからない、動物等の飼育はNG

○ 参加の仕方：会社設立は5・6年生、社員は1～6年生

○ 会社設立状況：18社（7月末）。挨拶、清掃、休み時間一緒に遊ぶ会社等

(イ) さくらっ子賞 資料4

○ 効果：表彰を通して【よさ】の価値を広げ、【よさ】を認める。表彰者を通して努力を継続し、人のために尽くす人を憧れや目標とする

○ 方法：教育目標の知・徳・体3部門で、メダルと賞状を学期末に授与。対象者は、発達段階を考慮して3年生以上。結果だけでなく、対象児童の努力の過程が物語としてエピソードになっていることが規準。

オ 結果

行事や教育活動において、担当教員が重点目標の文言を意図的に使う場面が増えた。児童・教職員ともに、重点目標に対する意識が確実に高まっている。

児童は、「3 本校の実態から『(1) 児童』」で述べたとおり、さくらっ子の【よさ】として

の素直さが生かされ、善いことを積極的にやっていく雰囲気が高まってきている。そこに、「さくらっ子賞」として2名の児童に資料4の賞状とメダルを授与した。何人もの児童が、「さくらっ子賞」がもらえるメソッドを校長や周りの教員に質問してきた。2学期は、意識をして善い活動をする児童が増えるに違いない。

教職員は、会話に児童の【よさ】を共有している場面が増えた。週案の反省の記述が、「課題」から【よさ】に関わる内容に変わってきた。通知表の総合所見の内容が、採用や経験年数に関わらず様子をとおした【よさ】の価値づけを意識するようになった。資料5

(2) 特別支援教育の推進

① 校長室開放

ア PLAN

着任後、教室に入れない、教室から出てくる児童が、事務室や廊下に何人もいた。そのほとんどの児童が、発達に課題を抱えていることがすぐに感じ取れた。この児童たちには、居場所やクールダウンができる場所が必要であることも理解できた。本校には、市教育委員会が特別教育支援員を4名配置してくださっていた。この方々にはすでに支援をお願いした学級や児童がいる。中学校のSSRのような余剰教室はなく人員もいない。

イ DO

校長室の戸を寒くても暑くても開放した。廊下や事務室にいた児童が、少しずつ距離を縮めてきた。前のめりにならず、パソコンを打ちながら他愛のない会話に付き合っていると、校長室に直接登校してくるようになった。勉強に付き合ったり、ソーシャルスキルトレーニングをしたりした。向き合って話ができるようになると、長期や短期の将来についても話題にした。

ウ CHECK

多くの児童が、学年が変わるタイミングで自教室に登校し、集団生活ができるようになった。すると、別な児童が入れ替わって出入りするようになった。

校長室に児童が自由に出入りをしたり、校長室内で自由にふるまったりしていることを不適切に感じる教職員もいた。

エ ACTION

課題を抱えた児童の教室環境に配慮することを目的の1つに、2年に一度ではなく毎年全学年の学級編成を行うようにした。

教職員に、配慮を要する児童の対応に関する考え方について資料6の説明をしたところ、理解を得、立場に応じて工夫して関わってくれるようになった。特性に応じた児童の居場所が増え、廊下等をさまよう児童がいなくなった。

② 適切な就学指導

ア アセスメント

適切な就学指導は、対象児童や保護者のニーズを把握することから始まる。それゆえ、細やかなアセスメントは欠かすことができない。

「3 本校の実態から『(1) 児童』」で述べたように年度初めに「気になる児童」として、生徒指導・特別支援教育全体会で確認をした。その後も、月に一度全体会を開いてこれらの児童の様子について定期的に共有をしてきた。

私自身も時間をつくって各教室を回り、気になる児童のアセスメントをした。主要教科・技能教科・休み時間・給食など、活動内容による様子の変化も意識をして観察した。気になった児童については、担任や特別支援コーディネーターと内容を共有し、必要に応じて校内支援委員会を招集してケース会議を行った。

イ 教育相談

先の校内支援委員会での協議をもとに、「表2 年度ごとの教育相談件数」のとおり、保護者との教育相談を行ってきた。参加者は、対象児童の両親・校長・特別支援コーディネーター・担任・その他(児童の実態に応じて養護教諭や言語通級指導担任)としている。家庭に戻ってからの保護者間の認識や考え方のズレによるトラブルを防ぐため、両親そろって参加してもらえるよう調整をしている。

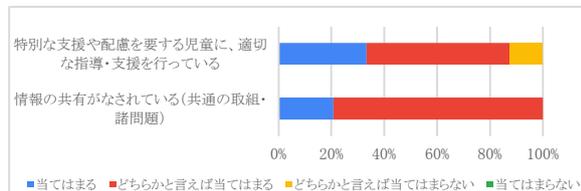
相談の中では、学校の様子や家庭での様子を

伝え合い、困り感を顕在化したりニーズの確認をしたりし、家庭・学校それぞれの支援の在り方について共有をした。また、相談は一度で終えず、次回以降の見通しも確認するようにした。繰り返し相談を重ねることで、対象児童が能力を伸ばせる教育の場についても協議の話題となり、適切な就学指導につながっている。

R 5年度相談件数：のべ 20 件（R 6 新規入級 3 名）
 R 6 年度相談件数：のべ 14 件（R 7 新規入級 2 名）
 R 7 年度相談件数：のべ 7 件（7 月末現在）

表 2 「年度ごとの教育相談件数」

ただし、令和 6 年度末に調査した「グラフ 2 学校経営・運営評価」資料 7 では、いずれも「どちらかと言えば当てはまる」の評価が多い。



グラフ 2 「学校経営・運営評価」

直接的に関係した担任でない見えにくい部分があったり、(2)①の「校長室開放」に対する不信があったりしてのことと反省した。情報発信や共有の仕方を工夫していく必要がある。

2 学校チーム力、教師力の強化・充実を図る

(1) 校務分掌のグループ制導入・構築

ア PLAN

令和 6 年度から、チーム学校として効率的に効果的な取組ができるよう、校務分掌のグループ制を導入した。学年集団を横の関係、対管理職を縦の関係、校務分掌組織をグループ化して斜めの関係とすることで、ネットワーク型職場の構築を目指した。教職員一人一人が、ミドルリーダーとして力を高めて教育活動を充実させることがねらいだ。

イ DO

全校務分掌を資料 8 のとおり 6 つのグループにカテゴライズし、若手とベテラン・新規異動の教員と先達教員で構成するよう配置した。

各グループが担うメインの活動を「表 3 校務分掌グループの教育活動」のとおり明確にし

た。グループ内で、共通目標を達成するための協働意識や責任感を刺激するようにした。

- | |
|-----------------|
| A : 学力向上・現職教育 |
| B : 生徒指導・特別支援教育 |
| C : 安全・防災教育 |
| D : 地域協働連携・体験活動 |
| E : 道徳教育・特別活動 |
| F : 健康教育 |

表 3 「校務分掌グループの教育活動」

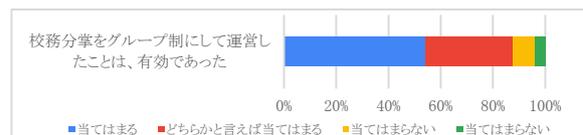
次に、主任だけが動くのではなく、グループとして機能するよう、グループ会議を年間計画に位置付け、グループ会議・運営委員会・職員会議、それぞれの役割について資料 9 のとおり明確にした。そして、これらを確実に運用していくため、「表 4 各会議の系統性」のとおりに年度始めの会議に系統性をもたせた。

- | |
|---|
| 1 職員会議①：学校経営方針 |
| 2 運営委員会①：グループ会議・運営委員会・職員会議の役割、各グループ強化内容等の共有 |
| 3 グループ会議①：強化内容、職員会議②への提案・共有内容の協議 |
| 4 職員会議②：各グループからの提案内容の協議、確認事項の共通理解 |
| → 新年度の教育活動スタート |

表 4 「各会議の系統性」

ウ CHECK

令和 6 年度 1 年間校務分掌グループを運用した結果、「グラフ 3 学校経営・運営評価」資料 7 では、87.5%が取組として有効だったと評価し、継続するべきとのコメントも多数あった。ただし課題もあり、グループによる負担の偏りについて多く挙げられた。



グラフ 3 「学校経営・運営評価」

エ ACTION

課題の負担偏りに対し、令和 7 年度は、グループのカテゴライズの微調整と、業務内容や量に応じて構成人数に軽重をつけた。

オ 結果

職員会議や運営委員会の場で課題案件が顕在化した時に、グループにもち帰って検討して報告・再提案しますと対応する場面が増えた。

主任や担当者は、相談体制が確立されたことによって安心して業務推進ができ、位置付けた会議日以外資料9にも、互いに声を掛け合っ

てグループ会議をもっている。職員会議の要項や案件集約資料10をグループ主体にしたことで、教職員の主体性を引き出し、教頭の業務削減につながった。

(2) 授業力向上につながる校内研修推進

ア PLAN

児童の「できた・分かった」を支えるのは、教師の授業力である。この授業力を高めるため、有用性を感じ、主体的な参加意欲を促す校内研修の在り方を検討した。

令和6年度は、指定を受けていたリーディングスキル研究推進校が他校に移り、相馬地方小教研算数科の研究指定が3年目で発表がない状況を踏まえ、授業力向上に特化した校内研修へと舵を切ることを研修主任に提案した。実践していくために「表5 校内授業研修条件」について確認・共有をした。

- 複数回の授業研究を行う。
 - ・ 自学級で時期をずらして実施
 - ・ 同一内容を自学級と隣接学級で実施
- 学習指導案はA4用紙1枚に収める。
- 事前研は行わない。

表5 「校内授業研修条件」

イ DO

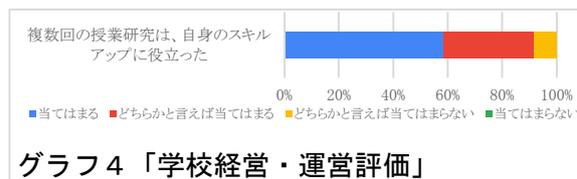
前述したとおりに小教研算数科の指定が1年間残っていたため、「算数班」と「リーディングスキル班」の2班体制で実践を重ねた。自分の学級で時期をずらし、同じ手立てで実践した教員が約1/3、同一内容を隣接学級で行った授業の反省を反映させて自学級で実践した教員が約2/3だった。中には、学年3学級を利用して3回実践した教員も複数名いた。

校長は、通常学級17・特別支援学級3の合計

20学級×2+αで約50回弱の授業研究を全て参観し、事後研究会で指導・助言を行った。

ウ CHECK

令和6年度は、1年間複数回の授業研究を校内研修の軸として運用した結果、「グラフ4 学校経営・運営評価」資料7では、91.6%が自身のスキルアップに役立ったと評価した。



グラフ4 「学校経営・運営評価」

課題としては、互見授業回数増に伴って自習体制の回数も増え、授業進度や児童への影響や負担が大きかったとの意見が複数あった。

エ ACTION

令和7年度は、小教研が新しいサイクルになったことで、研究指定がなくなった。そこで、研究教科を主要教科に広げて個人選択にし、教科ごとのグループ研究とした。これにより、課題であった互見授業の回数を抑えることができた。ただし、学校としての統一性を担保するため、全員が参観する講師招聘の授業研究を3回設定した。

オ 結果

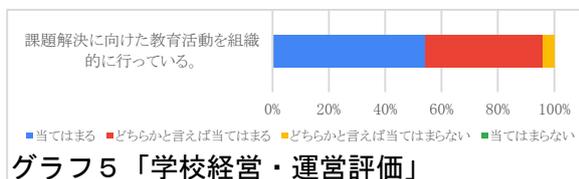
小学校では、多くの課題や事情で教科担任制を完全導入するのは難しい。それゆえ、その日と同じ内容の授業は最短でも1年後、多くは数年後、教科書改訂で二度とできない場合もある。隣接学級を使うことで、限定的な教科担任のように、実践した反省を翌日の授業に反映させることができた。自学級で時期をずらして同一手立てで実践した教員は、柱とする手立てに対する意識を高め、1回目から2回目までの間に意図的に児童を鍛えてその手立てが確実に機能するようにした。

これらにより、授業を企画し構想する力、児童の実態に応じて適切に指導する力、授業を評価・改善する力を培うことにつながった。一人一人の教職員が課題とする力の向上につながる取組となっている。

(3) 人事評価の目標・手立てと連動

人事評価制度説明時に、資料11シートを提示し、重点目標や学校経営方針をもとに作成した学校経営運営ビジョン資料1と、人事評価制度の関係について整理をして説明した。

期首面談時には、その内容を目標や手立てに反映させるよう、指導・助言を行った。中間面談や期末面談時には、進捗状況や結果がわかる資料を提示しての説明を求めたことで、日々の教育活動を学校経営運営ビジョンと関連付けて意識的に実践するようになった。「グラフ5 学校経営・運営評価」資料7では、95.8%が教育活動を組織的に行っていると評価した。



3 安全・安心で信頼される学校であり続ける

この項目は、日々の教育活動を積み上げていく土台となる部分である。それゆえ、どの学校でも力を入れて取り組んでおり、学校ごとの独自性を説明するのは難しい。そこで、校長が直接、もしくはよりマネジメントを発揮して関わっている取組を1つずつ述べる。

(1) 教職員一人一人が危機管理意識をもち、学校事故防止と児童の危険回避能力の育成

○ 各種避難訓練・安全教室 資料12

ア PLAN

各種避難訓練や安全教室での活動を通し、児童が自らの危険回避能力を高める。

イ DO

全ての訓練と安全教室において、「表6 校長の話の内容」のとおり毎回同じ内容にした。

- ・自分と自分の大切な人の命を守るためにやる
- ・命を守るためだから、本気で取り組む
- ・本気だから、命を守るための正しい知識を身につけ、良い判断力を鍛えられる

表6「校長の話の内容」

ウ CHECK

回を重ねるごとに真剣に取り組み、無駄話を

する児童がいなくなった。放送があると、動きをやめて耳を傾ける児童が多くなった。状況に応じた対応力を培っていく必要がある。

エ ACTION

各種訓練や安全教室の想定や内容について、バリエーションを増やしていくように担当グループに指示をした。

(2) 教職員一人一人が高い倫理観をもち、職務・立場に誠実に向き合い、不祥事防止

○ 会計システムの見直し

約5年前に不適切な会計処理があった。会計取扱者によって処理の仕方が異なる現状があった。会計システム再構築の必要性を感じた。

ア PLAN

取扱者によって処理の仕方が異なることがないよう、工夫の余地がない会計システム構築を目指した。まずは、適切な会計処理のため、新システム構築について教職員に宣言し、「表7 新会計システム構築工程」を示した。

- | |
|------------------------|
| R5：会計処理データを収集して現状把握 |
| R6：学校一括会計の部分導入（紙類、その他） |
| R7：学年費適正価格決定 |

表7「新会計システム構築工程」

イ DO

提示した工程に従い、令和5年度は、主査と学年から1名ずつを会計処理担当者として任命した。全学年の学年会計で執行されている品目や時期をデータ化した。

令和6年度は、印刷経費代として児童一人当たり1000円を学年費に設定した。年度や学期のスタート時ごとに、会計処理担当者会議を年間計画に位置付けた。学年費と教材費の処理の仕方を明確にした。曖昧であったノートや紙ファイルの取り扱いを、全員同じ物を使わせる場合は、教材費として計上するよう統一をした。あわせて、教材費は、発注状況と使用状況を一覧資料13で確認できるようにした。

令和7年度は、学年費2400円のうち印刷経費以外の1400円について令和6年度の使用状況を検証し、学年費の適正額を検討している。

ウ CHECK

令和5年度のデータ分析により、紙類において学校一括会計を導入することで、工夫の余地のない会計システム構築に近づくと分析した。

令和6年度は、印刷経費代1000円が適正であったかについて検証した。具体的には、校内での印刷総経費に対し、相馬市需要費消耗品費から印刷経費代として支出した割合と、家庭徴収金から支出した割合を、令和2年度からの5年分を比較した。その割合は、約7対3と5年間大きな変化がなく、適正と判断した。

エ ACTION

令和6年度から、教科で使用する画用紙や模造紙以外の紙は学校で一括購入することにした。そのため、児童一人2400円の学年費から年間1000円を印刷経費代として学校会計「印刷費」へ繰り入れることにした。

オ 結果

印刷経費を学校一括管理にしたことで、学年会計の約4割を縮めていた用紙代の処理がなくなった。処理の割合が減ればミスも減るはず。さらには、学年ごとのスペースが必要だった印刷室の用紙置き場に余裕が生まれ、整理整頓にもつながった。

過去の会計を検証したことで、PTA協力費から印刷経費を支出せざるを得なかった年度もあったことが分かった。市費と児童一人当たりの印刷費に限定できたことも、ミスを減らすことにつながるに違いない。

(3) 家庭・地域と密接に連携をして開かれた学校づくり

○ ホームページ更新

諸先輩方のご尽力により、保護者や地域から得ている信頼を継続していくためには、学校で行っている取組や児童の様子を発信することだと考えた。そこで、ホームページの更新作業は、校長の役割と決めて「表8 ホームページ更新件数」のとおり行ってきた。

R5 : 364件	R6 : 530件	R7 : 154件 (7月末)
-----------	-----------	-----------------

表8 「ホームページ更新件数」

V 研究の考察

1 児童自身に「できた・わかった」の成長実感を積み重ねさせる

○ 相馬市では、毎月8項目のいじめ調査資料15を実施している。同一集団の3年分の変容が「表9 相馬市小・中学校いじめ調査」のとおり、総数とともに減少している。これは、【なりたい自分】を目標として努力すること、【よさ】の価値を広げて【よさ】を自覚する機会を意図的に設定してきたことが、児童の安定した学校生活につながったと考える。

	1学期総数	R7入学	R6入学	R5入学	R4入学	R3入学	R2入学
R5	251	-	-	72	5	86	12
R6	293	-	46	92	12	33	12
R7	119	16	19	45	4	29	6

「表9 相馬市小・中学校いじめ調査」

● 今後も、【よさ】の価値を広げて【よさ】を自覚できる機会を意図的に設定し、児童の自己肯定感を引き上げていく必要がある。

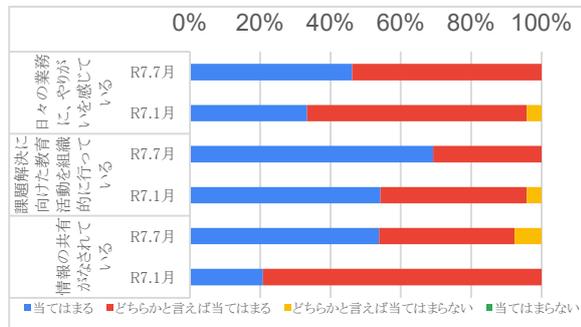
2 学校チーム力、教師力の強化・充実を図る

○ 全員が役割を担う体制が整ったことにより、一人一人が責任感をもちつつ相互の関わりを深めてネットワーク型の関係性が構築され、組織力の強化につながっている。

○ 若手や新規異動者にとっては、グループ内で役割を担うことで、力を培ったりスムーズに業務推進ができたりし、グループがOJTの機能を果たしている。課題とした職員構成二極化に対する手立てとして機能している。

○ 令和7年7月にも質問内容を減らして「学校経営・運営評価」資料16を受けた。「グラフ6 学校経営・運営評価」が示すとおり、「業務にやりがいを感じている」教員が増えた。これは、6年度末の結果を受けて校務分掌グループや授業研究等について修正・改善を行ったことが反映されたものと考え。その相関として、「課題解決に向けた組織的取組」や「情報共有」の結果も伸びたと考える。働き方改革といえば、業務の精選や効率化を図った時間短縮に視点がいきがちである。私は、教職員一人一人が、日々の業務にやりがいを実感しながら業務推

進することも、働き方改革として必要な視点であると考えている。教職員一人一人がやりがいを実感できれば、自ずと業務の効率化が図られ、時間短縮にもつながるからである。「やりがいを実感」してくれている教員の率が伸びているのは大きな成果である。



グラフ6 「学校経営・運営評価」

私たち教職員が抱えている業務は、幅広く量も多い。業務過多が顕著になると、日々の業務をこなす事が目的になり、前年踏襲が当たり前になりがちである。しかし、桜丘小学校の教職員は、今年度新規事業を立ち上げ始めた。(児童会を動かしてのいじめ宣言等資料14) これは、教職員自らが「やりがい」を求めた能動的な動きであり、自分達で「働き方改革」を始めたサインと捉えられる。

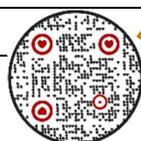
● 教職員の本音の声を聞き、校務分掌グループ編成の微調整を継続する必要がある。

3 安全・安心で信頼される学校であり続ける

○ 令和5年4月から令和7年7月末までの間、交通事故や学校事故が発生していない。教職員の不祥事も起きていない。教職員はもとより、児童も自らの言動に対して自覚と責任をもって学校生活を送るようになってきており、地域の方から、登校中の様子がよくなったと言われるようになった。

○ 学校ホームページのアクセス数「表10 ホームページアクセス数」が飛躍的に伸びた。PTA関連の各種会合への出席率も伸びた。いずれも、学校の教育活動に対して関心をもっていただいていることの表れであると考える。

令和5年4月：約8千件



HP

令和6年4月：約3万件

令和7年7月：約9万8千件

「表10 ホームページアクセス数」

● 学校事故が発生していない状況や学校に関心をもっていただいている状態を継続していくこと。そのための具体的取組を行うこと。

VI 終わりに

主役は児童であり、支えるのが我々教職員や保護者である。この三者に対して3つの学校経営方針を具現化する形で具体的手立てを講じ、PDCAを意識してマネジメントしてきた。

学びの変革を進めるチーム学校として、教職員が進んで挑戦をし、変化を感じて工夫や創造を始めたチーム桜丘は、素晴らしいチームに成長してきていると確信する。今後も、取組への精度の高い評価を得て丁寧に検証し、効率よい効果を得るためのビルド&スクラップをいとわず、常にバージョンアップを図り続けていき、チーム力を培い成長させていく。

主役である児童は、いくつかの取組により、安定した学校生活と日々を目的的に生活していく手がかかりをつかんだ。今後も様々な角度からアプローチを続け、「今日来てよかった・明日来るのが楽しみな学校経営」を目指していく。



資料2 全校集会・縦割り班活動



縦割り班活動（月に一度）

6年生が毎月、1～6年生みんなで楽しめるよう、配当場所に応じた活動を工夫して考えている。



縦割り班のメンバーから寄せられた言葉を嬉しそうに読み込む6年生



6年生を送る会（3月）



全校集会（月に一度）

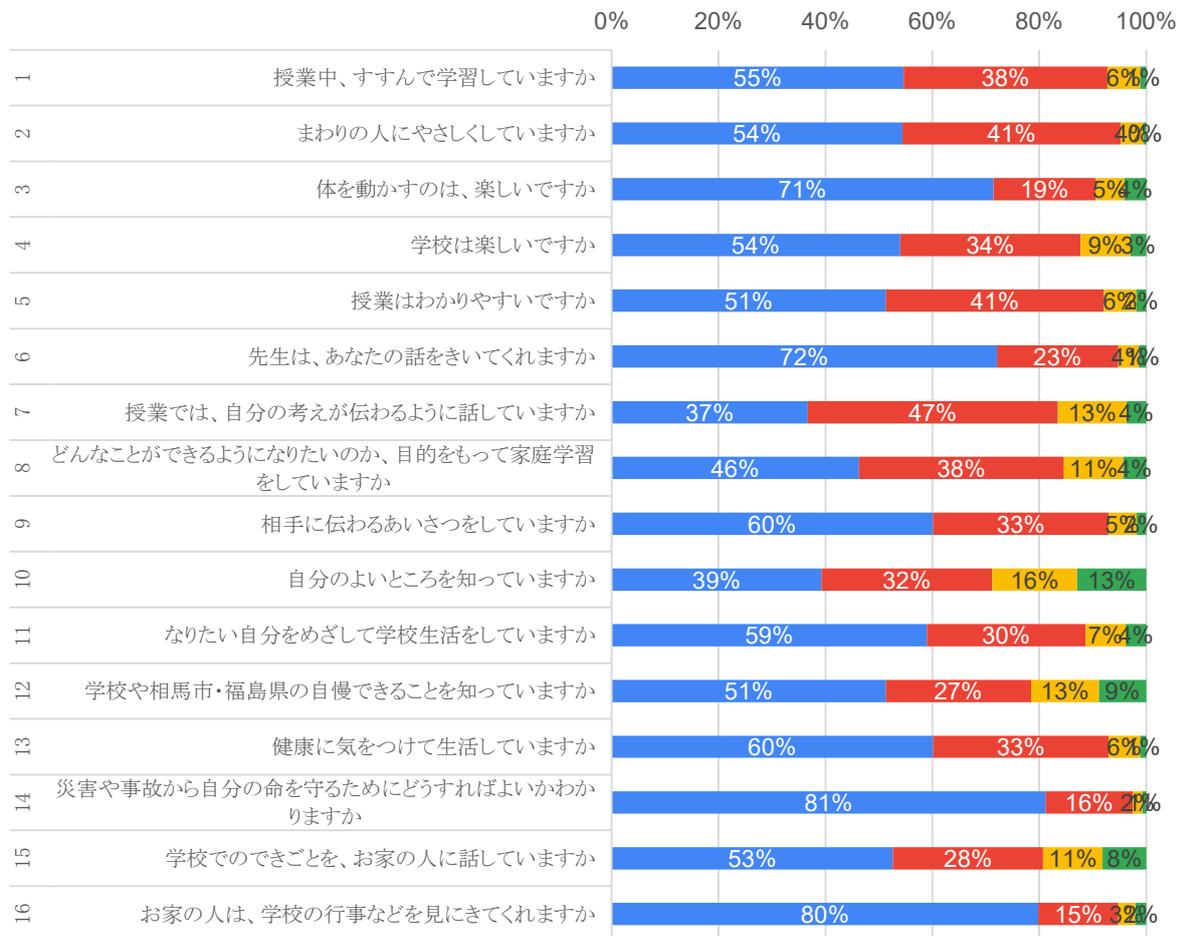
月に一度の全校集会。内容は校長に委ねられている。左は、毎回の重点目標確認の様子。右は、相手に伝わる挨拶名人を学年1人ずつ紹介



令和6年12月実施。相馬地方小学校長会の研究と連動させた。質問に対する回答精度を上げるため、極力ダブルバーレルとしないアンケート内容にした。

資料3 令和6年度 児童学校生活アンケート

児童学校生活アンケート



■当てはまる ■どちらかと言えば当てはまる ■どちらかと言えば当てはまらない ■当てはまらない

資料4 さくらっ子スマイルカンパニー・さくらっ子賞



月水金に昇降口で挨拶

あいさつニコニコ会社(6年)



毎朝各教室に出かけて挨拶

カラッコレインボ-会社(5年)



放課後、教室や共有場所清掃

放課後会社(6年)



活動状況通知掲示板

校長は授与するにあたり、白手袋を装着してその価値を高める演出

授与メダルは、この賞の価値を高めるために金型を作成して特別注文した。PTA役員に相談をし、「PTA資源物回収」の益金を、メダル代にさせていただくことにした。さらに、児童が登校時に持参しやすいあき缶は、通年で集めることにし、児童・保護者に周知した。



1学期終業式さくらっ子賞表彰



さくらっ子賞表彰者



さくらっ子賞用メダル

「さくらっ子スマイルカンパニー」と「さくらっ子賞」について保護者に周知した学校だより

～『よさ』の価値を広げ、

『よさ』に気付かせるために!②～

令和7年度学校重点目標【見つけよう!自分のよさ めざそう!なりたい自分】を表現していくために、2つの新しい取り組みをスタートしました!

●さくらっ子賞・教育目標「考える子ども」「心豊かな子ども」「誰やかな子ども」に応じた3部門で、目に見える成果だけではなく「努力」を称え、メダルと賞状を学期末に授与する。他の子どもたちにとって、憧れや目標になる賞となるよう価値ある賞としたい。対象者は、発達段階を考慮して3年生以上とする。

●さくらっ子スマイルカンパニー:
学校や学校にいる人を笑顔で元気にするための会社を設立して活動する。会社を設立できるのは、5・6年生。その会社の趣旨に賛同できる人は、1～6年生だれでも社員になれる。

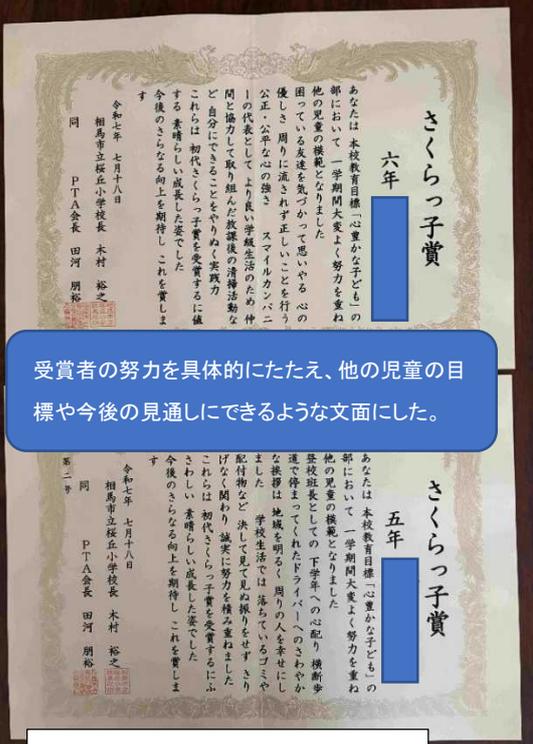
良いアイデアが浮かんだら、5・6年生は、次の構想を練って学校内の教職員に相談をする。相談する教職員は、誰でもOK。
■会社名 ■会社設立の理由 ■活動内容 ■活動日 ■募集人員

5月21日(水)の全校集会のときに、子どもたちにも話しました。ぜひ、「さくらっ子スマイルカンパニー」の活動を通し、よりよい学校生活を築こうとする自主的・実践的な態度を養い、桜丘小学校の一員としての自覚をもち、よりよい人間関係を築く力を育ててほしいと考えています。

＝資源物回収の益金活用＝

さくらっ子賞で授与するメダルは、既成のものではなく、子どもたちが憧れをもって「さくらっ子賞」を目指すことができるよう、オリジナルの金メダルを作成します。しかし、学校予算内では難しい金額であるため、PTA三役会で役員さん方に相談をしたところ、『資源物回収の益金』を活用することを提案いただきました。令和5年9月からスタートした資源物回収ですが、これまで活用せずにプールしてきていました。今回と合わせて4回分になります。ただし、それでもかなり不足しています。ぜひ、今後も資源物回収へのご協力をお願いいたします。

そこで、『アルミ缶』については、通年で集めていきます。少しずつかまいませんので、登校時に子どもたちに持たせていただくと、負担が少なく集めることができます。どうぞ、よろしくお願いいたします。



受賞者の努力を具体的にたたえ、他の児童の目標や今後の見通しにできるような文面にした。

さくらっ子賞授与賞状

資料5 令和7年度1学期通知表総合所見

通知表作成前に、総合所見について指導・助言を行った。様子の伝達で終わることなく、様子を通して児童のどんな力が伸び・身に付いたかを「よさを価値づけ」て所見とするよう、例を示して説明をした。下のとおり、採用や経験年数に関わらず「よさ」を意識して所見を作成した。

令和7年度 第5回職員会議校長資料
令和7年6月13日

1 教育活動について
(1) 学期末に向けて
○ 『よさ』の価値観は広がり、自分の『よさ』を認める子どもは増えてきているか。
○ 通知表の評価→主要教科において、思考・判断・表現は、獲得した知識・技能を使って培う力であるため、「知識・技能＝2」で「思考・判断・表現＝3」という評価はない。
○ 通知表所見＝評価したこと（伸びて育ってきている力・努力が必要な力）について、その根拠をわかりやすく説明する。具体的なエピソードは説明をわかりやすくするために使う。エピソード（様子）の伝達で終わらない。

※ 「社会科「居ではたらく人」や「くらしを守る」の学習で作成した新聞では、イラストや吹き出しを上手に使って、見学して分かったことを記事にまとめました。（エピソード）
+ 内容の理解を深めただけではなく、情報を活用する力も高めました。（評価）

<p>第1学年 20代採用2年目</p> <p>算数科「ぜんぶでいくつ」の学習では、たす数とたされる数が入れ替わっても答えが同じになることに気付き、たしざんの規則性を理解することができました。数の構成の理解が進み、計算力が高まっています。生活面では、友達に対して優しく接し、周りの様子をよく見て行動することができています。教室のごみを積極的に拾ったり、水筒を忘れないように友達に声をかけたりと細やかな気配りが素晴らしかったです。</p>	<p>第1学年 20代大卒初任者</p> <p>ひらがなの学習では、1文字ずつ形や書き順に気を付けて練習したため、五十音を正しく書くことができました。その成果もあり、ノートやプリントの字も見やすいです。教師や友達の話を熱心に聞く態度が身に付き、話を聞いたあとはすぐに行動に移すことができました。学習も生活も前向きに取り組みました。学級では、配り係として活動を行うことができました。困った時は友達と相談し、考えて取り組みました。</p>
<p>第2学年 50代先達者</p> <p>音楽科「ドレミであそぼう」の学習では、「ドレミの歌」に合わせた身体表現を通して音の高低を理解し、伸びやかな歌声で楽しく歌うことができました。「かえるの合唱」の伴奏では、指をスライドすることで無理なく演奏できることに気付き、何度も練習に取り組むことで演奏の技能を高めました。学級では保健カード当番として責任をもち、毎日の健康観察カードを友達と協力して保健室に届ける姿が見られました。大きな声で元気に挨拶や返事ができることが素晴らしいです。</p>	<p>第2学年 20代採用2年目</p> <p>国語科では、進出漢字を確実に身に付けたり言葉の意味を正しく理解したりすることができました。身に付けた漢字や語彙を生かし、物事の順序を適切に捉えて説明文を読んだり、場面の様子を豊かに想像して物語を読んだりする力を伸ばしました。体育科の新体力テストでは、反復横跳びや立ち幅跳び、シャトルランなどで少しでも良い記録を出そうと意欲的に取り組み、跳躍力や俊敏性、全身持久力を伸ばしました。清掃当番として、昼休みに教室のごみを箒で掃く仕事に取り組みました。</p>
<p>第3学年 20代2校目今年度異動者</p> <p>算数科の「わり算」の学習では、問題の意味をよく理解して式を立てたり、正確に答えを求めたりすることができ、確かな計算力を身に付けています。理科「風やゴムのはたらき」の学習では、風やゴムの力を利用して物を動かす仕組みに興味をもち、友達と協力して実験に取り組み、理解を深めました。学習当番として、次の時間の学習の準備物についてみんなに伝えることができました。</p>	<p>第4学年 20代講師今年度中学校からの異動者</p> <p>算数科の「角」の学習では、分度器を正しく使い、角を正確に測ることで操作技能を身に付けることができました。また、180度より大きい角度についても、360度からどの角度を引けば答えが出るのかを理解しており、角の大きさの見方・考え方を高めました。まわりの友達の様子をよく見て、困っている人に声をかけたり、手伝ってあげたりするなど、優しく接することができました。</p>
<p>第5学年 30代採用3年目</p> <p>黒板当番として、黒板消しを友達と協力しながら責任をもって取り組みました。国語科「銀色の裏地」の学習では、登場人物の関係を図でまとめることができました。叙述を基に登場人物の心情の変化を捉えることで読む力を高めました。算数科「合同と三角形、四角形」の学習では、三角形の合同な図形を3つの構成要素で作図できることを理解し、作図の技能を身に付けました。</p>	<p>第5学年 40代今年度異動者</p> <p>児童会企画・運営委員として、いじめ防止宣言の内容を学級で検討するために学級会を開いたり、全校児童へ放送で呼びかけたりと責任をもって取り組むことができました。国語科「みんなが使いやすいデザイン」の学習では、トイレのバリアフリーについて情報を集め、整理することができました。また、伝えたいことを明確にして報告する文章を書くことで、表現する力を高めました。</p>
<p>第5学年 20代今年度大卒新採用</p> <p>いつも友達と笑顔で接しています。相手の立場や気持ちを考えながら行動している姿はとても頼もしく、高学年としての言動に成長を感じます。家庭科「私の生活、大発見!」の学習では、生活を振り返り、お母さんやお父さんの負担が大きいことに気付きました。家族の一員として、生活をよりよくしようと、自分ができることは何かを考えました。主体的に家庭生活を実践する意欲を高めました。</p>	<p>第6学年 20代2校目今年度異動者</p> <p>算数科「対称な図形」の学習では、身の回りの物や既習の図形を線対称や点対称として見ることで、対称な図形の意味や特徴の理解を深めることができました。問題を自力解決する力も育っています。体育館にマスクが落ちていた際、自分から進んで拾って捨てました。落とし物も気付いたら拾うことが多く、進んで校舎の美化に努める様子が見られました。</p>

資料6 発達に課題がある子どもたちへの対応について

特別支援教育全体会の中で、校長から教職員に説明・お願いした内容

子どもは当然ながら未成熟です。そこには2つの未成熟さがあります。一つは、発達の過程にあるレベル的な未成熟さと、もう一つは、凸凹のバランスが悪い未成熟さです。レベル的なものについては、発達の過程にあり、学びの途中な訳ですから当然と言えます。しかし、凸凹については意外に見落としがちです。

その凸凹具合は、昔の子ども以上に大きくなっていると感じています。要因はいくつかあると思っています。一つの要因として、社会的な環境として、大量の情報が直接入ってくることで、大人の口出しが格段に増えたことがあると思います。これらによって、凸の部分が大きくなっています。つまり昔の子どもが知らなかったことを、今の子どもたちはたくさん知っています。ところが、知っていることとそれらを正しく使えることは別です。感情的にも技術的にも未発達なのですから、そんなに簡単には使えません。知ってはいるのに使うことはできない時点で、凸凹はかなり大きくなっています。例えば、大人とは付き合えるけど、子どもとは人間関係が築けない子どもがととも増えています。身近で思い浮かぶ子がいると思われます。

さらに、大きい要因が発達の問題です。環境や時代背景的なものにより、感覚を統合させる機会が激減したことが大きいです。少年 kimura の小学校時代、登下校中だけを振り返っても、「縁石から落ちずにどこまでいけるか」、「車とすれ違うたびに車の影をジャンプして飛び越す」、「車が連続できたらその分大きくジャンプして影は決して踏まないように頑張る」、今思い返すと、朝から晩まで一日中感覚を統合するために、何かしら動いていたように思います。

感覚統合がうまくいかない場合、様々な感覚情報を脳が適切に整理(感覚の強弱を調整したり、受け入れる量を調節したりする)できなくなり、日常生活で様々な困難が生じます。集中力低下、不器用さ、運動能力の低下、情緒の不安定さ、さらには学習やコミュニケーションの問題などの困難につながることがあります。

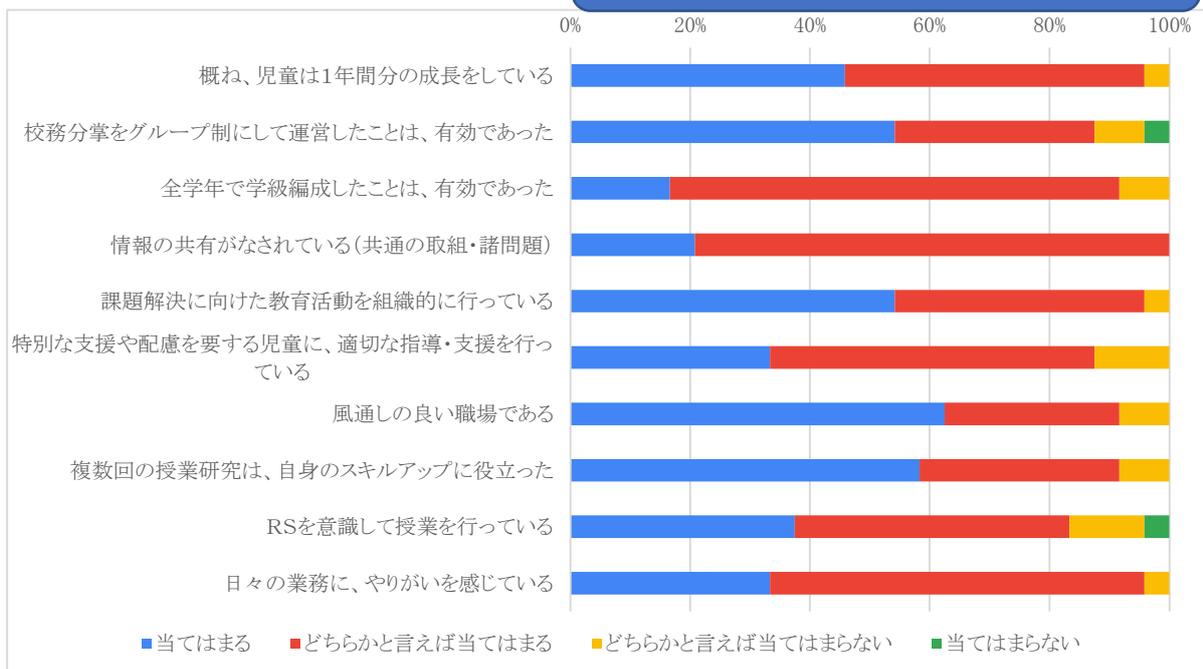
こんなふう凸凹が大きかったり、発達に課題を抱えていたりする子に対し、周りで関わる人間全員が同じ価値観や対応だと、収まるところがなく、はみ出る子が必ず出てきます。

モラルは社会で自立していくために、当然大切です。そして、そのモラルは社会に出る段階である程度確立している必要があります。小学生の現段階での優先順位は何かを考えると、凸凹のある自分を認めること・凸凹のある自分を受け入れられること・凸凹のある自分とうまく付き合えること→活躍できる場所を見つけるためにも、まずは学校と繋がっていることが大事だと考えます。

収まる居場所を提供する大人、モラルを教える大人、自分との向き合い方を教える大人、勉強を教える大人、凸凹に合わせて様々な役割分担があって良いのではないかと考えます。

資料7 令和6年度 学校経営・運営評価

令和6年度 学校経営・運営について、無記名で評価を受けた。次頁のとおり、具体的なコメントも受け付けた。



【学級編成】

○児童同士や教師と児童間のより良い関わりが生まれるため、毎年の学級編成は基本的に賛成だと考える。ただ児童同士に新しいつながりができて、悪い影響を与え合っている様子も見られる。慎重に行っていく必要がある。
○生徒指導面から見て、1年でのクラス替えは高学年では有効な面が多いような感じがする。

令和6年度 学校経営・運営評価で寄せられた主なコメント。●の課題については、令和7年度「校務分掌グループ」と「現職教育計画」に反映させた。

【校務分掌グループ制】

○校務分掌をグループ制にした事で、先生方の意見を聞くことができ、自信を持って運営を進めることができました。
○グループ制の運営は、来年度も継続して行うとよいと思う。
○校務分掌をグループ化することにより、業務を抱え込むことなく、共同的に取り組むことができました。
○グループ分けについて、グループによっては話し合う内容に軽重があり、それに合わせた人数の配置があると良いと感じました。グループで話し合う場が定期的にあったのは、共通理解を図る上で有効でした。
●教育調査部や合唱部についてもグループ制に加えて、複数人で対応できるようにしてほしい。(少数体制では対応できないため)

【特別な支援や配慮を要する児童への対応】

○保護者への対応を担当だけではなく、校長先生や教頭先生にも入っていたのは良かった。また、ケース会議を開いてもらったことも良かった。

【複数回授業研究】

○1人複数回研究授業は修正して授業改善ができたので良かったです。
●複数回の授業はスキルアップには良かったが、学年で互見授業の回数としては10回以上あり、自習体制をとるのは大変だった。出張等を考えると授業を進めたいところもあった。

【やりがい】

●業務にやりがいは感じているが多忙感もある。

令和6年度 学校経営・運営評価で明らかになった課題を反映させ、グループのカテゴリを若干修正するとともに、グループの配当人数に軽重をつけた。

資料8 校務分掌グループ

令和7年度 校務分掌グループ

1 校務運営委員会：校長・教頭・教務主任・学年主任・分掌グループ主任・養護教諭・主査

2 分掌グループ ※担当欄が「-」のところはグループ全員で担当、もしくはグループ内で協議して分担する

分掌グループ	A (6) S, K C, T, K 2, II	B (8 : 特支6) S 2, E	C (3) T 2, K 3, H	D (3) U, S 4, K 4	E (4) T 3, T 4 T 5, T 6	F (5 : 養護・栄養) H 2, K 5, W
教科	- 国語科 - 算数科 - 外国語	- 図画工作科	- 音楽科 - 家庭科	- 総合的な学習 - 生活科 - 社会科 - 理科	- 道徳科 - 特別活動	- 体育科
委員会	- 学力向上 - 現職教育	- 生徒指導 - 特別支援	- 防災教育 - 安全教育	- 地域協働連携 - 体験活動	- 学校評価 - 服務倫理	- 学校保健 - 給食食育
教育研究	図書館	- 生活指導 - 教育相談 - 人権	- 放射線	- 体験活動 - 環境(緑化・掲示) - 情報	- ボランティア - キャリア	健康教育 H2 体育 H3 保健 N 給食 W 清掃
教務	K2 教育調査評価	M 教科書		K4 学籍・統計		
行事	K 儀式	S3 遠足集団宿泊	K3 安全	U 文化		H2 健康体育 勤労生活部
PTA	- 教養	- 選管・地区	- 学年	- 環境	- 広報	- 厚生
児童会	- 図書	- 広報	- ベルマーク	- 園芸 - 放送	- ボランティア	- 運動 - 保健 - 給食
その他特活	-	-	T2 地区児童会	-	T6 クラブ活動	
渉外	S 指導員(RS) C 作文・感想文審査 T 学力向上(家学) S 小教研算数理事 K2 小教研英語理事	S2 学警選・生指担当者 M2 専門調査員	K3 防災担当 T2 相新音楽祭 - 安全確保連絡協議会	U 児童クラブバス U 市教研 K4 小教研社会理事 S4 小教研生総理事 K4 少年センター	T3 JRC T5 小教研学校委員	H2 相新体育大会 H3 スポーツ振興センター H3 PTA安全互助会
省令主任等	C 研修主任 K2 英語活動推進教師	S2 生徒指導主事 S3 特別支援コーディネーター		K4 地域連携推進	T5 道徳教育推進教師	W 保健主事 W 食育コーディネーター

3 合唱部 (T 2・T)

4 桜友会 (教頭・教務・T 7)、丘友会 (教頭・教務・S 5)、管轄 (K 6・S 5・教頭)

資料9 第1回運営委員会資料

4月運営委員会

2025年4月1日(火) 11:00～

1 協議事項等の提案について

(1) 基本的な流れ

- ① グループ会議→運営委員会→職員会議
- ② 管理職や学年主任・ブロック主任の事前協議が必要な案件は、運営委員会を通す。
- ③ 運営委員会(校長へ)・職員会議(教頭へ)の2日前までに協議案件カードと、当日までに協議関係文書を提出する。

(2) 協議内容の基本的な考え方

- ① ねらいを大切にしたい。→網羅せずに、ねらいを絞り込む。絞り込んだねらいが、その計画のオリジナリティを表現することになる。子ども達と共有できる文言で表現したい。
- ② きまり等は、一般化する以上は100%達成させる覚悟で、全教職員が一丸となって取り組みたい。(割れ窓理論) 達成できないと思うものは提示しない。最初は、必要最小限の徹底させなければならないものだけにしましょう。

(3) 各グループで強化していきたい内容

A	○授業力向上(複数回の授業研究→授業案の簡略化・事前研なし・自由参加) ●「さくらっ子賞」の企画・運営
B	○指導事項の徹底、情報の共有、特別な支援配慮を要する児童の居場所づくりや適切な就学指導
C	○危険予測・危険回避能力を育成するための各種訓練設定の工夫、子どもの安全確保連絡協議会を活性化
D	○外部人材(市学習支援ボランティア)の積極的な活用、故郷に愛着がもてる地域学習の積極的な導入 ●子どもの「よさ」が共有できる環境づくり
E	○児童会活動を軸に下学年児から憧れられる上学年児の育成(自治的自発的な児童会委員会活動・代表委員会を機能させる、縦割り班活動の有効活用) ●「よさ」の価値を広げ、自分の「よさ」に気付かせ、確かめる活動の工夫 ●「さくらっ子スマイルカンパニー」企画・運営
F	○縦割り清掃、自己管理能力の育成、記録への目標設定と累積を「よさ」に ●学校保健委員会を機能させる(虫歯治療・肥満指導)

(4) スケジュール

グループ	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
運営委	1, 2, 3, 4	9	2	7	-	5	6	7	8	13	13	-
職員会	1, 3, 7	23	13	18	25	12	17	17	23	23	20	25

年度のスタートは、

- 1 職員会議(学校経営方針の説明)
 - 2 運営委員会(グループ会議・運営委員会・職員会議について関係性の説明、各グループにおいて強化して取り組んでほしい内容依頼、スケジュール確認)
 - 3 グループ会議(第2回職員会議で提案する内容の協議、共有する内容の確認)
- とした。

★ この時の第1回運営委員会において、「さくらっ子賞」と「さくらっ子スマイルカンパニー」について、別資料を使って提案をした。



運営委員会



グループ会議 (A)



グループ会議 (B)



グループ会議 (F)



臨時学年主任会

教務主任が丁寧にコーディネートしてくれており、グループ会議当日にグループの代表に声をかけ、必須の協議内容や協議の場所を確認している。協議の場所は、職員室の黒板に板書して周知してくれているため、確実に運用されている。

さらに教務主任は、必要に応じて「臨時学年主任会」を設定し、教育活動の内容によってはより丁寧に調整をしてくれている。

資料10 職員会議要項

令和7年度 第5回 職員会議要項	令和7年6月13日(金)	令和7年度 第6回 職員会議要項	令和7年7月18日(金)
司会：教頭 記録：廣島	14:30~	司会：教頭 記録：舞木	13:00~
会議内容		会議内容	
<p>1 校長示達事項</p> <p>2 各グループより</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ Aグループ (通知表、学期末事務整理期間、1学期終業式、2学期始業式、市美展(書写)、夏休み課題(国語)等) ○ Bグループ (市美展(図工)、夏休み課題(図工)、見学学習等) ○ Cグループ (地区児童会等) ○ Dグループ (夏休み課題(理科作品展、相馬市発明展)等) ○ Eグループ (小教研一次研等) ○ Fグループ (美化活動等、夏休み課題(ごはんコンテスト)等) <p>3 連絡事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 7・8月の予定 ○ 夏休休業中の勤務計画 <p>4 その他</p>	校長	<p>1 校長示達事項</p> <p>2 各グループより</p> <p>※ 夏休み課題の提出方法について(A国語、B図工、D理科、Fごはんコン)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ Aグループ (1学期教育課程反省、市美展、QUTテスト学校訪問等) ○ Bグループ (見学学習、市美展等) ○ Cグループ () ○ Dグループ () ○ Eグループ () ○ Fグループ (2学期発育測定等) <p>3 連絡事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 夏休休業中の勤務計画 ○ 通知・通達(含服) <p>4 その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 現職教育部より 	教頭 教頭
<p>第6回職員会議 7月18日(金) 13:15~ 記録：舞木</p> <p>【内容】A(1学期教育課程反省、夏休み課題(国語)、QUTテスト学校訪問等)</p> <p>B(夏休み課題(図工)、見学学習等)</p> <p>C()</p> <p>D(夏休み課題(理科作品展、市発明展)等)</p> <p>E()</p> <p>F(夏休み課題(ごはんコンテスト)、健康診断票記入、2学期発育測定等)</p> <p>他(夏休休業中の勤務計画と服務・勤務等)</p>		<p>第7回職員会議 8月25日(月) 13:00~ 記録：高野</p> <p>【内容】※夏休み課題の提出確認(A国語、B図工、D理科、Fごはんコン)</p> <p>A(1学期教育課程反省、RST結果分析等)</p> <p>B(後期教科書配付、見学学習等)</p> <p>C(第3回遊離訓練等)</p> <p>D(さくらっ子発表会、PTA奉仕作業等)</p> <p>E()</p> <p>F(持久走記録会、就学時健診、WBC、小児生活病健診等)</p> <p>他(9月予定、ふるさとインターンシップ(大宮さん~9/12)等)</p> <p>○グループ会 9/5(金) ○運営委員会 9/8(月)</p> <p>資料の準備をお願いします</p>	

職員会議案件集約を教頭業務からグループ主体とした。これにより、要項作成を含めた職員会議にかかっていた教頭の業務を軽減することができた。

資料11 人事評価シート記入例

(様式 A) 令和7年度 人事評価シート (教諭 ステージ3)

所属コード	学校名	氏名	経験年数	主な校務	職任	今年度の主な校務分掌
			7桁で記入します。			
実績評価	学習指導	児童が目的をもって学校生活を送り、よさの価値を広げ、よさに気付けるようにするため、できた・分かった・成長をどのように実感させていくのか、それその立場で目標立案します。		採用となつてからの年数を記入します。また、休職、育休等で評価対象とならない年がある場合は、その年数を減じた年数を記入し、採用となつてから通算した年数を()内に記入することとします。【例:16(18)年】	自己評価は、設定した指標が達成できて「B」評価です。「A」評価は想定を大きく上回る結果につながった場合です。	一年間を振り返り、手立てを講じた結果、自己目標について自己評価する。その際に根拠とした主な内容の指標や資料など、具体的な評価根拠を示してください。
	生徒指導	●「学習指導」では具体的な授業づくりについて ●「生徒指導」では学年や学級経営について それぞれ求める理想を、手立てと区別して記入します。		自己目標案・手立てを記入し、面談を受け、必要に応じて修正等を加え今年度の目標・手立てとします。	一年間を振り返り、手立てを講じた結果、自己目標について自己評価する。その際に根拠とした主な内容の指標や資料など、具体的な評価根拠を示してください。	一年間を振り返り、手立てを講じた結果、自己目標について自己評価する。その際に根拠とした主な内容の指標や資料など、具体的な評価根拠を示してください。
能力評価	校務校務の通知管理	①分掌グループの活用・運営 ②不祥事防止		能力評価の評価項目並びに評価の観点については、年度当初に確認しておきます。	具体的にどんな手立てを講じ、評価を想定してどこまで(指標)もっていくのかを明確に2つ程度を記入します。 手立て：時間・場・設定、関わり・提示・活用、把握・評価、意図的な教師の仕掛け、、、	実績総合評価、能力総合評価は、それぞれの二次評価者の評価結果をポイントに換算し算出します。
	使命感・責任感	組織の中核としての自覚をもち、学校運営全体を見据えながら職務を遂行することができ、多様な考えを踏まえ、学校の教育目標が達成できるよう、調整・調整することができた。		自己評価の際に根拠とした、主な内容について、それぞれ記載します。	二次評価者は、教育委員会から評価の最終調整結果が届き次第、被評価者の人事評価シートに調整後の評価を記入します。	二次評価者は、教育委員会から評価の最終調整結果が届き次第、被評価者の人事評価シートに調整後の評価を記入します。
指導	課題解決力	課題解決に有効な企画を立案し、主体的に取り組むことができた。		被評価者は、期首・中間面談等で評価者より指導助言を受けた内容について、記入します。	一次評価者は、評価が終了したら記名し、二次評価者に転記し、人事評価シートを教育委員会に提出し、2年間保管します。	実績総合評価、能力総合評価の二次評価の平均を原則として総合評価を行い、記載します。
	指導力	高度な専門的知識をもち、児童生徒の学習を効果的に指導することができた。		一次評価者は、評価が終了したら記名し、二次評価者に転記し、人事評価シートを教育委員会に提出し、2年間保管します。	実績総合評価、能力総合評価の二次評価の平均を原則として総合評価を行い、記載します。	実績総合評価、能力総合評価の二次評価の平均を原則として総合評価を行い、記載します。
指導	意欲・向上心	学校の教育目標達成に向けて、主体的に取り組むことができた。		一次評価者は、評価が終了したら記名し、二次評価者に転記し、人事評価シートを教育委員会に提出し、2年間保管します。	実績総合評価、能力総合評価の二次評価の平均を原則として総合評価を行い、記載します。	実績総合評価、能力総合評価の二次評価の平均を原則として総合評価を行い、記載します。
指導	指導	指導		一次評価者は、評価が終了したら記名し、二次評価者に転記し、人事評価シートを教育委員会に提出し、2年間保管します。	実績総合評価、能力総合評価の二次評価の平均を原則として総合評価を行い、記載します。	実績総合評価、能力総合評価の二次評価の平均を原則として総合評価を行い、記載します。

福島県教育委員会が提示している「人事評価シートの記入例」に、青吹き出しを追加し、学校経営方針・重点目標との関連について整理して提示した。

評価者 校長 木村 裕之



1 学期終業式で発表 よいトイレの使い方を募集

トイレの使い方が乱れた時、これまでであれば犯人を捜したり正しく使うように全体指導をしたりしてきた。それが、「よい使い方」を児童に募集をした。多くの児童が反応をし、付箋紙に書き込んで投稿した。この取り組みにより、トイレの使い方が改善した。

資料 15 相馬市小・中学校いじめ調査

■ R7 いじめに関する調査票 (相馬市小・中学校)

		1 学期					現在の状況			計	
区分		4	5	6	7,8	計	解消 (観察中)	解消に 向けて 取組中	その他	計	
1	ひやかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる。					0				0	
2	仲間はずれ、集団による無視をされる。					0				0	
3	軽くぶつかられたり、遊ぶふりをしてたかれたり、蹴られたりする。					0				0	
4	ひどくぶつかられたりたたかれたり、蹴られたりする。					0				0	
5	金品をたかられる。					0				0	
6	金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする。					0				0	
7	嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする。					0				0	
8	パソコンや携帯電話等で、ひぼう・中傷や嫌なことをされる。					0				0	
9	その他()					0				0	
	その他()					0				0	
計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	

○ いじめの認知件数、現在の状況を記入してください。

○ いじめの定義はいじめ防止対策推進法によるものです。

○ 「区分」「現在の状況」は、変容を捉えるため昨年度と同じ調査項目にしております。

○ 令和2年4月からの件数です。発生した月に件数を記入してください。

○ 「区分」が複数になる場合は、主な区分でカウントしてください。(複数選択不可)

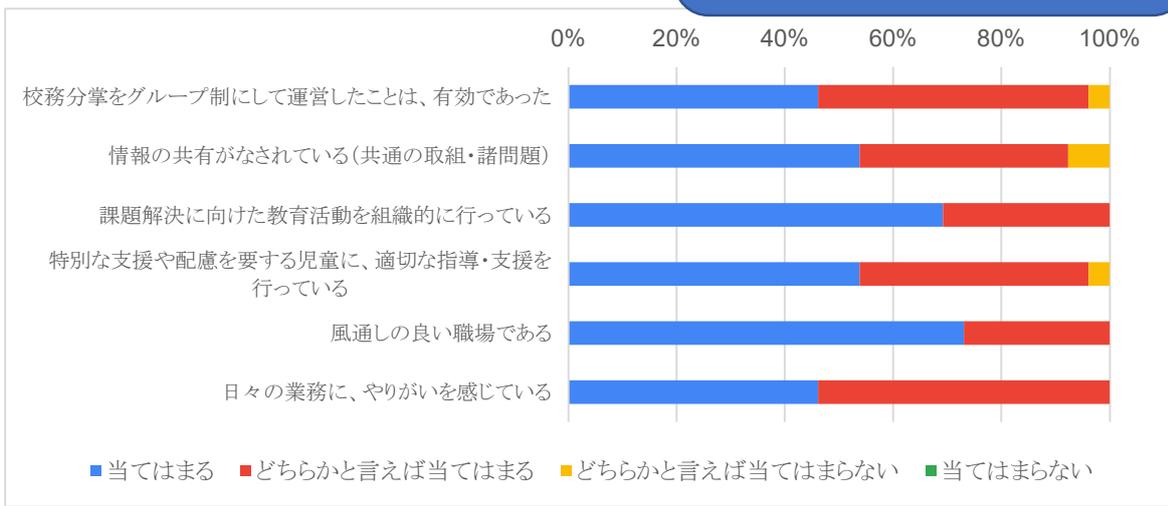
○ その他の欄が不足する場合は、行を追加して記入してください。

○ 「現在の状況」は、提出した時点での状況です。1学期に「取組中」だったが2学期に末には解消となった場合は2学期の提出時点で「解消」に変更する必要があります。

○ 提出バ切：1学期7月25日(金)、2学期12月25日(木)、3学期3月19日(木)

資料 16 令和7年度1学期 学校経営・運営評価

令和7年度7月実施。学校経営・運営について、無記名で評価を受けた。前年からの変容だけでなく、年度内の変容も確認して評価の精度を高めるために実施した。



参考資料
「Society 5.0 に向けた人材育成 ～ 社会が変わる、学びが変わる ～」 Society 5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会 新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース
「第7次福島県総合教育計画」福島県・福島県教育委員会

研究主題

運動の楽しさや喜びを仲間と共に育ていく体育学習

～運動が苦手な児童に視点を当てた、指導と評価の一体的な充実を目指して～

西郷村立羽太小学校 教諭 若松 優

I 研究構想

1 研究主題の理由

(1) はじめに

「僕は体育の授業が大嫌いです。体育の教師も嫌いです。なぜあなたたち体育教師は僕達にクラスメイトの前で恥をかかせようとするのでしょうか？手本のように上手に出来なくてまるで死にかけの虫のようにバタバタと手足を動かす僕をクラスメイトは笑う(略)」これは、2019年3月号大修館書店「体育科教育」に掲載された音楽クリエイター、ヒャダインさんのエッセーである。この文章を読んだとき、なぜか鳥肌が立った。恐らく、自分の小さい頃の経験や、教師となってからの指導を瞬時に振り返ったからだ。本当に児童たちが楽しいと思える体育の授業をすることができているのだろうかと自問自答した瞬間だった。

現代においては、運動習慣のある児童とそうでない児童の二極化が進んでおり、体力の差が教育や生活全体に影響を及ぼしている現状がある。このような中で、教育のあり方も大きく変化しており、OECDが提唱する「ラーニング・コンパス 2030」では、子ども一人一人が自らの人生を主体的に切り拓くための資質・能力、すなわち「エージェンシー」の育成が強調されている。また、我が国の学習指導要領においても、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指し、すべての児童に学びに向かう力を育むことが求められている。

本研究は、児童が主体的・協働的に学び合う授業を創る過程において、体育科に苦手意識をもつ児童に視点を当て、それらの児童た

ちが安心して運動に取り組み、自らの変容を実感でき、結果として個々の児童の自己実現につなげていくものである。

(2) 児童の実態から

福島県教育委員会が公表した令和6年度全国体力・運動能力調査（以下、体力テスト）における児童生徒質問紙調査では、図1のような結果が示され、いくつかの課題が明らかとなった。

	運動やスポーツをすることは「好き」	体育の授業は「楽しい」
全国	64.0%	67.3%
福島県	61.3%	65.8%
本校	61.5%	63.5%
本学級	67.5%	63.5%

図1 質問調査結果（男女平均）

本学級の児童は、「運動やスポーツをすることは好き」と回答した割合が最も高く、運動に対する肯定的な意識は強いことが分かる。しかし一方で、「体育の授業は楽しい」と感じている児童の割合は、全国・県平均を下回っており、授業そのものの楽しさを十分に実感できていない現状が浮かび上がった。児童に話を聞くと、「体育では自分の好きな運動ができるとは限らないし、好きな友達と同じチームになれるわけでもないので、楽しいとは言いきれない」との声があった。また、運動の得意・不得意の差に加えて、仲間との関わり方が分からない児童も見受けられる。これらの結果から、本学級の課題として、運動が苦手な児童に対して「運動の楽しさや喜び」、そして「仲間と学び合うことのよさ」をどのように実感させていくかが重要であることが明

らかになった。当該学級の児童は当年度から初めて担任した児童であり、調査実施は6月と年度の序盤だった。だからこそ、これからの授業を通して「運動が大好き!」と児童たちが心から思えるようにしていくことを、本研究の目標とした。

2 研究主題について

(1) 「運動の楽しさや喜び」について

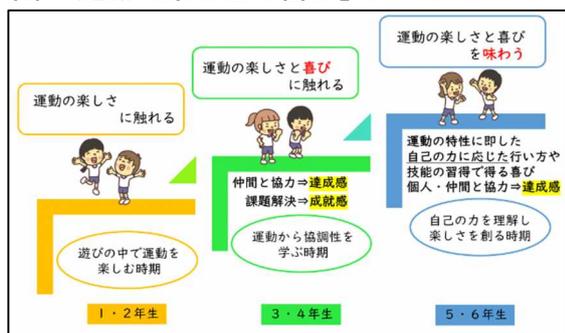


図2 運動の楽しさや喜びの系統性 **資料1**

学習指導要領解説では、運動の楽しさや喜びを発達段階に応じて図2のように系統的に捉えている。第1・2学年では、運動遊びを通して多様な動きを楽しく体験し、自然と基本的な動作や体力の向上を図ることがねらいである。第3・4学年では、単なる楽しさに加えて、課題を見つけて解決する中での達成感や達成感が重視される。さらに第5・6学年では、自分の役割を意識しながら運動に取り組む中で、自己に応じた動きの工夫を通じて喜びを味わうことが求められる。

(2) 「仲間と共に育んでいく」について

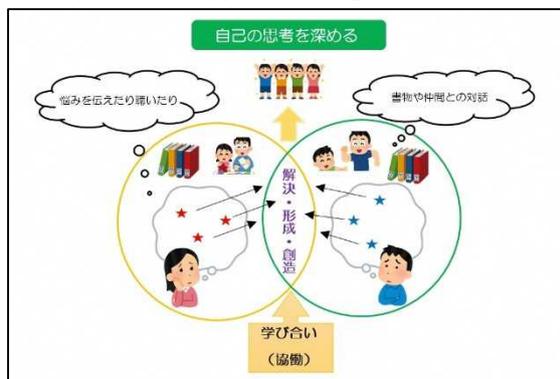


図3 対話的な学びのイメージ **資料2**

解説(第3・4学年)には、「良好な人間関係が運動の楽しさや喜びに大きく影響し、仲間と意思決定に関わることで、運動やスポー

ツの意義・価値への理解が深まる」とある。まさに、「好きな友達と…」という児童の声にみられるように、人間関係の形成は体育科においても重要なテーマであり、図3のような多様な関わり方に工夫が求められる。

(3) 「運動が苦手な児童に視点を当てた、指導と評価の一体的な充実」について

本研究では、運動が苦手な児童の学びを中心に据え、指導と評価の結びつきについて考察する。こうした児童は、比較や失敗への不安から、運動に対して苦手意識をもちやすい。そのため、「できた」「わかった」と実感できるような肯定的な経験を積み重ねることが重要である。教師は技能の成果だけでなく、努力や工夫の過程にも目を向け、児童一人ひとりの成長を丁寧に評価する必要がある。その際には、声かけや活動内容の調整などを通して、授業の中で柔軟に支援を行うことが求められる。このように、教えること(指導)と見とる・認めること(評価)を一体的に行うことで、すべての児童が安心して学びに向かい、自らの成長を実感しながら運動への意欲を高めることができると考える。

3 研究仮説

運動が苦手な児童の学びを中心に据え、指導と評価を一体的に捉えた授業改善を重ねることで、運動の楽しさや喜びを実感できる児童を増やすことができるだろう。

4 研究の内容

(1) 対象児童

本研究の対象は、第4学年59名の児童である。このうち、運動に対して苦手意識をもつ2名を抽出し、授業中の行動観察や授業後のインタビューを通して、仮説の検証に迫る手立てについて考察を行った。

○ A児(男子)について

体力テストは1年生から3年生まで「D」、4年生では「E」とやや低下傾向にある。質問

紙調査では、4年生6月時点で体育の授業をあまり楽しく感じておらず、コツやポイントもつかめていないことが分かった。休み時間は主に教室内で過ごすことが多い。一方で、運動が体によいことは理解している。

○ B児（女子）について

体力テストの結果は、1・2年生が「C」、3年生で「E」、4年生で「D」とやや変動がある。体育の授業に対する印象は年度によって異なるが、1年生の頃から継続してコツをつかめていない様子が見られる。学年が上がるにつれ、休み時間の過ごし方も教室内が中心となっている。運動の健康効果については理解している。

(2) 実施単元

〈体育領域〉
・ C 走・跳の運動 エ 「高跳び」
・ E ゲーム ネット型ゲーム 「キャッチバレーボール」
〈保健領域〉
・ G 保健 (イ)1日の生活の仕方
「運動、食事、休養及び睡眠の調和のとれた生活」

(3) 使用機器、アプリケーション

Apple社 iPad、(株)Loilo ロイロノート

(4) 仮説検証にせまる手立て

本研究では、運動が苦手な児童の学びを中心に据え、指導と評価の結びつきについて考察する。そのため、「できた」「わかった」と実感できるような肯定的な経験を積み重ねることが重要である。教師は技能の成果だけでなく、努力や工夫の過程にも目を向け、児童一人ひとりの成長を丁寧に評価する必要がある。その際には、声かけや活動内容の調整などを通して、授業の中で柔軟に支援を行うことが求められる。

具体的な手立てとして、以下の3点を講じ、授業の質的改善に努めた。

① 対話的な学びを通して、自己の思考を広げ深める工夫（児童）

ICTを活用した自己振り返りの場面や、仲間と協力して課題を解決する活動を意図的に

取り入れ、児童が多角的かつ主体的に思考を深められるよう工夫した。

② 学習カードの工夫（児童）

体育領域では、E-Assessmentシートを導入した。このシートは、ロイロノートの共有ノート機能を用いて、自分の動きを仲間リアルタイムで評価してもらい、その後自己評価を行う流れで活用する。他者の評価と自分の評価の「ずれ」に気付くことで、自身の課題を明確にし、次の問題解決へと主体的に取り組むことを促す。高跳びの授業ではリアルタイムで、キャッチバレーボールの授業では各時間の振り返りとして活用した。

③ 単元構想図と自己評価（教師）

図4 単元構想図 資料3

図4のように単元構想図を作成し、単元の目標を基準に評価基準を細分化し、授業のポイント、単元の計画、評価の計画を一枚のシートにまとめた。これにより、教師が単元全体の見通しをもちながら、計画的に授業を構成できるようにした。教師自身の振り返り欄を設け、授業計画と実際の授業を見つめ直し、次時の授業改善へとつなげる。これは教師も自己との対話を通して、指導と評価を一体として捉え直す取り組みである。ふくしまの「授業スタンダード」に示されているチェックシートの内容項目を活用し、単元終了時に教師が自己評価を実施した。評価結果をグラフ化することで、次単元に生かす授業改善の手がかりとした。ICT活用の視点や児童の実感に関わる視点を反映するため、「ICTの活用

図8は、キャッチバレーボールの単元構想図である。本単元は、全8時間で構成し、児童が段階的に技能や戦術理解を深めながら、仲間と協力して学び合えるように計画した。単元の終末(7・8時間目)には、これまでの学びを生かして「キャッチバレーボール大会」を開催し、チームで戦術を立てて試合に臨む中で、成果と課題を実感できるようにした。各時間では、技能の習得だけでなく、「振り返り」による学びの深化を重視した。具体的には、毎時間の最後に個人の振り返りを行うとともに、チーム内でのミニミーティングの時間を設け、戦術面や動き方、連携の取り方について対話的に振り返らせた。これにより、児童たちが自分自身の課題を発見し、それを次の時間のめあてにつなげていく学習のサイクルを意識的に構築した。単元を通しては、ボール操作そのものよりも、ボールを持っていないときの動きに着目させること、そして一部の児童だけが活躍するのではなく、チーム全体で協力して得点を目指す展開を重視した。また、自分の動きやプレーを振り返りながら課題を明確にし、その改善に向けて次の時間につなげる学習の流れを意識づけた。

3 手立てを生かした実践の展開と考察

① 対話的な学びを通して、自己の思考を広げ深める工夫



写真3(左)・4(右) ミニミーティングの様子

写真3・4は、児童が作戦や新しいルールを考えたり、授業の振り返りでMVPを決めたりしている様子である。チームで行う運動には、自分の課題を解決するだけでなく、仲間と協力してチームの勝利を目指すという側面がある。その中で、仲間と声をかけ合いながら自然に生まれる対話は、体育科における

対話的な学びの大きな魅力である。本実践では、対話を促すために、授業中に「ミニミーティング」を意図的に取り入れた。ここでは、互いの得意なことを認め合いながらチームの動きを話し合う姿が見られた。児童自身が感じたルールの違和感や、技能レベルに応じたルール構成への意見も活発に出され、それを全体で共有しながら、ルールの改善を児童たちとともに行った。こうした話し合いの積み重ねが、運動の見方や考え方を広げ、学習への主体的な関わりにつながっていった。また、運動が苦手な児童の自己肯定感を高めていくことにもつながっている。

② 学習カードの工夫(ロイロノート)

【キャッチバレーボール】

〈自分の課題〉
例:〇〇の時の〇〇が苦手なところ

打つ時の打つ事が苦手なところ

【チームのよかったところ】
例:〇〇の時に〇〇をしたことによって、みんなが協力して、〇〇作戦を決めることができた、など

アタックの時に声を出して決める事が出来た。

【今日のMVP】
A さん

〈今日のめあて〉
例:〇〇の時に〇〇をすることができるよう〇〇に気をつけてゲームをする。

投げる時に投げられる様にボールをちゃんと見て、ゲームをする。

評価する人の名前	評価(◎・○・△)
自分	◎

【評価の理由と次に向けた】
例:〇〇の時に〇〇をしたことにより、〇〇ができた。次は、〇〇を〇〇していくことでもっと点を取ることができるようになりたい、など

先生は後ろに居るといいと言っていた為、それを逆手にとって手前に向けて投げたら得点を取ることが出来ました。次は打って得点を取りたいです。

図9 B児学習カード 資料7

本単元では、児童の思考を可視化し、学びを深める手立てとして、ICTを活用した図9の学習カードを段階的に4パターン使用した。単元の進行に応じてカードの内容を発展的に構成し、児童たちの学びを継続的に蓄積できた。ICTの活用により、学習カードはその都度修正・更新が可能で、児童一人ひとりの成長の軌跡を反映させやすい点が大きな利点であった。記述内容にも工夫を加え、「自分の課題とめあてを連動させること」や「自己評価の理由や次に向けた意気込み」を書かせることで、単なる振り返りにとどまらず、次の学習への展望をもたせることができた。さらに、振り返り用の学習カードには「作戦のねらい」や「仲間のがんばり」を書く欄を設けたことで、個人の視点に加えてチーム全体へのまなざしを育むことができた。これにより、思考

を整理しながら共有し合う中で、対話の質も向上し、チーム全体の一体感が生まれた。こうした学習カードを通じた継続的な振り返りと対話は、運動に苦手意識をもつ児童にも自分の成長を実感させ、仲間との関係性の中で自らの役割を見出すきっかけとなった。結果として、多くの児童が体育の学びに前向きに関わる姿が見られるようになった。

③ 単元構想図(2を参照)と自己評価

体育領域「キャッチボール」		チェック
1	単元(題材)の構想を明確にしている。	4
2	単元のねらいを明確にしている。	3
3	授業的ねらいや学習のねらいを明確にしている。	4
4	子どもの「問い」や「問い」を「問い」し、学習課題を設定している。	3
5	子ども一人一人に発達・理解の程度や発達を促している。	3
6	仲間関係を子どもも築き、協力し支えている。	2
7	ペア学習やグループ学習を取り入れる目的を明確にしている。	3
8	単元的ねらいを達成できるように学習をコーディネートしている。	3
9	単元で学習したことを振り返りし、振り返りを実施している。	3
10	優れた学びが目を見せられる機会になっている。	4
11	授業の進め方が分かり、構成が明確になっている。	3
12	仲間を励ましたり褒めたりしている。	3
13	ノート指導を継続的にしている。	4
14	ICT活用が効果的であり、児童が積極的に活用している。	3
15	「運動が楽しい」と思える授業展開、学び合いになっている。	3

図10 自己評価シート 資料8

図10に示す自己評価シートを用いて、単元終了後に自己評価を行った。単元の構想や目標は明確で、見通しをもった計画に基づいて指導できた点は評価できる。特に、導入時に「どんな自分・チームになりたいか」を問いかけ、児童の声をもとに学習課題を設定できたことは、主体的な学びにつながった。振り返りでは、「作戦のねらい」「仲間のがんばり」「自己評価とその理由」を書かせることで、児童の思考を可視化し、対話の質も高まった。ICTを活用した学習カードの継続的な活用や更新は、児童の課題意識とめあてを結びつける点で効果的だった。今後は、机間指導や問いの工夫をさらに高め、児童の主体的な学びを支える授業改善を追求していきたい。

【実践3】保健領域

・G 保健 (イ)1日の生活の仕方
「運動、食事、休養及び睡眠の調和のとれた生活」

1 授業テーマ

体をよりよく発育・発達させるための生活の仕方について理解し、これからの生活への意識を高めることができる授業

2 単元構想

単元	学習目標	学習内容	学習活動
【学習のねらい】 【単元目標】 【学習目標】 【学習内容】 【学習活動】 【学習評価】	1. 体の発育・発達について、年齢や個人差による変化や個人差について理解し、健康な生活習慣を養う。 2. 体の発育・発達について、年齢や個人差による変化や個人差について理解し、健康な生活習慣を養う。 3. 体の発育・発達について、年齢や個人差による変化や個人差について理解し、健康な生活習慣を養う。	1. 体の発育・発達について、年齢や個人差による変化や個人差について理解し、健康な生活習慣を養う。 2. 体の発育・発達について、年齢や個人差による変化や個人差について理解し、健康な生活習慣を養う。 3. 体の発育・発達について、年齢や個人差による変化や個人差について理解し、健康な生活習慣を養う。	1. 体の発育・発達について、年齢や個人差による変化や個人差について理解し、健康な生活習慣を養う。 2. 体の発育・発達について、年齢や個人差による変化や個人差について理解し、健康な生活習慣を養う。 3. 体の発育・発達について、年齢や個人差による変化や個人差について理解し、健康な生活習慣を養う。

図11 単元構想図 資料9

図11は、体の発育・発達の単元構想図である。全4時間で構成され、発育・発達に関する理解を深め、健康な生活習慣を考える力を育てることをねらいとしている。第1時では、年齢に伴う体の変化や個人差について学び、第2時では思春期の変化とその個人差から課題を見つける力を養う。第3時では、よりよい成長のための生活の工夫を考え、第4時では、運動・食事・休養・睡眠の大切さについて理解を深める。授業では、養護教諭の話を取り入れて学びにリアリティをもたせ、児童自身が事前に記録した1日の生活と比較しながら生活習慣の改善点を考えた。ロイロノートを活用して学習カードを記録・蓄積できるようにし、「気づき→行動の見直し→改善」につなげることで、内省と主体的な学びを促進した。

3 手立てを生かした実践の展開と考察

① 対話的な学びを通して、自己の思考を広げ深める工夫



写真5(左)・6(右) グループワークと全体共有の様子

写真5は、児童が自分たちの考えを画用紙に書き込みながら意見を整理している様子である。近年はICTの活用が進んでいるが、グ

ループワークにおいては、画面上での個別作業に偏り、対話が生まれにくくなるという課題もある。そこで本実践では、ICTのみに依存せず、アナログな活動（画用紙への共同記入）を意図的に取り入れることで、児童同士の対話が深まり、思考の共有と発展が促進されることが分かった。写真6のように、A児は仲間との対話を通して自分の考えを整理し、健康的な生活について自分の言葉で語ることができた。これは、対話的な学びによって自信をもって意見を発信できたと言える。対話に基づいた学びは、運動が苦手な児童にとっても安心して参加できる環境づくりにつながり、学習の主体性や表現力の向上にも寄与することが確認できた。

② 学習カードの工夫（ロイロノート）

今回は、学習カードとしてロイロノートと紙の両方を併用し、それぞれの特性を生かした工夫を行った。紙媒体では、授業内容の理解を深めるためにキーワードを分類・整理させたり、重要な語句を空欄にしたりする形式を取り入れた。ロイロノートでは、事前に記入していた1日のスケジュールをもとに、学習内容を反映させた理想の生活を再構成させた。これにより、児童は「自分の生活を自分でデザインできる」という感覚をもち、学んだ知識を実生活に生かそうとする意識が高まった。A児は「夜更かしをやめて早く寝ることを意識したい」と記録に記すなど、ICTを通じた振り返りが行動意識の変容にもつながっていた。知識の整理と思考の応用を目的別に分けて取り組ませることができた。

③ 単元構想図（2を参照）と自己評価

図12に示す自己評価シートを用いて、単元終了後に自己評価を行った。本単元では、児童が自分の生活を見直し、健康的な生活習慣を身に付けることを目指して指導を行った。自己評価の結果から、児童の実態に応じた教材提示やICTの活用には一定の成果が見られたが、行動の変容に結び付ける終末の計画

保健領域「運動、食事、休養及び睡眠の調和のとれた生活」		チェック
1	単元（題材）の構成を明確にしている。	4
2	目標のねらいを明確にしている。	3
3	授業のねらいや学習のねらいを明確にしている。	3
4	子どもが「思い」や「感じ・観」を引き出し、学習課題を設定している。	3
5	子ども一人一人に状況・解決の経路や見通しをもたせている。	3
6	民間団体で子どもを支援し、適切に実施している。	3
7	ペア学習やグループ学習を取り入れる前段階を明確にしている。	4
8	本時のねらいに合うように適切なコーディネートしている。	3
9	本時で学習したことを明確にし、振り返りを工夫している。	3
10	前次学習の振り返りをもとに学習を進められている。	2
11	授業の進捗が分かり、構成的な授業になっている。	3
12	評価し、達成された学習をしている。	3
13	ノート指導も積極的にやっている。	3
14	10分間の授業によって、児童が学習の楽しさを感じ、興味をもっている。	2
15	「運動が楽しい」と思える授業環境、学び合いになっている。	3

自己分析（ピックアップして）

【10】
 授業になるためには、食事、睡眠、運動が必要であることは押さえることができたが、次に何をしていこうかということでは、もっと工夫を出しても良かった。例えば、家庭との連携を図って自分手帳を活用する。

【14】
 ICT活用を活用することで保健の授業で本当に重要だったかと問われると、少し悩ましいところもある。履き足で学習しても同じであるように感じた。コーディネートとし

図12 自己評価シート **資料10**

や個別の支援については、さらなる工夫が必要であると感じた。特に、ロイロノートと紙の学習カードを併用し、「知識の整理」と「実生活への転移」という評価視点を明確にしたことで、児童一人ひとりの思考の可視化と変容の把握につなげることができた。一方で、児童が自身の課題をより実感し、改善につなげるには、振り返りの質を高める手立てが、さらに必要である。今後は、児童の変容を見取りながら、評価結果を指導に即時に還元し、評価を活かした授業改善サイクルを意識した単元づくりに取り組んでいきたい。本実践では、T2として養護教諭が学校の健康課題を共有し、専門的な視点から肥満や生活習慣に関する話をしたことで、児童一人ひとりが「自分ごと」として健康を捉えるきっかけとなり、学習への関心や意欲を高めることにつながった。特に、A児やB児のように運動に苦手意識をもつ児童にとっては、「生活を整えることが健康につながる」という視点に立ち、学習を通して、「健康は運動が得意かどうかだけでなく、生活習慣の積み重ねが大事」だと気づき、自分にできる改善点を具体的に考えるようになった。例えばB児は、「夕食後にだらだら過ごす時間を減らして少し体を動かしたい」と話すなど、学んだことを日常生活に結びつける姿が見られた。このような行動の見通しをもたせる終末の計画が、学びの転移に重要であると実感した。今後は、学びを日常の行動へとつなげる終末の計画と、ICTの活用を通じた継続的な振り返りの仕組みづくり

に取り組んでいきたい。

III 研究のまとめ

1 A児とB児のインタビュー調査から

A児・B児は、事前調査において「体育は楽しくない」「コツやポイントつかめていない」ということが分かっており、運動に対する自信や意欲が乏しかった。そこで本実践では、対話的な学びとICTの活用を中心に据え、児童が自ら気付き、学び合うことを通じて「できた」「わかった」と成長を実感できる授業を構成してきた。高跳びの単元では、ゴムバーや個別に調整可能な高さを用いて心理的負担を軽減し、「自分にもできそう」という手応えを得やすい環境を整えた。さらに、動画を使って自分や仲間の動きを見合いながら、良さや課題を言葉にする活動を取り入れた。対話を通して課題を共有し、自分の跳び方に自信がなかった児童も安心して挑戦する姿が見られるようになった。キャッチバレーボールの単元では、チームでの作戦会議や役割分担を通じて、自然と対話が生まれる環境を整えた。仲間と協力しながら試合を進める中で、運動への抵抗感が薄れ、評価活動やミニミーティングを通して自分の成長や課題を実感する様子が見られた。A児は、「みんなと一緒に体育ができるのは楽しい。」と語り、B児も「苦手だったけど前より楽しめた。」と話しており、対話や協力を通じて、運動に対する意識がポジティブに変容していたことがうかがえた。保健の単元では、紙とロイロノートを併用した学習カードを活用し、自分の生活を見直す活動を行った。ICTによって日常の生活リズムが可視化され、さらに養護教諭による専門的な話を受けることで、「運動が得意でなくても健康づくりはできる」という実感をもつ児童が増えた。B児はインタビューで、「夜のだから時間をやめて少し体を動かすようにしたい」と具体的な行動の見通しを語っていた。こうした実践を通じて、2人の児童からは

「仲間と学び合いながら、自分なりにできることを増やせた」「運動が苦手でも工夫すれば成長できる」という前向きな言葉が聞かれ、自己肯定感の高まりと学びの主体性の高まりを感じた。これらの変化は、対話的な学びとICTの活用を柱とした授業が、児童に安心と意欲をもたらしたことの表れである。一方で、すべての単元において「学んだことを次の行動へどうつなげるか」という終末の計画や、ICT活用の目的をより明確にする必要も課題として残った。今後は、振り返りや対話の質をさらに高め、児童が学びを自らの生活に活かせるような授業づくりを継続していきたい。

2 教師の自己評価から

項目	考察とアドバイス
単元の構成	題材のねらいが明確で、基礎をもった計画ができており、学習設計の基盤が安定しています。子どもの実態に合った学習構成が構築されていると評価できます。
本時のねらい	授業のねらいは明確ですが、ねらいを子どもに実感させる「問い」や活動設計の工夫がさらさらと表れていません。
学習への導入の指導	安心・安全な学習環境の整備ができています。子どもたちが落ち着いて活動に向かえる指導ができています。
子どもの問いを活かした課題設定	子どもの問いや気づきから学習課題をつくらうという意識が見られます。導入での「問い」の引き出し方を明確にするように良く学びます。
見直しをもたせた学習計画	見直しはある程度はとられていますが、活動中に子どもが「どう動けばいいか」を待つ工夫がさらさらとあると評価できます。
仲間指導と支援	仲間指導が期待できる項目です。子どもの様子を見ながら、個別に声をかけたり動きをフィードバックする必要がある点があります。タブレットの動画機能なども支援に活用可能です。
ペア・グループ学習の整頓	個別的な学習を集団的に取り入れています。学習の「意味」や「役割分担」を明確にすることで、より深い学び合いが期待できます。
話し合い活動の工夫	話し合いを通じた学びを深めるようする場面は見られますが、話し合いの「問い」や「無言化」に課題が見られます。話し合いの質を高めたいと意欲が感じられます。
学習の振り返り	単なる「楽しかった」「学んだ振り返り」ができるよう、「今日のわかったこと」「うまくいったこと」「成長が学んだこと」などの視点を設定すると良いでしょう。

※ 指導者としての評価・助言

◎ 総合評価：3（概ね実用されている）
 単元設計や活動のねらいにおいては、意図がはっきりしており安定感があります。子どもの思考を深める「問いづくり」、仲間指導の工夫（個別指導）**については、今後の授業改善の重要な視点です。タブレット端末等のICTを活用し、動画による振り返り・ペアでのフィードバックなどを取り入れることで、指導と学びの質の両面を高めることが期待されます。

※ 次のステップに向けての提案
 ** ICTの導入：動画撮影→振り返り→タブレットでのやりとりで、積極的に授業を振り返ることが期待されます。
 ** 仲間指導の強化：観察ポイント（例：促している場所に動いているか、パスを呼んでいるか）を明確にし、観点をもちて声をかけます。

図13 自己評価シートAI分析 **資料11**

「運動の楽しさや喜びを仲間と共に育む」ことを目指し、特に運動が苦手な児童に焦点を当てて授業づくりを行ってきた。その際、指導と評価を一体的に捉えることを重視し、単元ごとに明確な評価目標を設定するとともに、児童の変容を見取る評価と教師自身の指導を振り返る評価の両面を計画段階から位置付けた。授業後には自己評価を行い、その結果を客観的に振り返る手段として、AI(ChatGPT)による分析を活用した。図13は、各単元の自己評価結果をChatGPTに分析させたものであり、定性的な気付きや評価観点の偏り、改善の視点を整理するうえで有効であった。AIによる分析を通して、自己評価の傾向を可視化できたことで、単なる感想にとどまらない振り返りへとつなげることができた。

このように、指導と評価を分けずに一体的に捉え、PDCA サイクルを教師自身が回していくことで、運動が苦手な児童も含め、すべての児童が運動の楽しさを実感できる授業の実現に近づくことができたと考える。今後も、自己評価に AI の視点を取り入れながら、より客観性のある授業改善を継続していきたい。

3 研究の総括とこれからの展望

本研究では、「運動が苦手な児童に視点を当て、運動の楽しさや喜びを仲間と共に育む体育学習」をテーマに、実践を行った。いずれの単元でも、児童が互いを認め合い、支え合いながら自信をもって学びに取り組む姿を目指し、指導と評価を一体として捉えることを軸とした授業計画を重視した。

【キャッチバレーボール 段階別評価】
十分満足できる姿 (A)
【知・技】 ◎キャッチバレーボールの行い方について、友達に詳しく伝えたり学習カードに詳しく書いたりしている。また、ボールの行方をよく見て移動してキャッチしたり、スペースを認識してアタックして相手のコートに運んだり、ボールを操作できる位置に体を移動するなど、ボールを持たないときの動きもできている。
【思・判・考】 ◎運動が苦手な友達でも楽しくゲームに参加できるように、規則の工夫を自分事として考え、ボールを持っている人と持っていない人の役割をゲームの特性に応じて選び、根拠を明確にして作戦を立てたり、その考えを友達に詳しく伝えたりしている。
【注】 ◎ゲームに意欲的に取り組もうとし、規則を守って誰とも仲よくしながら、進んで用具の準備や片付けを友達と協力して行い、勝敗を受け入れ、友達の考えを認め、場や用具の安全を確認するよう努めている。

図 14 段階別評価 資料 12

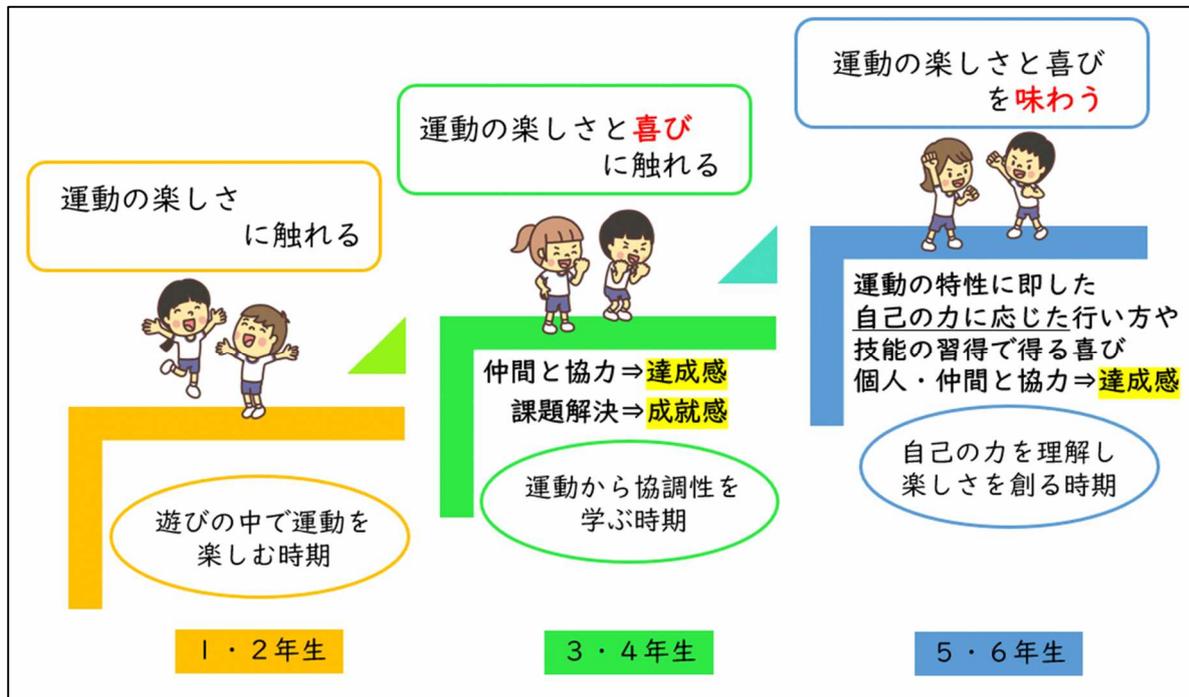
図 14 に示すように、「十分満足できる(A)」「満足できる(B)」などの評価基準を単元の初めに作成した。単元初めにゴールを示したことで、児童が自分の現在地と目標を明確に意識しながら活動に取り組めるよう工夫した。これにより、児童は単に運動をこなすのではなく、目的意識をもって「なぜ」「どうすれば」と考える姿勢が育まれていった。また、授業後には教師自身も自己評価を実施し、AI (ChatGPT) による分析を活用することで、主観に偏らない客観的な授業の振り返りと次時への改善を行った。実際に、運動に苦手意識をもっていた A 児や B 児が、学習カードを通して自分の課題や努力を言語化し、仲間から認められる経験を重ねる中で、「運動って楽しい」「またやってみよう」と前向きな気持ちを語るようになった。こうした肯定的な感情の積み重ねが、自己肯定感の高まりや運動へ

の主体的な参加につながっていたと捉えている。また、それは他の児童にも波及し、学年全体が互いに認め合いながら学ぶ雰囲気へとつながっていった。

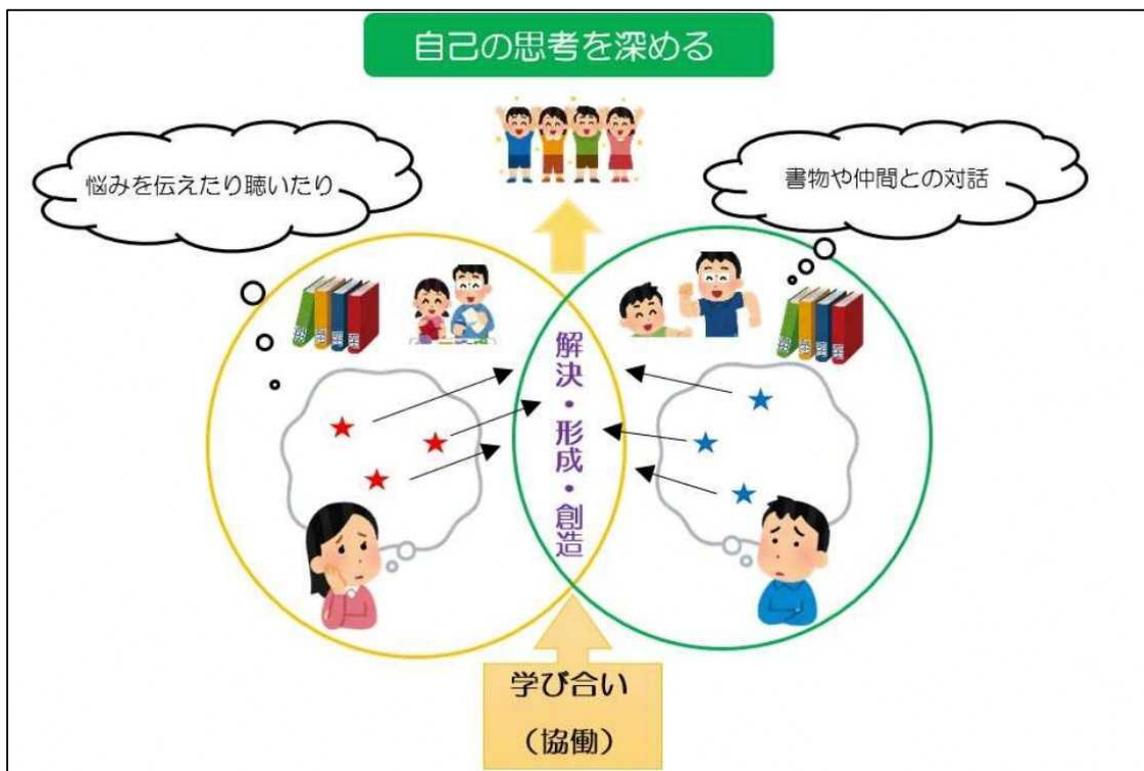
今後は、技能の評価にとどまらず、「する(やってみる)」「みる(他者を見つめる)」「支える(関わる)」「知る(意味を理解する)」という多面的な視点から、児童一人ひとりのよさを認め、学びの価値を広げていく評価の在り方を追求していきたい。また、ICT 活用においても、記録や振り返りだけでなく、「比較・共有・助言」など、学びを可視化し、深め合う手段としての活用をさらに工夫していく必要がある。これからの体育科の授業に求められるのは、単に運動量や技能の習得にとどまらない。「考え、学びを追究していく体育」を通して、児童が心身の両面から成長し、よりよく生きようとする力を育むことが重要である。特に、運動が苦手な児童や不安を抱える児童にとって、安心して挑戦し、学び合える環境は、ウェルビーイング実現に向けた土台となる。体育で得た学びが、授業内にとどまらず日常生活や将来のスポーツライフへとつながっていくような転移を意識した授業構想が、これからの体育にますます求められるだろう。そして、教師自身もまた永遠の学び手である。単元を通じて児童の変容を見取り、評価と振り返りを重ねながら授業を再構築していくプロセスは、自身の成長にもつながった。AI 分析を取り入れた自己評価の取り組みは、授業づくりを客観的に見つめ直す貴重な機会となり、教師が「授業で教えること」と教師が「授業から学ぶこと」が循環する授業改善のサイクルを実感することができた。

体育の授業を通して「運動が大好き!」と思える児童を一人でも多く育てるために、そして、すべての児童が「できる喜び」「分かる楽しさ」「つながる安心感」をもった体育に向かえるように、今後も日々の実践と研究を重ねていきたい。

資料1 運動の楽しさや喜びの系統性



資料2 対話的な学びのイメージ



資料3 キャッチバレーボール単元構想図

学年・内容・単元名		単元の評価規準	知識・技能		思考力・判断力・表現力		主体的に学習に取り組む態度		
第4学年 Eゲーム ネット型ゲーム 「キャッチバレーボール」			①キャッチバレーボールの行い方について、知っていることを言ったり、書いたりしている。 ②相手コートから飛んできたボールを相手コートに打ち返して、ゲームをすることができる。 ③相手コートから飛んできたボールを操作しやすい位置に移動してゲームをすることができる。		①規則を工夫している。 ②簡単な作戦を考えたり、選んだりしている。 ③課題の解決のために考えたことを友達に伝えている。		①キャッチバレーボールに進んで取り組もうとしている。 ②ゲームの規則を守り、誰とでも仲よくしようとしている。 ③用具などの準備や片付けを友達と一緒にしようとしている。 ④勝敗を受け入れようとしている。 ⑤友達の考えを認めようとしている。 ⑥周囲を見て、場や用具の安全を確かめている。		
単元の目標			○キャッチバレーボールの特性を生かして、ボール操作よりもボールを操作していない人の動きに着目させる。 ○チームとして、得点を取ることができるようにする。(一人だけが活躍するようなゲームではなく) ○自分の課題を見付け、解決するための振り返りを充実させる。						
【知識・技能】									
キャッチバレーボールの行い方を知るとともに、基本的なボール操作とボール操作できる位置に体を移動する動きによって、易しいゲームができる。									
【思考力・判断力・表現力等】									
規則を工夫したり、ゲームの型に応じた簡単な作戦を選んだりするとともに、考えたことを友達に伝えることができる。									
【学びに向かう力、人間性等】									
キャッチバレーボールに進んで取り組み、規則を守り誰とでも仲よく運動をしたり、勝敗を受け入れたら、友達の考えを認めたり、場や用具の安全に気を付けたりしている。									
時	1	2	3	4	5	6	7	8	
ねらい	学習の見通しをもつ		キャッチバレーボールの行い方を知り、規則を工夫しながらいろいろなチームとゲームをして楽しむ		簡単な作戦を選んで、工夫しながらゲームを楽しむ		学習のまとめをする		
学習の流れ	授業前にも場や用具の準備								
	運動身体づくりプログラム								
	10分	オリエンテーション						学習のまとめ	
	5分	○単元の学習の見通しをもつ ・単元の目標と学習の進め方 ・チームの確認 ・学習のきまりの確認	○本時の学習の見通しをもつ ・前時の振り返りから	○本時の学習の見通しをもつ ・前時の振り返りから	○本時の学習の見通しをもつ ・前時の振り返りから	○本時の学習の見通しをもつ ・前時の振り返りから	○本時の学習の見通しをもつ ・前時の振り返りから	ISHIGAMI CHALLENGE 2024	
	22分	○本時のねらいを知る ○ゲーム①(8分) ○ゲーム②(8分) ○ゲーム③(8分)	○本時のねらいを知る ○ゲーム①(8分) ○ゲーム②(8分) ○ゲーム③(8分)	○本時のねらいを知る ○ゲーム①(8分) ○ゲーム②(8分) ○ゲーム③(8分)	○本時のねらいを知る ○ゲーム①(8分) ○ゲーム②(8分) ○ゲーム③(8分)	○本時のねらいを知る ○ゲーム①(8分) ○ゲーム②(8分) ○ゲーム③(8分)	○本時のねらいを知る ○ゲーム①(8分) ○ゲーム②(8分) ○ゲーム③(8分)	○本時のねらいを知る ○ゲーム①(8分) ○ゲーム②(8分) ○ゲーム③(8分)	○すべてのチームとゲームを行う ・ゲーム① ・ゲーム② ・ゲーム③
8分	本時の振り返り(最終時は、単元の振り返り)、次時への見通しをもつ、場や用具の片付け、あいさつ								
評価計画	知・技		① 観察・学習カード		② 観察		③ 観察		
主体的	⑥ 観察・学習カード		④ 観察・学習カード		⑤ 観察・学習カード		① 観察・学習カード		
振り返り	キャッチバレーボールを楽しんだと思った児童は9割を超えていた。ゲームを中心に行うことで、楽しさに触れることとともにキャッチバレーボールの特性を知って、自分ができることを、チームの勝利のためにゲームで活かすことができていた。全員に分かりやすいようにルールの工夫や説明などを重ねてきたが、ちゃんと理解できていない児童もいた。特に支援を要する児童にとって、どのように個別アプローチをしていけばよいか、今後の課題とする。								

資料4 高跳び単元構想図

学年・内容・単元名		単元の評価規準	知識・技能		思考力・判断力・表現力		主体的に学習に取り組む態度	
第4学年 走・跳の運動 「高跳び」			①高跳びの行い方について、知っていることを言ったり、書いたりしている。 ②短い助走から、強く踏み切り、高く跳ぶことができる。		①自己の課題を見付け、その課題の解決のための活動を選んでいる。 ②競争の規則や記録への挑戦の仕方を選んでいる。 ③友達のよい動きや変化を見付けたり、考えたりしたことを友達に伝えている。		①高跳びに進んで取り組もうとしている。 ②きまりを守り、誰とでも仲よく励まし合おうとしている。 ③用具の準備や片付けを友達と一緒にしようとしている。 ④勝敗を受け入れようとしている。 ⑤友達の考えを認めようとしている。 ⑥場や用具の安全を確かめている。	
単元の目標			○助走・踏み切り・着地を意識した試技になるようにする。 ○踏み切りを強くして、より高く跳べるようにする。 ○リズムカルに「イチ・ニ・イチ・ニ・サーン」で跳べるようチャレンジさせる。高学年につなぐため。(個に応じて) ○e-assessmentを活用して、自己評価を行う。					
【知識・技能】								
高跳びの行い方を知るとともに、短い助走から踏み切って跳ぶことができる。								
【思考力・判断力・表現力等】								
自己の能力に適した課題を見付け、動きを身に付けるための活動や競争の仕方を工夫するとともに、考えたことを友達に伝えることができる。								
【学びに向かう力、人間性等】								
高跳びに進んで取り組み、きまりを守り誰とでも仲よく運動をしたり、勝敗を受け入れたら、友達の考えを認めたり、場や用具の安全に気を付けたりしている。								
時	1	2	3	4	5	6		
ねらい	学習の見通しをもつ		高跳びの行い方を知り、自己の記録に挑戦することを楽しむ		動きを身に付けるための活動や競争の仕方を工夫して、競争や記録に挑戦することを楽しむ		学習のまとめをする	
学習の流れ	授業前にも場や用具の準備							
	運動身体づくりプログラム							
	10分	オリエンテーション					学習のまとめ	
	5分	○単元の学習の見通しをもつ ・単元の目標と学習の進め方 ・チームの確認 ・学習のきまりの確認	○学習の見通しをもつ 前時の振り返り ○本時のねらいを知る	○学習の見通しをもつ 前時の振り返り ○本時のねらいを知る	○学習の見通しをもつ 前時の振り返り ○本時のねらいを知る	○学習の見通しをもつ 前時の振り返り ○本時のねらいを知る	○学習の見通しをもつ 前時の振り返り ○本時のねらいを知る	○学習の見通しをもつ 前時の振り返り ○本時のねらいを知る
	20分	○本時のねらいを知る ○高跳びをしてみる	○高跳びで記録への挑戦をする	○高跳びで記録への挑戦をする	○高跳びで記録への挑戦をする	○高跳びで記録への挑戦をする	○高跳びで記録への挑戦をする	○単元の振り返りを行う
10分	本時の振り返り(最終時は、単元の振り返り)、次時への見通しをもつ、場や用具の片付け、あいさつ							
評価計画	知・技		① 観察・映像・学習カード		② 観察		③ 観察	
主体的	⑥ 観察・学習カード		④ 観察・映像・学習カード		⑤ 観察・映像・学習カード		① 観察・学習カード	
振り返り	e-assessmentシートを使って、子供たち同士が学び合い、自己の課題を見だしていた。その課題をクリアしようとしてよく取り組んでいた。もっと、練習のバリエーションを増やしてあげることができたよかった。ローター板などを活用したが、それ以外にも提供できるように考えていきたい。							

資料5 B児の高跳び学習カード



動画

走り高跳び 学習評価カード

9月25日(水) 名前()

☆ とび方のポイント ☆

◇ 自分が苦手なところ ◇

実際はここに
高跳びの図(ポイントあり)

②(ふみきり)の足を高く上げるのが苦手

名前	Good...◎ もう少し...○ がんばろう...△				振り返り(自分)
	1の場面	2の場面	3の場面	4の場面	
					助走があんまりうまくいかなかったのがちょっと残念だった。 今度は助走が上手くいくように頑張りたいです!

資料6 高跳び 自己評価シート

体育領域「高跳び」

チェック

1	単元(題材)の構想を明確にもっている。	3
2	本時のねらいを明確にもっている。	3
3	授業の約束事や学習に向かう心構えを指導している。	3
4	子どもの「問い」や「思い・願い」を引き出し、学習課題を設定している。	2
5	子ども一人一人に追究・解決の計画や見通しをもたせている。	3
6	机間指導で子どもを見取り、適切に支援している。	2
7	ペア学習やグループ学習を取り入れる目的を明確にもっている。	3
8	本時のねらいに迫るように話し合いをコーディネートしている。	3
9	本時で学習したことを明確にし、振り返りを工夫している。	3
10	新たな学びに目を向けさせる終末になっている。	2
11	授業の流れが分かり、構造的な板書になっている。	3
12	吟味し精選された発問をしている。	2
13	ノート指導を継続的に行っている。	3
14	ICT機器の活用によって、児童が自己の課題を見だし、解決しようとなっている。	3
15	「運動が楽しい」と考える授業展開、学び合いとなっている。	3

体育領域「高跳び」



自己分析(ピックアップして)

【4】
子供たちは、跳びこえたいという思いをもっていた。がむしゃらに何度も跳んでいる子供もたくさんいた。その中で、「どうすれば高く跳び越えることができるだろうか。」という問いを心から思っていた子供がどれだけいたかと思うと反省しなければならぬ部分である。問いを引き出すためにどんな発問や思いを引き出していけばよいのか、そこを今後、吟味しながら授業を行っていかねばならない。

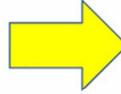
資料7 B 児の学習カード (キャッチバレーボール)

【キャッチバレーボール】

〈自分の課題〉

例:○○の時の○○が苦手なところ

打つ時の打つ事が苦手
なところ



〈今日のめあて〉

例:○○の時に○○をすることができるように○○に気をつけてゲームをする。

投げる時に投げれる様にボール
をちゃんと見て、ゲームする。

【チームのよかったところ】

例:○○の時に○○をしたことによって、みんなで協力して、○○作戦を決めることができた。など

アタックの時に声を出して決
める事が出来た。

【今日のMVP】

A

さん

評価する人の名前

評価(◎・○・△)

自分



【評価の理由と次に向けて】

例:○○の時に○○をしたことによって、○○ができた。次は、○○を○○していくことでもっと点を取ることができるようにしたい。など

先生は後ろに居るといいと言っていた為、それを
逆手にとって手前に向けて投げて見たら得点を取る
事が出来ました。次は打って得点を取りたいです。

資料8 キャッチバレーボール 自己評価シート

体育領域「キャッチバレーボール」

チェック

1	単元(題材)の構想を明確にもっている。	4
2	本時のねらいを明確にもっている。	3
3	授業の約束事や学習に向かう心構えを指導している。	4
4	子どもの「問い」や「思い・願い」を引き出し、学習課題を設定している。	3
5	子ども一人一人に追究・解決の計画や見通しをもたせている。	3
6	机間指導で子どもを見取り、適切に支援している。	2
7	ペア学習やグループ学習を取り入れる目的を明確にもっている。	3
8	本時のねらいに迫るように話し合いをコーディネートしている。	3
9	本時で学習したことを明確にし、振り返りを工夫している。	3
10	新たな学びに目を向けさせる終末になっている。	4
11	授業の流れが分かり、構造的な板書になっている。	3
12	吟味し精選された発問をしている。	3
13	ノート指導を継続的に行っている。	3
14	ICT機器の活用によって、児童が自己の課題を見だし、解決しようとなっている。	4
15	「運動が楽しい」と思える授業展開、学び合いとなっている。	3

体育領域「高跳び」



自己分析(ピックアップして)

【4】

高跳びの時の反省を生かし、この単元をとおして、どんな自分、チームの姿になりたいかを考えさせた。そこで出てきた思いを基に全員で学習課題をたてることができた。

【14】

今回は、映像を残すようなことはしなかったものの、自己の課題からめあてをもたせ、最後には自分の振り返りを行うことを意識させた。また、単元の中で、ワークシートをブラッシュアップさせていった。これは、ICTの自由度でもありよかった。

資料9 保健 体の発育・発達 単元構想図

学年・内容・単元名		知識・技能		思考力・判断力・表現力		主体的に学習に取り組む態度	
【内容のまとめ】第4学年(2)体の発育・発達 【単元名】体の発育・発達		①身長や体重など年齢に伴う体の変化と個人差について、理解したことを言ったり書いたりしている。 ②思春期には、体つきに変化が起こり、人によって違いがあるものの男女の特徴が現れることについて、理解したことを言ったり書いたりしている。 ③思春期には、初経、精通、変声、発毛が起こり、異性への関心も芽生えること、これらは個人差があるものの、大人の体に近づく現象であることについて、理解したことを言ったり書いたりしている。 ④体をよりよく発育・発達させるための生活の仕方には、体の発育・発達によい運動、バランスのとれた食事、適切な休養及び睡眠が必要であることについて、理解したことを言ったり書いたりしている。		①体の発育・発達について、身長や体重などの年齢に伴う体の変化や思春期の体の変化、体の発育・発達に関わる生活の仕方から課題を見付けている。 ②体の発育・発達について、自己の生活と比べたり、関連付けたりするなどして、体をよりよく発育・発達させるための方法を考え、発表するとともに、考えたことを学習カードなどに書いた、発表したりして友達に伝えている。		①体の発育・発達について、課題の解決に向けての話し合いや発表などの学習や教科書や資料などを調べたり、自分の生活を振り返ったりするなどの学習に進んで取り組もうとしている。	
単元の目標							
【知識・技能】 年齢に伴う体の変化と個人差、思春期の体の変化、体をよりよく発育・発達させるための生活について理解することができるようにする。							
【思考力・判断力・表現力等】 体の発育・発達について、課題を見付け、その解決に向けて考え、それを表現することができるようにする。							
【学びに向かう力、人間性等】 体の発育・発達について、健康の大切さに気付き、自己の健康の保持増進に進んで取り組むことができるようにする。							
時	1	2	3	4			
ねらい	身長、体重など年齢に伴う体の変化と個人差について、理解できるようにする。	思春期には、体つきに変化が起こり、人によって違いがあるものの男女の特徴が現れることについて、理解できるようにするとともに、思春期の体の変化から課題を見付けることができるようにする。	思春期には、初経、精通、変声、発毛が起こることなどについて、理解できるようにするとともに、体をよりよく発育・発達させるための方法を考え、発表することができるようにする。	体をよりよく発育・発達させるための生活の仕方には、体の発育・発達によい運動、バランスのとれた食事、適切な休養及び睡眠が必要であることについて、理解することができる。			
学習の流れ	1 「体の変化」からイメージすることを出し合い、体や心に変化があることに気付く。 2 教科書や資料から、4人の身長伸びを比べ、気付いたことを発表する。 3 身長や体重などは年齢に伴って変化すること、体の変化には個人差があることを理解する。 4 身長伸びについて考えている児童の事例を用い、学習したことを生かしてアドバイスをする。	1 「声当てクイズ」、シミュレーション「グイズ」に取り組み、変声や男女の体つきの変化に気付く。 2 グループで、体つきの変化について考え、ベン図(男・女・共通)を用いて分類しながら話し合う。 3 思春期には、体つきに変化が起こること、人によって違いがあるものの男女の体つきの特徴が現れることを理解する。 4 思春期の体つきの変化について考えている児童の事例を用い、学習したことを生かしてアドバイスをする。	1 教師の話から、思春期には初経、精通など体の変化が起こることを知る。 2 初経、精通、変声、発毛について、教科書や資料を基に調べ、気付いたことを発表する。 3 思春期には、初経、精通、変声、発毛が起こること、異性への関心も芽生えること、これらは、個人差があるものの、大人の体に近づく現象であることを理解する。 4 思春期の体の変化について心配している児童の事例を用い、学習したことを生かしてアドバイスをする。	1 どうして運動したり、好き嫌いを食べたりすることがよいのか考える。 2 どのような生活をすれば、体をよりよく発育・発達できるかをグループで話し合う。 3 体の発育・発達によい運動、多くの種類の食品をとることができるようなバランスのとれた食事、適切な休養及び睡眠が必要であることを理解する。 4 これまでの自分の生活を振り返り、自分の目標を決める。			
知・技	① 【観察・学習カード】	② 【観察・学習カード】	③ 【観察・学習カード】	④ 【観察・学習カード】			
評価計画	主体的に学習に取り組む態度については、単元全体を通して評価していく。	① 【観察・学習カード】	② 【観察・学習カード】	① 【観察・学習カード】			
振り返り	保健の授業の課題として、内容に対する時数の少なさがあげられる。その中で、どれだけ、自分の生活を見直したり人の成長には個人差があったりすることを理解させられるかが重要だと感じた。養護教諭や外部の方と連携しながら、より自分の健康を身近に感じさせることが大事であると感じた。						

資料10 保健 自己評価シート

保健領域「運動、食事、休養及び睡眠の調和のとれた生活」

チェック

1 単元(題材)の構想を明確にもっている。	4
2 本時のねらいを明確にもっている。	3
3 授業の約束事や学習に向かう心構えを指導している。	3
4 子どもの「問い」や「思い・願い」を引き出し、学習課題を設定している。	3
5 子ども一人一人に追究・解決の計画や見通しをもたせている。	3
6 機関指導で子どもを見取り、適切に支援している。	3
7 ペア学習やグループ学習を取り入れる目的を明確にもっている。	4
8 本時のねらいに迫るように話し合いをコーディネートしている。	3
9 本時で学習したことを明確にし、振り返りを工夫している。	3
10 新たな学びに目を向けさせる終末になっている。	2
11 授業の流れが分かり、構造的な板書になっている。	3
12 吟味し精選された発問をしている。	3
13 ノート指導を継続的に行っている。	3
14 ICT機器の活用によって、児童が自己の課題を見だし、解決しようとなっている。	2
15 「運動が楽しい」と感じる授業展開、学び合いとなっている。	3

体育領域「高跳び」

自己分析(ピックアップして)

【10】健康になるためには、食事、睡眠、運動が必要であることは押さえることができたが、次に向けてどうしていくかというところでは、もっと工夫を出しても良かった。例えば、家庭との連携を図って自分手帳を活用する。

【14】ICT機器を活用することが保健の授業で本当に重要だったかと言われると、少し悩ましいところもある。紙ベースで学習しても同じであるように感じた。コーディネートとしてどんな工夫があるとICT利用がよりよくなるのかを今後考えていきたい。

総合的な考察 (授業スタンダード自己評価より)

項目	考察とアドバイス
単元の構想	題材のねらいが明確で、見通しをもった計画ができており、学習設計の基盤が安定しています。子どもの実態に合った単元構成が意識されていると評価できます。
本時のねらい	授業の焦点は明確ですが、ねらいを子どもに実感させる「問い」や活動設計の工夫がさらにあると良いでしょう。
学習への心構えの指導	安心・安全な学習環境の整備が行き届いています。子どもたちが落ち着いて活動に向かえる指導ができている証です。
子どもの問いを活かした課題設定	子どもの思いや気づきから学習課題をつくろうという意識が見られます。導入での「問い」の引き出し方を明確にするとさらに良くなります。
見通しをもたせた学習計画	見通しはある程度もたせられていますが、活動中に子どもが「どう動けばよいか」をつかむ工夫がさらにあると主体性が高まります。
机間指導と支援	最も評価が低かった項目です。子どもの様子を見取りながら、個別に声をかけたり動きをフィードバックする力を高める必要があります。タブレットの動画機能なども支援に活用可能です。
ペア・グループ学習の意図	協働的な学習を意図的に取り入れています。学習の「意味」や「役割分担」を明確にすることで、より深い学び合いが期待できます。
話し合い活動の工夫	話し合いを通して学びを深めようとする意図は見られますが、話し合いの「問い」や「焦点化」に課題が残ります。観点を決めた振り返りが有効です。
学習の振り返り	単なる「楽しかった」から一歩進んだ振り返りができるよう、「今日わかったこと・うまくいったこと・友達から学んだこと」などの視点を設定すると良いでしょう。

指導者としての評価・助言

総合評価：3 (概ね実践されている)

単元設計や協働的な学びにおいては、意図がはっきりしており安定感があります。

子どもの思考を深める「問いづくり」、**個別の支援力(机間指導)**については、今後の授業改善の重要な視点です。

タブレット端末等のICTを活用し、**動画による振り返り・ペアでのフィードバック**などを取り入れることで、指導と学びの質の両面を高めることができます。

次のステップに向けての提案

- ・ICTの導入：動画撮影→振り返り→アドバイスのやりとりで、協働的に技を高める場がつかれます。
- ・机間支援の強化：観察ポイント(例：空いている場所に動いているか、パスを呼んでいるか)を明確にし、観点をもちて声かけを。

【キャッチバレーボール 段階別評価】

十分満足できる姿 (A)

【知・技】

◎キャッチバレーボールの行い方について、友達に詳しく伝えたり学習カードに詳しく書いたりしている。また、ボールの行方をよく見て移動してキャッチしたり、スペースを意識してアタックして相手のコートに返したり、ボールを操作できる位置に体を移動するなど、ボールを持たないときの動きもできている。

【思・判・表】

◎運動が苦手な友達でも楽しくゲームに参加できるように、規則の工夫を自分事として考え、ボールを持っている人と持っていない人の役割をゲームの特性に応じて選び、根拠を明確にして作戦を立てたり、その考えを友達に詳しく伝えたりしている。

【主】

◎ゲームに意図的に取り組もうとし、規則を守って誰とでも仲よくしながら、進んで用具の準備や片付けを友達と協力して行い、勝敗を受け入れ、友達の考えを認め、場や用具の安全を確かめるよう努めている。

満足できる姿 (B)

【知・技】

◎キャッチバレーボールの行い方について、友達に伝えたり学習カードに書いたりしている。また、ボールをキャッチしたり、アタックして相手のコートに返したり、ボールを操作できる位置に体を移動するなど、ボールを持たないときの動きを意識している。

【思・判・表】

◎運動が苦手な友達でも楽しくゲームに参加できるように、規則の工夫を考え、ボールを持っている人と持っていない人の役割を選び、作戦を立てたり、その考えを友達に伝えたりしている。

【主】

◎ゲームに進んで取り組もうとし、規則を守って誰とでも仲よくしながら、用具の準備や片付けを友達と協力して行い、勝敗を受け入れ、場や用具の安全を確かめるよう努めている。

努力を要する姿 (C)

【知・技】

◎キャッチバレーボールの行い方について、よく理解できておらず、友達に伝えたり、学習カードに書いたりできていない。また、ボールをキャッチしたり、アタックして相手のコートに返したり、ボールを操作できる位置に体を移動するなど、ボールを持たないときの動きをしようとしていない。

【思・判・表】

◎運動が苦手な友達にも配慮したルールの工夫が見られず、ゲームに参加しづらい場面がある。また、ボールを持っている人と持っていない人の役割分担や作戦を十分に考えることができず、自分の考えを友達に伝える場面も少ない。

【主】

◎ゲームに対して積極的に取り組もうとする姿勢があまり見られず、ルールを守らなかったり、特定の友達としか関わろうとしない場面がある。また、用具の準備や片付けを進んで行う様子が少なく、勝敗にこだわりすぎて不満を表すことがあり、安全への配慮も十分ではない。

資料 1 3

AI (Chat GPT) による分析 (高跳び)

総合的な考察 (授業スタンダード自己評価より)		
項目	考察とアドバイス	指導者視点からの補足
全体傾向	授業の基本構成力、児童への配慮、ICT活用意欲は高い。	現代的で児童中心の授業を目指す姿勢を評価。
強み	<ul style="list-style-type: none"> ・単元構想、本時のねらい、授業の約束事の明確さ。 ・児童の見通し形成、ペア・グループ学習の目的意識。 ・話し合いのコーディネート、振り返りの工夫。 ・ノート指導、ICT活用、授業の楽しさ・学び合いも実現。 	安定した授業運営と、児童の主体性を引き出す工夫が見られる。ICT活用は特に先進的。
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・「問い」や「思い・願い」の引き出しと課題設定。 ・机間指導での見取りと適切な支援。 ・新たな学びに目を向けさせる終末。 ・吟味し、精選された発問。 	児童の自律的な学びを深めるための、より下の高い介入に伸びしろがある。
自己分析の深さ	「どうすれば高くとびこえられるか」という問いを心から思っていた児童の少なさを反省。	自身の内省が深く、改善点への具体的な意識が高い点を評価。

◎ 指導者としての評価・助言

総合評価：3 (概ね実践されている)

先生は、児童理解と教育実践への熱意に溢れる素晴らしい体育教師です。特に、ICTを効果的に活用し、児童が「楽しい」と感じながら学べる授業を創造されている点を高く評価します。今後の更なる授業改善に向けては、以下の点にご留意ください。

「問い」の深化：児童の「やってみたい」という意欲を「どうすればもっとできるだろう?」という具体的な「問い」に昇華させる仕掛けを一層工夫しましょう。動画分析や他者との比較を通して、児童自身が課題を言語化できるよう促す発問が有効です。

「見取り」の質向上：机間指導では、特定の児童（運動が苦手な子など）に焦点を当て、その動きや表情から何を求めているかをより深く見取る練習を。具体的にアドバイスが次の行動にどうつながるかを意識することで、支援の質が高まります。

✦ 次のステップに向けての提案

「問い」を引き出す発問データベースの作成：今回の授業では、児童が自ら課題を発見できるような、多様な問かけの具体例を事前に準備し、その効果を検証しましょう。

ターゲットを絞った机間指導の実施：毎時間、重点的に見取る児童を数名設定し、その児童への声かけや支援を記録・振り返り、見取りの精度を高めましょう。

「学びの転移」を意識した終末設計：授業最後に「今日学んだことは、今後どんな時に役立ちそう?」といった問かけを導入し、学びが日常生活に結びつくような機械を増やしましょう。

AI分析の統計と活用範囲の拡大：自己評価だけではなく、児童の振り返りシートの分析や新たな指導アイデアの生成など、AIを多角的に活用し、授業改善の質と公立を高めていくことを推奨します。

資料 1 4

AI (Chat GPT) による分析 (保健)

<p>AI(Chat GPT)による分析評価)</p> <p>◎ 総合的な考察 (授業スタンダード自己評価より)</p> <p>本授業は、保健領域「運動、食事、休養および睡眠の調和のとれた生活」を題材とし、児童が自分の生活習慣を見直し、よりよく成長するための生活について考えることをねらいとしていた。単元構想や本時のねらいは明確で、学習の流れも計画的に組まれており、児童の実態を踏まえた内容であった点は高く評価できる。また、ペア・グループでの話し合いを通して、児童同士の協働的な学びも意図的に設定されており、「運動・食事・休養といった生活習慣をどう整えるか」という課題に対して、自分の生活と照らし合わせながら考える姿が見られた。ただし、終末の学習やICT活用については、やや形式的になっていた面もあり、「学びの活用」や「気付きの深まり」という観点で改善の余地がある。</p> <p>◎ 指導者としての評価・助言</p> <p>○ 単元構想：全体の構成は明確で、目標に沿った授業が展開されており、児童の生活に根ざした実践であった。</p> <p>○ 協働的な学び：グループ活動や意見交流の場が設定され、児童同士のつながりを意識した学び合いができていた点は良好。</p> <p>○ 振り返りの設計：振り返りの活動は行われていたが、「今日学んだことをどう生活に生かすか」という展望をもたせるためには、観点を明確にした問いや視点の提示が有効。</p> <p>✦ 次のステップに向けての提案</p> <p>○ 児童の「問い」から始まる課題設定：冒頭で「なぜ運動が必要か」「どうすれば元気に過ごせるか」など、児童の思いや違和感を出发点にすることで、より主体的な学びが生まれます。</p> <p>○ ICT活用の目的を明確に：たとえば、1日のスケジュール記録を振り返るだけでなく、「改善点の比較」「クラス全体の傾向の共有」「成果の可視化」ねらいを具体化することが必要です。</p> <p>○ 振り返りから次の行動へつなげる設計：「今日の学びを、明日からの生活でどう生かすか」を考える時間を取り入れたり、家庭との連携（例：自分手帳自分チャレンジ記録など）を促すと、学びが生活の中に根づきやすくなります。</p>
--

資料 1 5

AI (Chat GPT) による分析 (プロンプト)

このファイルは、福島県授業スタンダードのチェックリストをもとに自分の授業を振り返ったものです。質問項目に対して、1～4（1ができていない）で評価をしました。

あなたは、小学校の体育の教師を指導する優れた指導者です。考察をしたうえで、評価をしてください。

資料16 引用・参考文献

- 文部科学省（2017）
『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 体育編』
文部科学省

- 文部科学省（2017）
『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 保健体育編』
文部科学省

- 文部科学省（2018）
『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 保健体育編 体育編』
文部科学省

- 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター（2020）
『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 体育』
文部科学省

- 岡出美則・上田誠治（2017）
『平成29年版小学校新学習指導要領ポイント総整理 体育』
株式会社 東洋館出版社

- 岡野昇・佐藤学（2015）
『体育における「学びの共同体」の実践と探究』
株式会社 大修館書店

- 佐藤学（2021）
『学びの共同体の創造—探究と協同へ—』
株式会社 小学館

- 岡野昇・佐藤学（2019）
『小学校体育12ヶ月の学びのデザイン「学びのこよみ」の活用と展開』
株式会社 大修館書店

- 文部科学省教育課程課・幼児教育課（2020、2021、2022、2023、2024）
月刊雑誌『初等教育資料』
株式会社 東洋館出版社

- 株式会社 大修館書店（2019、2020、2021、2022、2023、2024）
月刊雑誌『体育科教育』
株式会社 大修館書店

- 「ふくしまの『授業スタンダード』」
福島県教育委員会
- 福島県児童生徒の健康、体力・運動能力の現状
福島県教育委員会 健康教育課 HP

- 中央教育審議会（2021）
「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」

- 令和4年度、6年度 福島県教職員論文 若松実践

- 高田彬成、森良一、細越淳二
『これからの体育科教育はどうあるべきか』
株式会社 東洋館出版社

- OECD（2019）
『Making Physical Education Dynamic and Inclusive for 2030,International Curriculum
Analysis,OECD Future of Education 2030,OECD Publishing,Paris. 』

研究主題

通級指導教室における特別支援教育のセンター的機能を意識した取り組み ～縦横のつながりを活かした切れ目のない支援体制の充実を目指して～

只見町立朝日小学校 教諭 横田 みなみ

I 研究の概要

1 通級による指導の今日的な動向

通級による指導は、通常の学級に在籍し、通常の学級での学習におおむね参加でき、一部特別な指導を必要とする児童生徒に対して、障がいに応じた特別の支援を行う指導形態のことである。

直近10年間で義務教育段階の児童生徒数は1割減少する一方で、特別支援教育を受ける児童生徒数は年々増加している。その中でも、通級による指導は、平成23年度は利用数が6万5千人と全体の0.6%だったが、令和3年度は16万3千人と全体の1.7%となり、2.5倍になっており、増加が顕著に表れている。しかしながら、令和4年12月に公表された『通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査の結果について（文部科学省）』では、知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒のうち、現在、校内委員会において、特別な教育的支援が必要と判断された児童生徒の支援状況は、通級による指導を受けていない児童が71.4%いることが明らかになっている。

2 発達障害者支援法について

通級による指導を受けている児童が大きく増加している要因として、特別支援教育に関する理解や認識の高まりや、障がいのある児童生徒の就学先決定の仕組みに関する制度の改正等が関連しているのではないかとと思われる。発達障害者支援法については、平成16

年12月に公布された際に、国及び地方公共団体は、発達障がいのある児童生徒に対し、その障がいの状態に応じ十分な教育を受けられるようにするため、適切な教育的支援、支援体制の整備その他必要な措置を講じるものと責務が明確化された。さらに、平成28年5月には、発達障害者支援法が改正され、発達障がいのある人への切れ目のない支援、家族なども含めたきめ細かな支援、地域の身近な場所で受けられる支援が重要であることが示された。ライフステージが変わるたびにそれまでの支援が失われたり、発達障がいを抱える人が不利益を被ったりすることがないように、自治体や教育機関が情報共有を行っていくことが重要である。

3 福島県と南会津の特別支援教育の重点

福島県教育委員会は、『令和7年度学校教育指導の重点〈特別支援学校教育版〉』の中で、福島県が推進している「地域で共に学び、共に生きる教育」の実現のためには、小・中学校における通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった連続性のある多様な学びの場の充実と学校教育と関係機関等が連携・協力し、乳幼児期から学校卒業後までの切れ目のない支援体制を整備することが不可欠であると述べている。それらを踏まえて、「連続性のある多様な学びの場を重視した対応」「一人一人の教育的ニーズに応じた指導の充実」「自立と社会参加に向けた教育の充実」の3つの指針を令和7年度の特別支援教育の重点として示している。

南会津教育事務所では、県の重点を踏まえて、「個別の指導計画を活用した個々の学習指導の明確化、学年・学校間の円滑な接続」「教育的ニーズの3つの観点(①障がいの状態等、②特別な指導内容、③教育上の合理的配慮を含む必要な支援の内容)を踏まえた適切な教育の提供」「卒業後の姿をイメージし、地域・関係機関等と連携を図るキャリア教育の充実」の3つの指針を示している。以下のことから、南会津の地域性を大切にしたい実践を考えていくことが大切であると考えます。

4 南会津管内の通級による指導について

南会津管内では、令和7年度、約70名の児童が通級による指導を受けている。南会津管内で通級指導教室が初めて設置された平成30年度と比べると、通級による指導を受けている児童は年々増加している。

通級による指導は、児童生徒が在籍する学校において指導を受ける自校通級、他の通級指導教室が設置されている学校に通級し、指導を受ける他校通級、通級による指導の担当教師が該当する児童生徒のいる学校に赴き、複数の学校を巡回して指導を行う巡回指導の3つの実施形態がある。南会津管内は、学校間の距離があり、児童生徒の移動に時間を使ってしまうと、指導時間が限られてしまうことから、巡回指導を採用している。巡回指導のメリットとしては、対象となる児童生徒が少ない小規模校においても実施が可能になること、通級による指導の担当教師と通常の学級の担任等との連携や校内における共通理解が図られやすいこと、保護者の送迎の負担がないことなどが挙げられる。学校間の移動等により、通級による指導の担当教員への負担が大きい部分はあるが、前記の巡回指導メリットを活かして通級による指導を運営していくことが、南会津の特別支援教育を充実させていく上でも、重要である。

5 只見町の通級による指導について

只見町では、平成31年度より通級による指導を開始している。現在、町内の只見小学校、朝日小学校、明和小学校の3つの小学校を曜日ごとに通級による指導の担当教員が巡回して指導を行っている。通級による指導を受けている児童の障がい種別としては、注意欠陥多動性障がい、自閉スペクトラム症、選択性場面緘黙症、気分障がい、また、診断は受けていないものの前記のような傾向が見られるなど、多岐に渡っている。

中学校の通級による指導については、希望する生徒、保護者はいるが、定数に満たないため、現在開級に至らない状況が続いている。3つの小学校から1つの中学校に進学する際に環境の変化や新しい人間関係に対応できず、中学校1年生の1学期中旬を過ぎた頃から、不適応を示す生徒が出現するという現状がある。

6 主題設定の理由

令和5年3月にまとめられた『通常の学級に在籍する障害のある児童生徒への支援の在り方に関する検討会議報告(文部科学省)』では、校内支援体制を充実させること、通級による指導を充実させること、通級による指導を担当する教師等の専門性の向上を図ること、特別支援学校における小中高等学校等への指導助言等のセンター的機能を充実させること、インクルーシブな学校運営モデルを創設することなどが提言された。

これらの提言は、只見町でも意識して取り組んでいかなければならない課題である。

そこで、本研究では、通級による指導を担当する立場を活かして、特別支援教育のセンター的機能を意識した縦横をつなげる積極的な支援を行っていくことを通して、只見町全体の切れ目のない支援が充実することを目指したい。そのことが、連続性のある多様な学びの場の充実にもつながっていくと考える。

7 研究仮説

通級による指導を担当する立場を活かし、各校に特別支援教育のセンター的機能を意識した支援をしていけば、縦横のつながりのある切れ目のない支援体制が実現されるだろう。

8 研究仮説の具体化に向けて

(1)「通級による指導を担当する立場を活かす」とは

只見町は前述したように巡回による通級指導を実施している。伊藤ら(2015)は、巡回による通級指導を担当している教員について、「子どもへの直接的な指導・支援のみならず、校内全体への支援に対する期待も高い。」と述べている。教職員との連携が取りやすいこと、各校の実態を把握しやすいことなど、巡回指導のメリットを活かし、切れ目のない支援の引き継ぎの仕組みづくりを推進していくことが、進級、進学時の引き継ぎを円滑に進めていく上で重要になるのではないかと考える。

(2)「特別支援教育のセンター的機能を意識した支援」とは

文部科学省は、『特別支援教育を推進するための制度の在り方について(答申)』の中で、特別支援学校に期待されるセンター的機能を「小・中学校等への教員への支援機能」「特別支援教育等に関する相談・情報提供機能」「福祉、医療、労働などの関係機関等との連絡・調整機能」「小・中学校等の教員に対する研修協力機能」「障害のある幼児児童生徒への施設設備等の提供機能」を例示している。現在、特別支援学校が設置されていない南会津においては、巡回指導を行っている通級による指導を担当する教員が前述の機能を担って職務を遂行することによって、障がいのある幼児児童生徒が円滑に支援を受けられるような環境の醸成の一助になるのではないかと考える。

(3)「縦横のつながり」とは

厚生労働省が障害児支援の在り方に関する検討会において平成26年7月にまとめた『今後の障害児支援の在り方について(報告書)』の中では、ライフステージに応じた切れ目のない支援を「縦の連携」、保険、医療、福祉、保育、教育、就労支援等とも連携した地域支援体制の確立を「横の連携」と示している。そこから、「縦の連携」では、書類の行き来だけでなく丁寧なやり取りができる体制づくりをしていくこと、「横の連携」では、子どもを支えるそれぞれの機関が方向性を合わせて、支援を進めていけるようにするための情報共有や相談の場を設定していくことで、障がいのある幼児児童生徒が一貫した支援を受けることが可能になるのではないかと考える。

(4)「切れ目のない支援体制」とは

令和3年1月にまとめられた『新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告(文部科学省)』の中でも、関係機関の連携強化による切れ目ない支援の充実は重要であることが示されている。特別な支援が必要な子供が就学前から社会参加まで切れ目なく支援を受けられる体制の整備は、児童生徒の自立や社会参加を促す上でもよい影響を与えるのではないかと考える。

II 研究内容

本研究は、只見町に設置されている只見小学校、朝日小学校、明和小学校、只見中学校の4校を対象に、「縦」の連携と「横」の連携の2つの柱と6つの実践をもとに研究を行う。

1 「縦」の連携の推進

- (1) 特別支援教育ファイルの統一
- (2) 引き継ぎケース会議の実施
- (3) 中学校への訪問や情報交換

2 「横」の連携の推進

- (1) 校内での情報共有
- (2) 放課後子どもクラブとの連携
- (3) 特別支援教育サークルの開催

Ⅲ 研究の実際

1 「縦」の連携の推進

(1) 特別支援教育ファイルの統一

令和3年6月に文部科学省より発出の『障害のある子供の教育支援の手引～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～』においては、情報の引き継ぎについて、「早期からの一貫性や一覧性が高く関係機関等との間の情報共有が容易なファイル（「相談支援ファイル」等）の形でとりまとめ、適宜就学に関する情報を追加するなど、計画作成の作業負担の効率化を図ることも有効」

「各学校や地方公共団体において定めている個別の教育支援計画の様式を、可能な限り域内においてより標準化し、充実する方向で活用し、担任や学校等が変わっても、教育上の合理的配慮を含む必要な支援の内容の提供が、切れ目なく確実に引き継がれるよう努めていくことが重要」「作成後は、本人及び保護者の了解を得た上で、着実に就学先に引き継がれていくことが必要」であることなどが、示された。

上記のことからも、一貫した切れ目のない指導・支援ができるように、子どもの個別の教育支援計画、個別の指導計画、諸検査の結果、指導内容等に関する情報を、扱いに留意しつつ、必要に応じて共有できるように管理していくことが必要である。

令和6年度当初の段階で、只見町内では、各学校によって、個別の教育支援計画や個別の指導計画、諸検査の結果等について、下記の表1のように情報の管理の仕方が様々であった。

A校	特別支援関係ファイルと個別のファイルに綴じている
B校	個別の教育支援計画のファイルと学級経営誌に綴じている
C校	特別支援関係ファイルと学級経営誌に綴じている

表1 各校の情報の管理の仕方

担任が替わったときに、検査結果等がどこに綴じてあるのかすぐに探し出せない様子や引き継ぎの際に個別の教育支援計画や個別の指導計画がうまく活用されていない様子が見られた。

そこで、各学校に特別支援に関する情報を個人ごとに分けて整理することを提案した。

（資料1）特別支援個別ファイルに綴じておく内容（個別の教育支援計画、個別の指導計画、検査結果、診断書、就学支援委員会の個人票、ケース会議等の記録）やファイルの色などを町内で統一し、中学校に各小学校が同じ形式で引き継ぎができるようにした。（写真1・2）各学校の特別支援コーディネーターに協力を得ながら、整理を進めた。個別のファイルに整理し直したことについて、「担任が替わるときの引き継ぎがしやすくなった」「ケース会議の際に、資料が探しやすくなった」等、肯定的な意見が教職員から多く聞かれた。



写真1
特別支援個別ファイル
（オレンジファイル）



写真2
分類ラベル

(2) 引き継ぎケース会議の実施

個別の教育支援計画の関係機関との情報共有について、学校教育法施行規則第134条の2には、「児童等又はその保護者の意向を踏まえつつ、あらかじめ、関係機関等と当該児童等の支援に関する必要な情報の共有を図らなければならない」とされている。

令和3年1月に福島県教育委員会より示された『ふくしまサポートガイド～ふくしまの

すべての子どもたちのために～』では、校種間連携のポイントとして、「校種間連携＝児童生徒の交流のみにしない」「校種間でアセスメントシートを共有し、援助や配慮が必要な児童生徒については丁寧な引き継ぎを行う」「アセスメントシートを活用する事で、新しい担当者がスムーズに援助に入れるようにする」の3点が挙げられている。

「丁寧な引き継ぎ」を意識した取組として、中学校に進学する6年生の中で、通級による指導を利用している児童と、特別支援学級に在籍している児童を対象にした引き継ぎケース会議の実施を提案した。(資料2)「特別な支援が必要な子供にとって、特に就学や進学時の移行期は、心身共に負担が大きくなることが考えられるため、進学先の新たな学びの場でのスタートをスムーズに切るために、それまでの支援を継続できるようにする」「各学校間において、引き継がれた支援内容を校内で共有し、組織的に取り組む支援体制を整える」の2つを目的として、1月中旬に中学校教員による小学校の通常学級での授業の様子の観察、ケース会議の打ち合わせ、2月中旬に中学校教員による小学校の特別支援学級・通級による指導の授業の様子の観察、保護者を交えた引き継ぎケース会議、3月下旬に保護者の許可を得た上での特別支援個別ファイルの中学校への引き継ぎという計画を立てて実施した。また、通級による指導を利用している児童は、新しい環境への不安を大きく感じやすかったため、学級担任の提案による第6学年の児童全員で中学校の教室を借りての授業の実施(写真3)、入学式リハーサルの実施も併せて行った。

丁寧な引き継ぎを行ったことで、児童の中学校進学への不安が軽減し、最初は中学進学に対して「不安しかありません」と言っていた児童も、卒業の頃には「特に心配なことはありません」と前向きな言葉を発するようになった。また、保護者からも「小学校でお世話に

なった先生とこれからお世話になる中学校の先生と子どもの様子について情報共有できたことで安心できた」「心配していた部分の対応が相談できてよかった」と、引き継ぎケース会議の実施が安心感に繋がったことが確認できた。中学校においても、「小学校段階での授業の様子を参観することで中学校入学後の姿がイメージでき、必要な支援や入学後に想定される課題を明確にできた」「支援に関する情報や当該児童の特性についての情報を入学前段階で細やかに引き継ぐことで中学校職員への具体的な情報共有が可能となった」「入学前に保護者とのケース会議を開催することで中学校教員とのラポートがつけられ、学校と家庭間の当該生徒理解、学校の支援と保護者の願いへのズレを軽減することに繋がった」と、メリットが多く見られた。



写真3

小学校担任による中学校の教室での授業の様子

(3) 中学校への訪問

只見中学校に通級指導教室が立ち上がらなかったこと、自閉症・情緒障がい特別支援学級が令和7年度から新設されたことを踏まえて、4月から週1回程度の中学校への訪問支援を開始した。朝日小学校と只見中学校は隣接しているため、朝日小学校に通級による指導で勤務する日の隙間時間を利用して実施した。町内の3校を巡回指導で回っていたため、どの生徒も顔と名前が一致し、生徒たちも通級担当のことを認識していたため、スムーズに訪問を実施することができた。

授業観察、教室環境への助言、特性を踏まえた支援方法の共有を中心に支援を行った。

中学校の特別支援コーディネーターからは、「小学校の時の様子と比較し、当該生徒が中学校生活に適應する上で、様々な情報（行事前後の不安材料、かなり頑張っている状況であることなど）を得られた」「特性を踏まえた必要な用具やレイアウト（1日の過ごし方を可視化できるワークシート、パーテーションの位置など）について担任が助言をもらうことで当該生徒が安心して生活できる環境整備に繋がった」「特別支援教育支援員に本人の特性と支援方法について具体的かつ詳細に助言してもらうことで支援員の困り感の解消、生徒理解と効果的な支援方法の伝達に繋がった（投げやりな態度や発言が意味する心理を理解できたことが、称賛しながら取組を促す支援に繋がりと、少しずつ、課題の量と取り組む時間が増えてきている）」と、中学校訪問の効果について回答を得ることができた。

2 「横」の連携の推進

(1) 校内での情報共有

只見町内の小学校3校の巡回指導にあたっては、通級による指導の充実と併せて、特別支援学校に期待されるセンター的機能である①小・中学校等への教員への支援機能、②特別支援教育等に関する相談・情報提供機能、③小・中学校等の教員に対する研修協力機能を意識した取組を実施した。

① 教員への支援機能

通級による指導を利用している児童が在籍している学級の担任とは、通級で聞き取った児童の思いの共有や、支援や指導のベクトルを合わせるための情報の共有を大切にしている。学級担任と相談した上で、管理職と共有が必要な内容について、管理職と特別支援コーディネーターも踏まえての短時間のケース会議を提案し、学校全体で児童を見守っていくための共通理解や環境調整について話が

できるような場の設定を促した。併せて、通級による指導の対象児が在籍していない先生とも放課後に積極的にコミュニケーションを取り、困り感を聞き取って、児童とのかかわりについての相談にのる時間を意識的につくるようにした。特に、経験年数の少ない若手の先生には、特別支援学級の環境整備のアドバイスや特別な配慮が必要な児童への効果的な言葉かけや教材の活用の仕方などを、放課後の時間を利用して具体的にアドバイスをするようにした。その結果、困ったときに先生の方から声をかけてきてくれることが増え、特別支援に関する情報が提供しやすくなることにも繋がった。

また、担任と保護者と通級による指導担当の3者で回覧する連絡ファイル「にじいろファイル」(写真4)や、個別面談やケース会議の実施を通して、保護者との連携をサポートできるように努めた。その結果、令和6年度に只見町の通級による指導を利用している児童と保護者を対象に実施したアンケートでは、「担任や通級担当と連携を取ることができたか」という質問項目で「とてもそう思う」と「そう思う」の回答を合わせて100%、子どもを通級に通わせたことでの保護者のメリットでは、「子どもの情報が学校と共有しやすくなった」の項目の回答数が1番多い結果となった。(資料3・4)

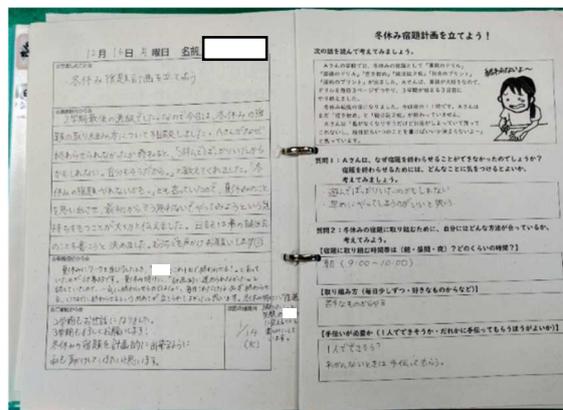


写真4
にじいろファイルの中身

② 特別支援教育等に関する相談・情報提供機能

南会津町立南郷小学校の在籍時に取り組んでいた特別支援教育通信『Colorful』の発行を転任後も継続して実施した。

巡回している只見町内3校の教職員、家庭、教育委員会を対象に特別支援教育通信を配付した。

「違いについて」「通級指導教室で使用している教材の紹介」「ことばのキャッチボール」「合理的配慮について」「建設的な議論について」「困り事を減らすアイデア・便利グッズ」「セルフアドボガシーについて」「筋弛緩法のやり方」「心と体のリフレッシュ」「構造化について」「YouメッセージとIメッセージ」について、情報の発信を行った。

保護者や児童からは『Colorful』で紹介されていた鉛筆を買ってみました』『Colorful』で紹介されていたストレス発散のムニムニするやつ、あれほしいです」という意見があったり、教職員からは「教科ごとにファスナーファイルに整理するのをやってみてくれたおうちがあって、子どもたちが管理しやすかったです」「構造化って子どもに対してだけじゃなくて、私たち自身にも有効な考え方ですね」という意見があったりと、情報発信の効果が感じられた。

③ 研修協力機能

各校で特別支援教育に関する研修の時間をもらい、1時間程度の研修会を開催した。令和6年度は「子どもの心の内をありのままに感じてみる」をテーマに、マジョリティとマイノリティや子どもの見取りのポイントについて、ワークショップや体験活動を取り入れながら、研修を行った。「子どものことをいろいろな視点から見て考えることの大切さがわかった」「日頃の自分の言動を振り返ることができ、否定的な言葉かけではなく、肯定的な言葉かけを意識しようと思った」などの感想を聞くことができた。

また、只見町内の特別支援教育支援員の研修会に講師として参加し、「これからの支援について」をテーマに、主な障がいの特性と具体的な支援について研修会を実施した。「かかわっている子を思い浮かべながら聞くことができたので、日頃の支援に活かしてみたいと思う」「具体的な支援の方法を聞くことができたので参考になった」という感想を聞くことができ、各校に巡回で訪問した際の特別支援教育支援員の方との情報交換も以前よりさらに積極的に行えるようになった。

(2) 放課後子どもクラブとの連携

令和6年度には、只見町教育委員会主催で実施した放課後子どもクラブのスタッフの方を対象とした研修会に講師として参加した。

「子どもたちとかかわるときに気をつけたいこと」をテーマに、①子どもの話を聴くときに気をつけたいこと、②子どもを見守るときに気をつけたいこと、③よくない行動を注意するときに気をつけたいこと、④子どもが思いを伝えてきたときに気をつけたいことの4つのポイントについて、演習を取り入れながら研修を行った。(写真5)「実際に傾聴するワークに取り組んでみて、しっかり耳を傾けて聴くって結構難しいことだったんだと実感しました」との感想が聞かれた。研修会の後には、巡回で各小学校に訪問した際に、スタッフの方から声をかけられ、実際にトラブルがあった場面でのどのような対応や言葉かけをすればよいか相談されることもあった。同じ子どもを見守る場として、共通理解を図りながら、指導や支援をしていくことが子どもたちの成長に繋がると感じた。



写真5
子どもクラブスタッフの研修会の様子

(3) 特別支援教育サークルの開催

通級による指導の担当や特別支援学級の担任を経験し、発達に特性をもつ子どもの保護者の方と話をする中で、「同じような悩みを抱えている保護者の方と話をする機会がない」

「同じクラスのお母さんたちには、子どもの発達に関しての相談はなかなかしにくい」という言葉を聞くことが何度かあった。「横」のつながりが育まれれば、子どもも保護者も孤独感を感じにくくなるのではないかと感じた。

そこで、南会津の西部地区（只見町・南会津町南郷地区・南会津町伊南地区・南会津町館岩地区・檜枝岐村）を主な対象として、保護者や教職員など立場に関係なく、特別支援教育について一緒に考え、学ぶ特別支援教育サークル「スピカ」を立ち上げることにした。

1、2ヶ月に1回のペースで休日にお寺を借りて実施し、子どもたちはボードゲームを使っての交流ができるよう場を設定した。(写真6)



写真6

子どもたちがボードゲームを楽しんでいる様子

参加者は、特別支援学級や通級による指導を利用している子どもやその保護者、小学校の教員、中学校の教員、保育士、特別支援教育支援員、放課後子どもクラブのスタッフ、不登校支援団体のスタッフ、放課後デイサービスのスタッフ、児童発達支援事業のスタッフ、特別支援学級に在籍していた高校生、スクールソーシャルワーカー経験者、特別支援教育に興味がある地域の方など、様々な立場の人が集まって学ぶ場になってきている。

1回目の学習会では、学びたいことの共有を行い、「保護者の方が悩んだり困ったりしていることについて聞きたい(小学校教員)」「子どもの特性を周囲の人にどう理解してもらえばよいか悩んでいる(中学生の子どもをもつ保護者)」「親の気持ちのコントロールについて学びたい(小学生の子どもをもつ保護者)」

「一人ひとりの違った特性に寄り添える理解の仕方を知りたい(特別支援教育支援員)」など様々な意見が出された。(資料参加者の意見をもとに、「構造化について学ぼう」「子どもの行動分析を試みよう」「隠れた強みを見つけよう」「セルフケアってどうするの?」「合理的配慮について考えよう」「年度替わりの切り替えの仕方を共有しよう」「ネットやゲームとの付き合い方について考えよう」「みんなでボードゲームを楽しもう」などのテーマで学習会を開催した。(写真7)

参加者からは、「親子で集まれる居場所があってうれしい」「わかってくれている大人や子どもの中で、子どもが安心して楽しく過ごせている顔を見ることができると嬉しい」

「いろいろな人の考えを聞いて、自分の生活に活かせるのでありがたい」「勉強したことをすぐに実践してみようと思えるから生きた研修だと思う」という感想を聞くことができた。参加者同士での交流も生まれ、自然に情報交換や相談が始まり、会の終了時にはすっきりした顔で帰って行く方も多く見られている。



写真7

合理的配慮についての学習会の様子

IV 研究の成果と課題

本実践を通して、次の成果と課題が明らかになった。

〔成果〕

- 特別支援個別ファイルを町内で統一したことによって、町内の学校間での個別の教育支援計画や個別の指導計画、諸検査の結果など情報の引き継ぎの仕方が明確になった。教職員の負担軽減のために、今後は、文部科学省から示されているようにICTの利活用も推進していく必要がある。
- 引き継ぎケース会については、実施したことによって、児童生徒、保護者、小学校、中学校のどの立場からも、効果的であったという回答を得られた。進学に伴い、新しい環境でスタートをスムーズに切するための環境整備の一助として、引き継ぎケース会の実施は有効であった。今後も、実施を推奨していきたい。
- 巡回型の通級による指導教室の担当であることは、町内の各校の現状を把握し、児童生徒に必要な環境を整備していく上で、利点であった。その日だけの授業観察でなく、年間を通して各校を巡回して実態把握ができるという強みを活かして、教職員への支援や特別支援教育等に関する相談・情報提供、研修協力、関係機関との連絡・調整などを推進する取組となった。効果的な支援・指導の実施のために、今後も、特別支援教育の専門性を高め、伝達を続けていきたい。
- 放課後子どもクラブとの連携や特別支援教育サークルの開催は、学校以外の場での環境調整を進めていく上で、有効な実践であったと考える。『第7次福島県総合教育計画〈「学びの革新」の推進に向けて〉』の施策3「学びのセーフティネットと個性を伸ばす教育によって多様性を力に変える土壌をつくる」を推進するための取組となった。

〔課題〕

- 只見町では、令和7年4月より只見町の中央に位置する朝日保育所が教育・保育のどちらにも対応する「幼保連携型認定こども園」に移行された。早くから子どものもっている特性や苦手さ、困難さに気づき、早くから適切な支援を受けられるようにすることが、子どもの生活をよりよいものにすることに繋がる。早期発見、早期支援を充実できるようにするための取組も、認定こども園と相談しながら今後考えていかなければならない。また、中学校から高等学校への引き継ぎ、その後社会人になるまでを見通した情報の引き継ぎ方についても整備していく必要がある。
- 障がいのある人が現在の社会で困難さを感じやすい理由は、「障がいがあるから」ではなく、社会がマジョリティ仕様につくられており、マイノリティである障がいのある人達が想定されてつくられていないからである。出口(2017)は、「マジョリティ側に特権があることに無自覚な状態こそがマイノリティにとって生きにくい社会を築いているのであり、変わるべき対象はマイノリティではなくマジョリティ側の意識である」と述べている。地域全体、社会全体の理解をさらに深めていく必要がある。

V おわりに

特別な支援を必要とする子どもが、就学前から学齢期、そして社会参加に至るまで、一貫して途切れることなく必要な支援を受けられるように、関係機関が連携して「切れ目のない支援」に取り組むことは、重要なことであり、今後もよりよい方法を模索していかなければならない。併せてとても重要なのは、子ども達自身が自分に必要な支援を自分で説明する力がつくように育てていくことである。どちらも誰もが生きやすい社会の仕組みを構築していく上で、大切なことである。

今後も、すべての子どもが、自分らしく生きられる社会を目指して、実践を積み重ねていきたい。

【参考文献】

- ・文部科学省(2022)『通級による指導の概要について(通常の学級に在籍する障害のある児童生徒への支援の在り方に関する検討会議資料)』
- ・文部科学省(2022)『小中学校における通級による指導の現状と課題について(通常の学級に在籍する障害のある児童生徒への支援の在り方に関する検討会議資料)』
- ・文部科学省(2022)『通級による指導の充実の在り方について(通常の学級に在籍する障害のある児童生徒への支援の在り方に関する検討会議資料)』
- ・文部科学省(2023)『通常の学級に在籍する障害のある児童生徒への支援の在り方に関する検討会議報告』
- ・文部科学省(2005)『特別支援教育を推進するための制度の在り方について(答申)』
- ・伊藤由美・拓殖雅義・梅田真理・石坂務・玉木宗久(2015)『「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」の補足調査の結果から見た通級指導教室の役割と課題』(国立特別支援教育総合研究所研究紀要)
- ・厚生労働省(2014)『今後の障害児支援の在り方について(報告書)～「発達支援」が必要な子どもの支援はどうあるべきか～』
- ・文部科学省(2021)『障害のある子供の教育支援の手引～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～』
- ・福島県教育委員会(2021)『ふくしまサポートガイド～ふくしまのすべての子どもたちのために～』
- ・福島県特別教育センター(2020)『すぐに調べられる、活用できる資料!小・中学校、

高等学校におけるインクルーシブ教育システム推進のためのコーディネートハンドブック〔2020年版〕』

- ・福島県特別支援教育センター(2022)『コーディネートハンドブック2022追補版』
- ・ダイアン・J・グッドマン・出口真紀子・田辺希久子(2017)『真のダイバーシティをめざして～特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育』(ぎょうせい)
- ・文部科学省(2021)『個別の教育支援計画の参考様式について(事務連絡)』

【資料1】

特別支援個別ファイルの作成について

特別支援部

1 目的

- ・ 支援を必要とする児童一人一人のニーズを把握し、計画的な指導・支援を行う。
- ・ 支援内容の決定、確認、実施、継続が適切に行えるようにする。

2 概要

(1) 対象

- ①特別支援学級（情緒・知的）に在籍している児童
- ②通級している児童
- ③担任が必要を感じ、今後支援を継続していくことが必要な児童

(2) 特別支援個別ファイル（オレンジ）に綴じるもの

- ①個別の教育支援計画の原本
- ②個別の指導計画の原本 ※通級している児童については在籍学級と通級の両方（①②のコピーは、校内支援委員会のファイルに綴る）
- ③検査結果（WISC-IV、PARS等）
- ④医師の診断書
- ⑤ケース会議の記録のコピー（原本は校内教育支援委員会のファイルに綴る）
- ⑥町教育支援委員会個人調査票（コピー）

※会議資料は、その内容や経緯がわかるよう原本を今までのファイルに綴っておく。

(3) 作成者

- ・ 特別支援教育コーディネーター、特別支援教育担当が支援し、学級担任が作成する。

3 「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」作成の手順

- ・ 前担任が作成した「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」を確認する。
- ・ 5月上旬までに今年度の「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」を作成し、個別ファイルに入れる。
- ・ 授業参観の機会等を利用し、5月中に保護者と共有する。
- ・ 3学期（2月頃）に評価欄に成果と課題を記入する。
- ・ 特別支援教育コーディネーターは、担任に対し、これらの作成の指示および相談、保護者との情報共有についての連絡を行う。
- ・ データは、共有のフォルダに入れ、次の担任が活用できるようにする。
職員室NAS→R6年度→特別支援→R6個別の指導計画・R6個別の教育支援計画

4 保管

- ・ 校長室耐火書庫に保管し、次年度に継承する。
- ・ 中学校へファイルを引き継ぐ場合は、保護者の承諾を必ず得る。

5 その他

- ・ 担任は児童に関わる職員が同じ歩調で支援ができるよう、支援方法について校内特別支援委員会や生徒指導協議会などで、必要に応じて伝達していく。
- ・ 「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の作成にあたっては、福島県特別支援教育センターHPの「コーディネートハンドブック第3章」等を参考にする。

【資料2】

特別支援学級・通級指導教室在籍児童 切れ目のない引き継ぎ計画

特別支援部

1 目的

- (1) 特別な支援が必要な子供にとって、特に就学や進学時の移行期は、心身共に負担が大きくなることが考えられる。そのため、進学先の新たな学びの場でのスタートをスムーズに切るために、それまでの支援を継続できるようにする。
- (2) 各校間において、引き継がれた支援内容を校内で共有し、組織的に取り組む支援体制を整える。

2 時期・場所・内容

	時期	場所	内容
①	1月中旬	小学校	中学校教員による通常学級の授業参観、ケース会議打ち合わせ
②	2月中旬	小学校	特別支援学級・通級の授業参観、ケース会議の実施（保護者参加）
③	3月下旬	中学校	特別支援個別ファイルの引き継ぎ（※保護者に許可を取る）

3 参加者

- ・該当児童2名（6年A、6年B）
- ・該当児童保護者（Aさん、Bさん）
- ・朝日小学校教職員（特別支援C〇、5・6年担任、特別支援学級担任、通級担当）
- ・只見中学校教職員（特別支援C〇、養護教諭）

4 日程

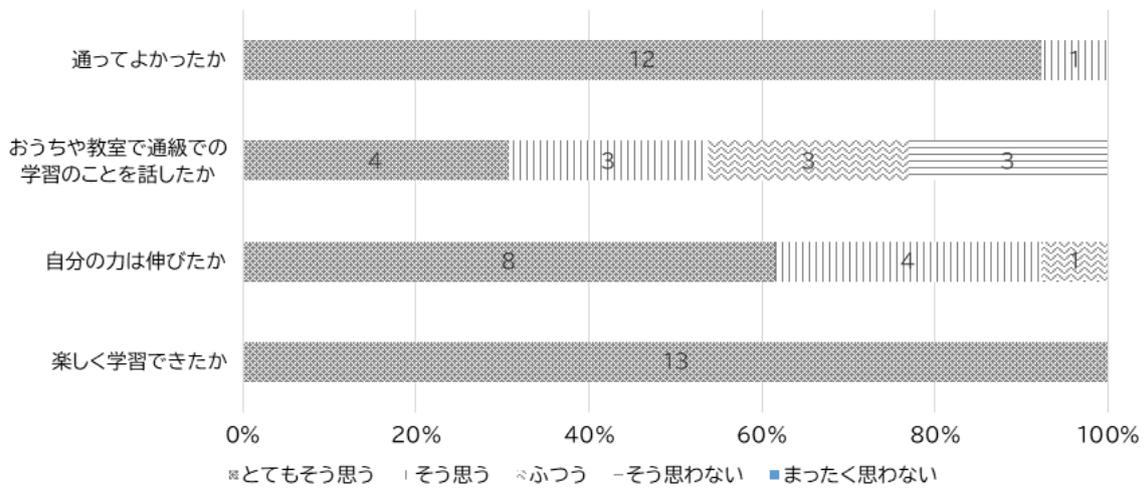
- ① 13:55～ 5校時 通常学級授業参観
15:00～ ケース会議打ち合わせ、情報交換
- ② 13:55～ 5校時 特別支援学級・通級授業参観
15:00～ ケース会議
- ③ 中学校との引き継ぎの際に実施

5 確認事項

- ・ケース会議については、保護者と日程を調整して、実施する。
- ・特別支援個別ファイルの学校間の引き継ぎについては、保護者から許可を得た上で実施する。
- ・中学校の入学式の前日のリハーサル（会場確認）については、ケース会議で相談の上、必要な場合は、中学校で検討し、保護者と相談する。

【資料3】

通級での勉強についてのアンケート(通級利用児童13名に実施)



Q 自分の力が伸びたと思うことは何か。

- ・集中する力
- ・けんかや悪口が減った
- ・想像力
- ・バスに乗って登校できるようになった
- ・かけ算九九
- ・いろいろな力
- ・我慢したり落ち着いたりすることができるようになった
- ・協力する力
- ・忘れ物が少なくなった
- ・学校のこと
- ・イライラのコントロール
- ・整理整頓
- ・説明力

Q 通ってよかったことは何か。

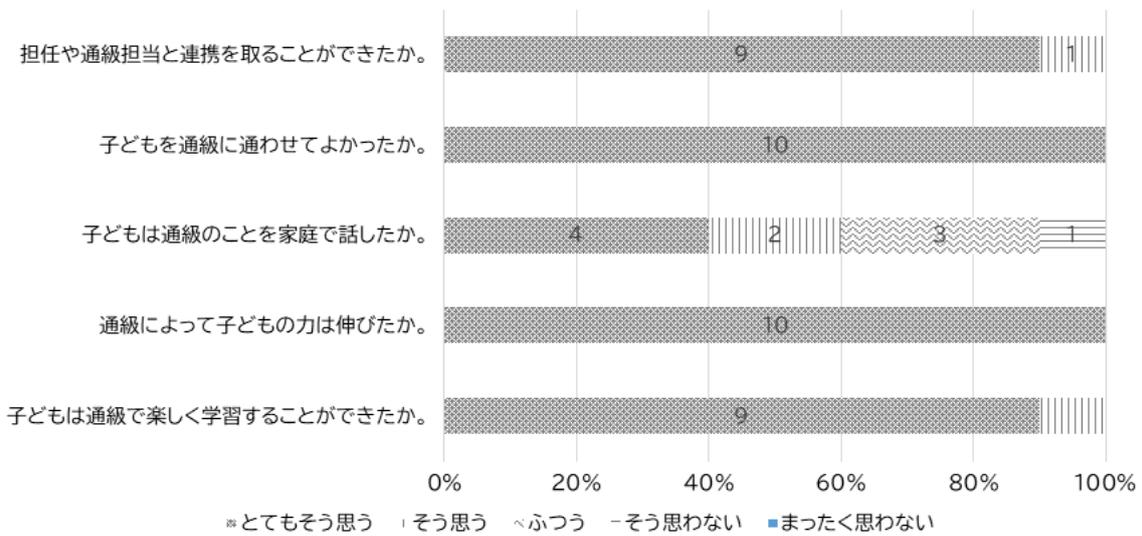
- ・楽しく勉強できること
- ・いろいろお話ししていろいろなことを解決する考えてくれるところ
- ・いろいろな力がついたから
- ・自分の気持ちが言えるようになった
- ・みんなと楽しく遊べるようになった
- ・前と変わった
- ・いろいろできるから
- ・楽しいから

Q さらに伸ばしたい力は何か。

- ・集中力
- ・行動力、判断力
- ・学力
- ・話す力
- ・自分を見る力
- ・人を話で止めることを覚えたい
- ・人とのコミュニケーション
- ・会話
- ・考えること

【資料4】

通級での勉強についてのアンケート(通級利用児童保護者13名に実施/10名回答)

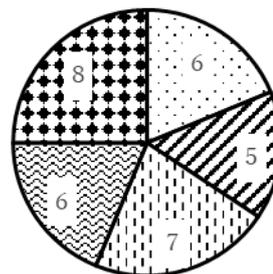


Q 子どもの力が伸びたと思うことは何か？

- ・国語や算数の文章問題をきちんと理解して解けるようになってきた。
- ・自分の困り事に自分で向き合おうとする姿が見られるようになった。
- ・笑顔がたくさん増えた。
- ・1つ1つの事が少しずつだが、自分で考えてできるようになってきた。
- ・絵を描くこと、作文を描くことなど、苦手なことが少しずつ伸びてきた。
- ・他人とのかかわり方が上手になってきた。
- ・イライラのコントロールが少しできるようになった。
- ・手先が器用になった。
- ・学校に遅れずに通えるようになった。
- ・他人の気持ちを考えられるようになった。
- ・困難に立ち向かうことについて、投げ出さなくなった。
- ・少しずつ課題に取り組む時間が長くなっている。
- ・自己分析ができるようになり、振り返ることができるようになった。
- ・トラブルが少なくなった。
- ・挨拶ができるようになった。
- ・強いこだわりが軽減された。
- ・勉強の楽しさを知ったり、苦手なことにも挑戦したりできるようになった。

Q 通級に通った結果、保護者の方にとってよかったことは何か？(複数回答可)

- ア 子どもの個性・特性を知ることができた。
- イ 子どもの学習の様子を知ることができた。
- ウ 子どもへのよりよい関わり方を知ることができた。
- エ 学校への相談窓口が増えた。
- オ 子どもの情報が学校と共有しやすくなった。



- ア
- ▣ イ
- ▤ ウ
- ▥ エ
- ▦ オ

研究主題

総合的な探究の時間における

地域資源を活用した協働的な学びの実践

～万能調味料「うまくてごめんな山菜」の開発を通して～

福島県立猪苗代支援学校 教諭 本間 久登



I はじめに

本研究では、猪苗代支援学校高等部での総合的な探究の時間を用いて、猪苗代町の地元企業である「有限会社A食品」（以下「A食品」と連携を図りながらコラボ商品を開発し、商品を流通させることで地域活性化を目指していく。その学習過程の中で、生徒に協働的な学びを経験させ、どのような影響が与えられるのか、検証していくことを目的としている。

II 研究の背景

1 地元地域猪苗代町の問題と課題

「猪苗代町まち・ひと・しごと創生人口ビジョン（改訂）第2期総合戦略」によると、猪苗代町の総人口は、昭和22年をピークに、全体として減少傾向にあり、国立社会保障・人口問題研究所に準拠した推計では、今後も人口減少が続き、令和27年には、1万人を割り込むと予測されている（図1）。また、町内の事業所数は、減少傾向にあり、平成26年には850事業所となっている。従業者数は、平成8年の8,235人をピークに減少傾向であり、平成26年は、5,806人となっている。事業所数、従業者数ともに減少傾向にあり、町内での雇用が減少していると考えられる（図2）。¹⁾

猪苗代町が地元である本校では、令和6年度の重点目標を「教科横断的な視点を持ち、地域の人的・物的資源を積極的に取り入れた授業づくりを通して、協働的な学び・探究的な学びの充実を図る。」としている。猪苗代町の活性化を授業のキーワードに挙げつつ、学校全体の重点目標の達成に向けて取り組むことは、青年期段階である高等部生の総合的な探究の

時間の題材として適切であり、地域に開かれた学校づくりとして、意義のあるものであると考える。

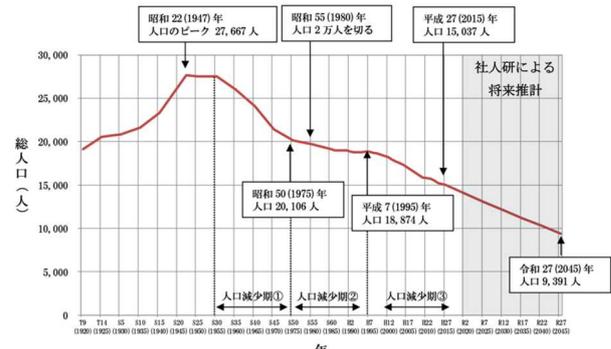


図1 「猪苗代町の総人口の推移」

※ 引用：猪苗代町(2020)：猪苗代町まち・ひと・しごと創生人口ビジョン（改訂）第2期総合戦略



図2 「猪苗代町の事業所数と従業員数の推移」

※ 引用：猪苗代町(2020)：猪苗代町まち・ひと・しごと創生人口ビジョン（改訂）第2期総合戦略

2 協働的な学びの必要性

令和3年中央教育審議会「教育課程における審議のまとめ」によると、協働的な学びについて『個別最適な学び』が『孤立した学び』に陥らないよう、これまでも『日本型学校教育』において重視されてきた、探究的な学習や体験活動などを通じ、子ども同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する『協働的な学び』を充実するこ

とも重要である。」²⁾と示されている。

さらに、近年ではサイバー空間と現実世界が高度に融合された Society5.0 とよばれる「超スマート社会」の到来が第5期科学技術基本計画（内閣府、2016）³⁾によって予測されており、AI 技術が発達した日本において子ども一人一人の学習傾向などに応じて学びを最適化する等の変革が求められている。猪苗代町内においても、小売店での金銭の支払いが現金からスマートフォンによるキャッシュレス決済に置き換わりつつあり、猪苗代観光協会は、電動アシスト自転車のシェアリング事業に注目し、猪苗代町内での実証実験が開始されている。

これらのように、知的障がいのある児童生徒を取り巻く環境は刻一刻と変化しており、今後訪れてくる超スマート社会を生きていくためには、自分の暮らす地域に目を向け、自ら問題を見出し、解決していく経験を積み重ねつつ、他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越えることのできる資質・能力を育成することのできる協働的な学習による学びが必要不可欠である。

そのため、本研究において、生徒が協働的な学びを実践できるように、以下のように協働的な学びのポイントを示し、研究を進めることとした。

<本研究における協働的な学びのポイント>

- ・友達の考えを聞いて、自分の考えを広げる。
- ・友達と意見を交換する。
- ・グループで話し合ったことをまとめる。
- ・ネット情報や書籍から様々な人の考えに触れる。

III 研究の内容

- 地域資源を活用した有効的な授業づくりを実践する。
- 協働的な学びが生徒に及ぼす影響を考察する。

IV 研究の方法

- A食品と連携を図りながら、総合的な探究の時間の単元計画を構築し、協働的な学び

を取り入れた問題解決学習を実践し、評価・改善する。

○ 対象生徒は、令和6年度猪苗代支援学校高等部生徒20人（内、1年生5人、2年生9人、3年生6人）である。検証の方法として、単元終了後に、生徒に4件法での質問紙調査を実施し、回答データを基に生徒の思考に及ぼす影響を調査する。

V 単元展開の基本的な考え

単元を展開するにあたり、文部科学省が示す「探究における生徒の学習の姿」（図3）を参考に①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現のプロセスで単元を構築し、教科の視点だけでは捉えきれない広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉える経験を重ねることで生徒が探究的な見方・考え方を働かせるようにしている。生徒が地域の問題に気づき、学校の生徒として自分に何ができるのか考えることで生徒自身の課題として捉えさせ、協働的な学びの活動の中で、その課題を遂行することで、主体的に問題を解決できる力を高められることが期待できる。

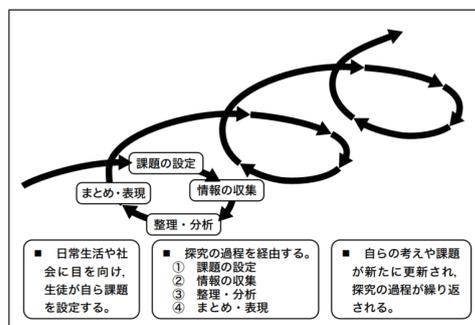


図3 「探究における生徒の学習の姿」

※ 引用：文部科学省（2018）「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説【総合的な探究の時間編】」

VI 研究の実際

本研究の対象となる授業は、令和6年12月から令和7年11月までの約1年間にわたる長期単元である。単元の第一次では、主にコラボ商品の開発を行い、第二次では、開発したコラボ商品の宣伝や味の研究、販売活動に取り組んだ（表1）。単元の目標は、育成すべき資質・能力に沿った3観点で示しており、①猪

苗代町や学校の特徴を踏まえたコラボ商品を開発するために必要な情報を収集する手段や協働的な話し合いの方法を理解することができる。(知識・技能)、②課題を遂行するための情報を集め、整理・分析してまとめ・表現することができる。(思考力、判断力、表現力等)、③他者の意見を尊重しながら、話し合いを通して新たな価値を創造しようとする。(学びに向かう力、人間性等)とした。

単元の経過									
第一次	<p>1 地域の問題と課題を捉える。 うまくて生姜ねえ!!とコラボ商品を開発して、猪苗代町を盛り上げよう! ※うまくて生姜ねえとは、A食品が販売している万能調味料である。(以下「うまくて生姜ねえ!!」) 2 うまくて生姜ねえ!!とは何かを調べる。 (1) うまくて生姜ねえ!!の試食をする。 (2) A食品とはどんな会社か調べる。 (3) コラボ商品のアイデアを検討する。 3 グループごとにコラボ商品を検討する。 (1) アイディアを考え、収集する。 (2) 類似するアイデアでグループを編成し、グループごとにアイデアのブラッシュアップを行う。 4 グループごとにプレゼンをする。 (1) A食品社長にプレゼンする。 (2) プレゼンの結果発表を知る。 (3) コラボ商品の試作・試食</p>								
第二次	<p>5 開発したコラボ商品を開発・販売する。 (1) 商品ネームの考案 (2) 商品ブランドの考案 (3) コラボ商品を開発、宣伝するためにグループに分かれて、活動する。 6 グループごとに活動に取り組む。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>グループ</th> <th>活動内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>宣伝</td> <td>記者会見、新聞やテレビ、ラジオ広報誌への投げ込み、Fukurum 基金を活用した販促活動</td> </tr> <tr> <td>デザイン</td> <td>パッケージのデザイン、レシピブックの作成</td> </tr> <tr> <td>味研究</td> <td>レシピ開発</td> </tr> </tbody> </table> <p>7 校外販売会の実施 8 猪苗代町長への表敬訪問 9 単元のまとめ</p>	グループ	活動内容	宣伝	記者会見、新聞やテレビ、ラジオ広報誌への投げ込み、Fukurum 基金を活用した販促活動	デザイン	パッケージのデザイン、レシピブックの作成	味研究	レシピ開発
グループ	活動内容								
宣伝	記者会見、新聞やテレビ、ラジオ広報誌への投げ込み、Fukurum 基金を活用した販促活動								
デザイン	パッケージのデザイン、レシピブックの作成								
味研究	レシピ開発								

表1 「単元の経過 (一部抽出)」

授業を展開するにあたり、生徒に対して協働的な学びとはどういったものか説明することから始めた。生徒には、協働的な学びを「友達の考えを聞いたり、昔の人の考えに触れたりしながら、自分自身の考えを広げる勉強である。」と端的に伝えた。そのための手段として、①友達の考えを聞くこと。②グループで話

し合ったことをまとめること。③意見を文字起こして意見交換すること。④雑誌やネットなどから昔の人の考えを知ることを伝え、今後の学習で用いることを示した。

(1) 地域の問題と課題を捉える。

授業を始めるにあたり、本校が位置する猪苗代町の特徴、問題と課題について調べた。

調べる項目は、①猪苗代町の有名な食べ物、②猪苗代町の有名な人、③猪苗代町のスキーができる有名な山、④大正9年から令和27年までの猪苗代町の人口の推移を表すグラフを見て気付いたこと、⑤昭和61年から平成26年までの猪苗代町の事業所と従業員数の推移を表すグラフを見て気付いたことを取り上げた。

調べ活動を通して、自分たちの学校がある地域の良さや特徴を改めて理解するとともに、人口や事業所数のグラフから猪苗代町の人口減少や事業所・従業員数の減少が進んでいることに気付くことができた。**資料1**

猪苗代町の問題を「猪苗代町の人口や事業所数が減り、町の元気がなくなっていること。」本授業で取り組むべき課題を「猪苗代町を盛り上げること。」とし、そのための手段として生徒が理解しやすいような言葉を用いて、「『うまくて生姜ねえ!!』とコラボ商品を開発して、猪苗代町を盛り上げよう」という単元を貫くテーマを設けた。

(2) 「うまくて生姜ねえ!!」とは何かを調べる。

「猪苗代町を盛り上げる」という課題を遂行するために、「うまくて生姜ねえ!!」とコラボ商品を開発していくのだが、大分部の生徒が「うまくて生姜ねえ!!」の存在を知らなかった。そのため、まずは、コラボ商品の基となる「うまくて生姜ねえ!!」を試食し、どのような食材が合うのか、自由に発想することにした。**資料2**

商品の試食では、生徒全員が試食することができた。なかには偏食の生徒もいたが、試食することができ、「しょっぱい味です。」「おい

しいです。」と生徒同士で感想を伝えあうことができた。資料2のワークシートでは、今後のグループ分けを見据えて、自由記述のアイデアの欄と①「うまくて生姜ねえ!!」の味を変える、②「うまくて生姜ねえ!!」をお菓子にしよう、③「うまくて生姜ねえ!!」をパンにしよう、④「うまくて生姜ねえ!!」のパッケージデザイン等を考えるなどの項目に沿って考えた。事前にA食品から実現可能な加工の仕方を聞いており、その情報を基にワークシートを作成して、生徒にアイデアを考える機会を設けた。

生徒に「うまくて生姜ねえ!!」と合う食材やコラボ商品のアイデアを自由に検討させると、「粉にして飲み物にしてしまう。」「ストロベリージャムと混ぜる。」などの自由な発想をしてくれる生徒が多く見られた。(写真1)



写真1 「うまくて生姜ねえ!!」試食の様子

(3) グループごとにコラボ商品を検討する。

前時のワークシート「資料2」を基に生徒をグループに分けた。「うまくて生姜ねえ!!」に新しい食材を取り入れて新しい味を作り出す①味変化グループ、「うまくて生姜ねえ!!」をお菓子にする②お菓子グループ、「うまくて生姜ねえ!!」とパンを組み合わせる③パングループ、「うまくて生姜ねえ!!」のパッケージやオリジナルキャラクターを作る④パッケージグループの4つに分かれて活動に取り組んだ。

それぞれのグループで活動するにあたり、生徒が協働的な学びを意識して活動に取り組めるように、使用するワークシートに協働的な学びを実践したり、振り返ったりすることができる項目を取り入れた(写真2)。

3 グループの課題

うまくて生姜ねえ!!を宣伝するためにどうすればいいか

4 課題をどうすれば解決できるか、自分の考えを書こう(アイデア) **協働的な学びの過程**

うまくて生姜ねえ!!をパンにしよう
新聞に載せて発売をしよう

5 課題を解決するための、みんなの意見を聞こう

田」の放送をロケかける	元、7、7、7
ホスターも作って、パンにしよう	
DJライブ	
ラジオでロケかける	
YouTubeを作る	

6 友達の見解を聞いて、どう思ったか、自分の意見に変化はあったか。

田」の放送でロケかけるが、田」は他の人の意見で発売したパンのロケかける

写真2 協働的な学びを意識できるワークシート

味変化グループでは、ベースの味となる「うまくて生姜ねえ!!」に合う地域の食材探しを行った。食材を探すにあたり、隣接する施設や学校の教職員にインタビューを行い、猪苗代湖の川えびや雪下キャベツ、山菜などの食材が挙げられた。(写真3) 家庭科で学習した食物の栄養成分などを参考にしながら実際に食材を選んで調理し、「うまくて生姜ねえ!!」と絡めて味を確かめる活動を繰り返し行った。



写真3 インタビューの様子

お菓子グループでは、「うまくて生姜ねえ!!」を取り入れたお菓子の検討を行った。タブレット端末を用いて、インターネットで情報収集するために、生徒に「他の学校のコラボ商品」や「生姜を使ったお菓子」などの調べる視点を提案したうえで情報収集を行った。発案したアイデアをレジユメにまとめた後、そのお菓子をイメージする絵を描く活動を取り入れた。実際に考えたお菓子を絵に描くことで、美術での学びが発揮できた。(写真4、5)



写真4 生徒考案
「ばんたいあかぬまカヌレ」



写真5 生徒考案
「はくちょうクッキー」

パングループでは、グループ内で検討した結果、「うまくて生姜ねえ!!」をベースにしたジャムを発案するアイデアが出された。そのため、イチゴジャムやブルーベリージャムなどを「うまくて生姜ねえ!!」に取り入れ、①味、②相性、③商品化は可能かの3観点で評価し合う活動を行った。ジャムを混ぜ込むという意外性のあるアイデアだったが、実際に試食してみると、「意外と合いますね。」などの感想が聞かれた。

パッケージグループでは、コラボ商品を開発するにあたり、商品のラベルに取り入れるキャラクター作りを行った。授業の中で、小売店で販売されている様々な商品には、「おいしさが伝わるようなデザインがされていること」「市販されている商品のキャラクターから伝わるイメージ」などを学習し、生徒が考案するキャラクターの「名前」「身長」「性別」「特徴」などの細かな詳細を考えられるワークシートを使いながら、タブレット端末にスタイラスペンを用いて、「生姜」をキーワードにしたキャラクター作りを行った。商品を宣伝するための特徴的なキャラクターや配色などの工夫が見られた。(写真6、7)

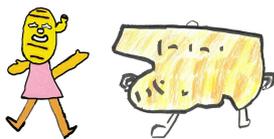


写真6 生徒考案
イメージキャラクター



写真7 キャラクターづくり

(4) グループごとにプレゼンテーションする。

コラボ商品の実現化に向けて、グループごとに考案したコラボ商品のアイデアをA食品代表取締役に資料3を用いてプレゼンテーションする機会を設けた。コラボ商品の実現化がかかった大事なプレゼンテーションであるため、生徒達はアイデアを採用してもらうために、事前にグループごとに発表内容を原稿にまとめておき、代表取締役に伝えることを意識しながら、文章を読んで、発表することができた。代表取締役からは、「型にはまら

ない、面白いアイデアばかりである。」と講評をいただいた。(写真8、9)



写真8 A食品代表取締役からの講評



写真9 プレゼンテーション

(5) 開発したコラボ商品を開発・販売する。

プレゼン終了後、味変化グループのアイデアが採用され、「山菜」を取り入れた万能調味料の開発を行うことが決まった。山菜を取り入れることで、シャキシャキとした食感が良いアクセントになり、さらに山菜の食物繊維やビタミン等も摂取できる。取り入れる山菜は、「わらび」「ふき」「きくらげ」「たけのこ」の4種類である。商品のネーミングは、生徒と教職員にアンケートをとり、話し合いの上で決定した。

(6) グループごとに活動に取り組む。

開発したコラボ商品を販売するにあたり、①パッケージのデザインを考えるグループ、②味の研究をするグループ、③メディアに宣伝するグループに分かれて活動に取り組んだ。

味研究グループでは、「うまくてごめんな山菜」のおいしさをお客さんに伝え、多くの人の手に取ってもらえるように、家庭科の学びを生かして、「うまくてごめんな山菜」を使用した料理の研究を行うことにした。生徒にどのような料理にしたいのか、考える機会を設けると、「ロールキャベツにする」「冷たいうどんと合わせる。」などの意見が挙げられた、集約さ



写真10 たきこみご飯の試作

れた意見の中から話し合いを行った結果、①「うまくてごめんな山菜」を卵に混ぜた玉子焼き、②「うまくてごめんな山菜」をかけたうどん、③炊き込みごはん、④「うまくてごめんな山菜」を混ぜ込んだお好み焼きを調理し、味の研究を行うことにした。(写真10)

デザイングループでは、主に「うまくてごめんな山菜」のパッケージデザインや味研究グループで研究したレシピブックの作成を行った。パッケージデザインを考える際は、タブレット端末のプレゼンテーション作成アプリ Keynote で、パッケージの展開図に沿って配色やフォント、イラストデザインなどを描き、グループ内で評価・改善しあう活動に取り組んだ。(写真11) また、デザイン作成アプリの Canva を用いて、ロゴのデザインづくりにも取り組んだ。Canva 内に保存されている無料データを用いる生徒やオリジナルのロゴデザインを作成する生徒がいた。(写真12)



写真11 Keynoteを使用したパッケージデザイン作成



写真12 Canvaを使用したロゴデザイン作成

宣伝グループでは、「うまくてごめんな山菜」を販売するにあたり、どのようにして宣伝を行うのか検討した。生徒からは、「町の放送で呼びかける。」「ラジオで宣伝する。」「YouTubeやTikTokで宣伝する。」「記者会見をする。」などのアイデアが挙げられた。生徒同士で話し合い、まずはラジオの投稿フォームに入力して情報の投げ込みを行った。ラジオに採用されるために、生徒同士で意見を出し合い、文章を作成して

情報の投稿を行った。生徒からは、「ドキドキしましたが、採用されるといいです。」と期待に胸を膨らませた姿が見られた。その後、ラジオ投稿の内容が採用され、ラジオアナウンサーとラジオ収録を行い、「うまくてごめんな山菜」を宣伝する活動に取り組むことができた。生徒からは、「初めてのラジオ収録に緊張しましたが、頑張って宣伝できまし



写真13 ラジオ投稿のための話し合い

た。」と満足そうな笑顔を見ることができた。さらに、商品を広く宣伝するために、本校でコラボ商品の記者発表会を行うことにした。記者に対してどのような情報を伝えればいいのか話し合い、台本を仕上げ、練習を行ったうえで記者発表会を迎えた。テレビ局や新聞各社、地元の役場などに考えた原稿を発表したり、記者からの質問を受けたりすると、その場で回答を考え、受け答えすることができた。

(写真14) 生徒は緊張しているようであったが、約一年間の月日をかけて作り上げた製品を発表する姿からは、自分たちの力で猪苗代町を元気づけようという強い意志が感じられた。

宣伝グループでは、「うまくてごめんな山菜」を販売するにあたり、どのようにして宣伝を行うのか検討した。生徒からは、「町の放送で呼びかける。」「ラジオで宣伝する。」「YouTubeやTikTokで宣伝する。」「記者会見をする。」などのアイデアが挙げられた。生徒同士で話し合い、まずはラジオの投稿フォームに入力して情報の投げ込みを行った。ラジオに採用されるために、生徒同士で意見を出し合い、文章を作成して



写真14 記者からのインタビュー



写真15 記者発表会

(7) 商品ブランドの考案

本單元では、コラボ商品を開発・販売するに当たり、学校独自の「iina-BORN」というブランドを立ち上げた。(写真16) 生み出したコラボ商品を広く認知してもらうために、ブランドロゴを採用した。ブランドの名称は、生徒・教師間でアンケートを取って採択した。

「iina」という言葉には、猪苗代町、猪苗代支援学校の「猪(いな)」をアダプトするとともに、街や学校の「い〜な♪」と思える商品を学校の生徒一人一人がクリエイターとなり、「BORN」生み出していきたいという想いが込められている。

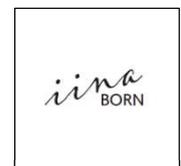


写真16 オリジナルブランド

(8) 校外販売会の実施

コラボ商品の開発開始後、約一年の月日を経て、「うまくてごめんな山菜」を販売することができた。発売日当日には、地元の小売店4か所にて生徒による同時販売会を行った。

販売会では、「僕たちが開発した『うまくてごめんな山菜』です。」「おいしいですよ。」と懸命にお客さんの呼び込みを行う姿が見られた。また、味研究グループが考案した炊き込みご飯の試食を行った。試食したお客からは、「生姜の風味が豊かでおいしいです。」などの感想をいただき、にっこりとほほ笑む生徒の笑顔が見られた。家庭科での学びが生かされ、他者から評価された瞬間であった。さらに、「うまくてごめんな山菜」を購入いただいた方には、デザイングループが作成した、うまくてごめんな山菜のおいしい食べ方をまとめたレシピ集「クックブック」を配布した。(写真17)自分たちで作上げた商品であるからこそ、必死にお客の呼び込みを行い、自分たちの学校や地域のために活動する姿が見られた。(写真18)

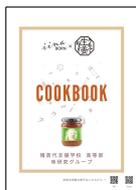


写真17 クックブック



写真18 校外販売会

(9) 猪苗代町長への表敬訪問

地域を元気づけるためにコラボ商品の開発を行い、販売することができたため、猪苗代町長に対して表敬訪問を実施した。これまでの発表資料を基に、生徒によるコラボ商品開発の経緯を発表し、町長に試食してもらい、「山菜の食感がおいしい。」などの感想をいただき、緊張しながらも生徒の喜ぶ姿が見られた。

(10) Fukurum 基金補助金の活用について

本事業に関しては、コラボ商品の活用の際に、「ふくしまの未来を創る Fukurum 基金」の補助金補助団体として採択されており、コラボ商品の開発と販路拡大に関して補助金の使用や Fukurum 基金担当者による商品宣伝のための助力を賜っている。

なかでも、補助金を使用して、生徒が考案した生姜のキャラクターをステッカーにして、商品を購入いただいた方に配布したり、生徒が描

いた山菜のイラストを取り入れたてぬぐいを製作して、販売会で使用したりするなどの販促商品の開発を行うことができた。(写真19、20)



写真19 生徒原案のステッカー



写真20 生徒原案のてぬぐい

VII 協働的な学びに関する授業評価

1 質問項目

単元の終了時に協働的な学びが生徒にどのような影響を与えたのか分析するための質問項目を検討した。測定尺度を作成するにあたり、リッカート尺度による質問項目を4件法とし、7つの項目を作成した。質問項目を作成する際は、秋田(2010)、秋田(2012)を参考に、東海林、一善(2014)の示す「協働的な学習の効果」4項目を基に質問項目を作成した(表2)。

項目	
Q1	話し合いをする時、自分の意見や考えを伝えることができた。
Q2	友達の意見を聞くことができた。
Q3	友達の意見を聞いて、自分の考えや意見が変わった。
Q4	話し合いながら学習し、自分の知っていることが増えた。考えを深めることができた。
Q5	友達と話し合いながら学習し、自分のコミュニケーション能力を高めることができた。
Q6	友達や自分の成長を感じながら、自分のよいところや得意なこと、苦手なことを見つめることができた。
Q7	全員で商品を完成させることができて、どういった気持ちか。

表2 授業評価質問項目

2 対象生徒

令和6年度高等部在籍生徒(1年5名、2年9名、3年6名、計20名)

3 実施期間

単元終了時の令和6年10月16日に、一斉に実施した。

4 評価点の算出式

4件法による回答の場合、各評価項目に対して1から4の段階評価で行い、肯定的な評価には高い値を配点した。

5 分析方法

回収した授業評価アンケートは、選択回答式の結果は単純集計でまとめ、その割合を算出し、円グラフで示す。評価項目ごとの1から

4段階評価の合計値を基に各質問項目間の相関係数を算出、最も強い正の相関を示す質問項目を抽出し、独立性の検定 (χ^2 統計量) を実施、質問間の関連性を判断する。

6 学習評価の結果

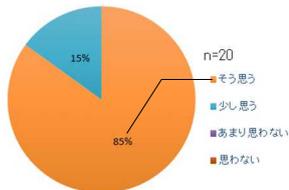
(1) 「話す」に関連するアンケート結果

「話し合いするとき、自分の意見や考えを伝えることができた。」との質問に対し、「そう思う」「少し思う」などの肯定的回答は90%だった。



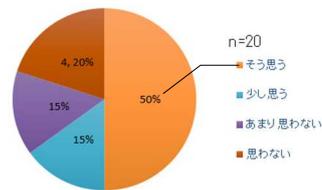
(2) 「聞く」に関連するアンケート結果

「友達の見解を聞くことができた」との質問に対し、「そう思う」「少し思う」などの肯定的回答は100%だった。



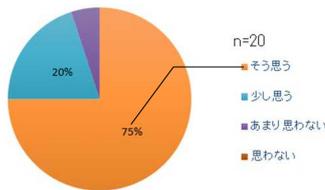
(3) 「考えの変化」に関連するアンケート結果

「友達の見解を聞いて、自分の考えや意見が変わった」との質問に対し、「そう思う」「少し思う」などの肯定的回答は65%だった。



(4) 「気持ち」に関連するアンケート結果

「全員で商品を完成させることができ嬉しかった」との質問に対して「そう思う」「少し思う」などの肯定的回答は95%だった。



(5) 「理解の深化」に関連するアンケート結果

「話し合いながら学習し、自分の知っていることが増えた。考えを深めることができた」との質問に対し、「そう思う」「少し思う」などの肯定的回答は90%だった。



(6) 「コミュニケーション能力の向上」に関連するアンケート結果

「友達と話し合いながら学習し、自分のコミュニケーション能力を高めることができた」との質問に対し、「そう思う」「少し思う」などの肯定的回答は、90%だった。



(7) 「自己理解」に関連するアンケート結果

「友達や自分の成長を感じながら、自分のよいところや得意なこと、苦手なことを見つめることができた」との質問に対し、「そう思う」「少し思う」などの肯定的回答は75%だった。



VIII 授業評価の考察

授業評価アンケートでは、各項目で高い評価値が多く、協働的な学びによる学習効果を実感している生徒が多いという結果が明らかになった。そこで、授業評価の各質問間に、相関性があるか、質問全てに対する相関係数を求めたところ、質問2と質問5の間には相関係数0.880、質問2と質問4に対しては相関係数0.7880が得られ、以下のような質問間の強い正の相関が見られた。

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7
Q1		0.073	0.587	-0.040	0.376	0.523	0.362
Q2	0.073		0.633	0.780	0.880	0.490	0.366
Q3	0.587	0.633		0.527	0.811	0.593	0.509
Q4	-0.040	0.780	0.527		0.755	0.454	0.470
Q5	0.376	0.880	0.811	0.755		0.736	0.589
Q6	0.523	0.490	0.593	0.454	0.736		0.678
Q7	0.362	0.366	0.509	0.470	0.589	0.678	

最も強い正の相関係数が得られた質問2と質問5の間に関連性があるか、独立性の検定を行った。質問2が「友達の意見を聞くことができた」質問5が「話し合いながら学習し、自分の知っていることが増えた。考えを深めることができた。」であるため、下記のような仮説を立てることができる。

帰無仮説：友達の意見を聞くことと、自分の知っていることが増えたり、考えを深めたりすることは関連性がない。

対立仮説：友達の意見を聞くことと、自分の知っていることが増えたり、考えを深めたりすることには関連性がある。

仮説検定を進めるために、まずは、質問2と質問5の評価値をクロス集計表にまとめた。観測度数を表にまとめると以下ようになる。

		Q5 ともだちと話し合いながら学習し、自分の知っていることが増えた。考えを深めることができた。				
		できた	すこし、できた	あまり、できなかった	できなかった	総計
Q2 友達の意見をきくことができた。	できた	12	4	1	0	17
	すこし、できた	0	1	1	1	3
	あまり、できなかった	0	0	0	0	0
	できなかった	0	0	0	0	0
	総計	12	5	2	1	20

次に観測度数から期待度数を算出した場合、以下のように示される。

		Q5 ともだちと話し合いながら学習し、自分の知っていることが増えた。考えを深めることができた。				
		できた	すこし、できた	あまり、できなかった	できなかった	総計
Q2 友達の意見をきくことができた。	できた	10.2	4.25	1.7	0.15	17
	すこし、できた	1.8	0.75	0.3	0.15	3
	あまり、できなかった	0	0	0	0	0
	できなかった	0	0	0	0	0
	総計	12	5	2	1	20

期待度数から χ^2 乗統計量を求めるにあたり、数値が0の項目である、Q2の「あまりできなかった」「できなかった」の2項目は削除し、残りの項目間で χ^2 乗統計量の数値を求めると、9.104となった。優位水準を0.05とす

れば対応する χ^2 分布の値は $\chi^2_{(2-1)(4-1)}(0.05) = 7.815$ であるため、 $9.104 > 7.815 = \chi^2_3(0.05)$ により、帰無仮説は棄却され、「友達の意見を聞くことと、自分の知っていることが増えたり、考えを深めたりすることには関連性がある。」ということが明らかになった。

IX まとめ

1 成果

本研究で取り組んだ、A食品とのコラボ商品開発に関しては、「うまくてごめんな山菜」という商品を開発し、「地域を元気づける」という課題の達成に向けて、学校での取り組みを広く周知することができた。以下販売・宣伝実績の一部を掲載する。

<コラボ商品「うまくてごめんな山菜」の販売実績> ・道の駅いなわしろ ・道の駅ばんだい ・リオンドール猪苗代店 ・ヨークベニマル猪苗代店 ・日本橋ふくしま館 MIDETTE ・安達太良 SA 上り線、下り線 ・那須高原 SA 上り線、下り線 ・福島県観光物産館 ・飯坂温泉あづま荘 ・吾妻 PA 上り線、下り線 他 ※店舗の仕入れ状況によって、販売の有無が異なる。 <コラボ商品「うまくてごめんな山菜」の宣伝実績> ・福島民友、福島民報、読売新聞、広報「いなわしろ」、福島広報誌つながるふくしまゆめだより、元気の出る情報・交流誌「手をつなぐ」等に記事の掲載 ・テレビユー福島、ゴジてれ chu!にて TV 報道 ・FM ふくしま「県政広報ラジオ」「RADIO GROOVE」でのラジオ収録 ・トップシェフ・敏腕バイヤーが選ぶ、「料理王国100選」に選出 ・料理雑誌「料理王国 2025」に掲載資料4
--

本研究の内容は、地域資源を活用した有効的な授業づくりを実践することと、協働的な学びが生徒に及ぼす影響を考察することである。一つ目の「地域資源を活用した有効的な授業づくり」に関しては、学校の重点目標に迫りつつ、地域資源を有効に活用した単元計画の展開や生徒が主体となった授業を実践することができた。

その要因としては、第一に地元企業であるA食品と連携することで、生徒達が導き出した「猪苗代町を元気づける」という課題を遂行しやすい学習環境を整えることができたということが挙げられる。学校として、地域企業と

連携をしながらコラボ商品の開発に携わる学習は初めての経験であり、手探りでの単元展開であったが、課題遂行→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現といった探究するためのプロセスを基にコラボ商品開発のロードマップ[資料5]に沿って学習を展開することができた。第二に、生徒自身が意欲を高められる豊富な種類の学習活動を単元計画に盛り込むことができたことである。自分たちが考案したアイデアが実際に商品化され、最寄りの小売店で販売されることへの期待感があり、そのために希望のグループに分かれて活動し、様々な物を創り上げたり、地域の方に広く宣伝したり、時には各メディアに取り上げてもらったりするといった充実できる活動を設けることができた。また、本単元を展開するにあたり、Fukurum 基金補助金に応募、採択されたため、補助金を活用しての授業展開ができたことも効果的であった。学校の中だけで完結する単元計画では、本単元のような取り組みは難しく、学校外の地域資源を活用して展開したからこそ、より有効的な授業づくりを行うことができ、ひいては、学校の重点目標に迫ることができたのだと考える。

研究内容の二つ目である、「協働的な学びが生徒に及ぼす影響の考察」に関しては、学習評価アンケートを考察したように、協働的な学びが生徒に良い影響を与えることができた。特に、学びの中での話し合いの中で、友達の意見を聞くことができた生徒は、自分の知っていることが増えたり、考えを深めたりすることができており、質問間の相関性が分かった。

さらに、授業を展開する中で、総合的な探究の時間の中で各教科等の見方・考え方を活用することもできた。表3にその一例をまとめたように、コラボ商品を開発するにあたり、国語、数学、家庭などの教科の見方・考え方を生かし、教科等の見方・考え方と総合的な探究の時間との往還を図ることができた。

<総合的な探究の時間>
猪苗代町の問題を解決するために「うまくて生姜ねえ!!」とのコラボ商品開発を行う（広範な事象）

教科等の見方・考え方と探究との往還

<各教科等の見方・考え方の活用例>
国語：商品開発時の話し合い、文章整理、プレゼンテーション
数学：人口統計からのグラフの読み取り、調理時の分量計算、販売会での会計
家庭：商品開発時の栄養成分検討、調理、器具の使い方、調理実習
美術：パッケージ作りでのデザイン、配色、テーマに沿ったキャラクター作り

表3 総合的な探究の時間と各教科等の往還例

2 課題

今後の課題としては、学校全体を見通し、総合的な探究の時間と各教科等で育成する資質・能力との関連付けを踏まえたカリキュラム・マネジメントを深めていくことで、教科の学びと総合的な探究の時間の学びのつながりが強まり、有機的な教育計画を組み上げ、より教育的効果を高めることができると考える。

X 今後の展望

学校オリジナル商品ブランドを立ち上げ、地域資源を活用した単元の構築を実践することができた。現在も、猪苗代町を元気づけるという課題に向かって、猪苗代町の伝統技術である、「中ノ沢こけし」とコラボした活動を推進している。今後も、地域の「ひと・もの・こと」に触れ、生徒自らが社会とかかわるなかで問題を見つけ、課題を遂行できる力を育むとともに、猪苗代支援学校の取り組みを広く周知できるように活動に努めていきたい。[資料6]

【参考・引用文献】

- 1) 福島県猪苗代町（2020）：「猪苗代町まち・ひと・しごと創生人口ビジョン（改訂）第2期総合戦略」
- 2) 中央教育審議会（2021）「教育課程における審議のまとめ」
- 3) 内閣府（2016）：「第5期科学技術基本計画」
- 4) 秋田喜代美：『学びの心理学：授業をデザインする』：、左右社、2012
- 5) 秋田喜代美・藤江康彦（編著）：『授業研究と学習過程』、放送大学教育振興会、2010
- 6) 東海林、一善：“協働的な学習が機能する授業の創造”、山形大学学術機関リポジトリ、<https://yamagata.repo.nii.ac.jp/records/3316>（参照2023-12-02）

資料1 うまくて生姜ねえ!!の試食後、アイデア記入レジュメ

猪苗代町ってどんな町？

名前 _____

1 猪苗代町の ゆうめいな たべものは？

自分の考え	調べた結果
生姜	蕎麦

2 猪苗代町の ゆうめいな ひとは？

自分の考え	調べた結果 (だれ?)
野口英世	野口英世

3 猪苗代町の スキーができる ゆうめいな やまは？

自分の考え	調べた結果
磐梯山	磐梯山

グラフをみて気付いたこと
猪苗代町の人口は年々減っている。

猪苗代町の抱える問題とは？

猪苗代町の ひとが へり、おみせも すくなくなり、まちの 元気 がなくなっている。

猪苗代町ってどんな町？

名前 _____

1 猪苗代町の有名な食べ物？

自分の考え	調べた結果
うどん	そば

2 猪苗代町の有名な人は？

自分の考え	調べた結果
野口英世	野口英世

3 猪苗代町の有名な場所は？

自分の考え	調べた結果
がらす食言	磐梯山

グラフをみて気付いたこと
昭和より前の方が人口が増えていたと思います。

猪苗代町の抱える問題とは？

猪苗代町の人がへり お店も少なくなり、町の元気がなくなっている。

資料2 猪苗代町の良さや問題を捉えるためのレジュメ

コラボ商品を開発しよう

名前 _____

×

?

1 1番目にやりたいことに「1」、2番目にやりたいことに「2」を書きましょう。

やりたいこと	方向性	例
	あたら あじ かんが 新しい味を考える	
1	かし お菓子にしよう	 大福、まんじゅう、だんご、クッキーはOK
	パンにしよう	
	パッケージをつくる	
	あたら 新しいアイデア	例) 応援歌をつくる。 キャッチコピーをつくる。 など

2 自分の思いつくアイデアを自由に書いてみよう

ロキに生姜をお菓子を作る。
クッキーにしよう。

うまくて生姜ねえ!!に
アレ入れたら
おいしいかなあ!?

うまくて生姜ねえ!!に
アレ入れたら
おいしいかなあ!?

コラボ商品を開発しよう

名前 _____

×

?

1 1番目にやりたいことに「1」、2番目にやりたいことに「2」を書きましょう。

やりたいこと	方向性	例
1	あたら あじ かんが 新しい味を考える	
	かし お菓子にしよう	 大福、まんじゅう、だんご、クッキーはOK
2	パンにしよう	
	パッケージをつくる	
	あたら 新しいアイデア	例) 応援歌をつくる。 キャッチコピーをつくる。 など

2 自分の思いつくアイデアを自由に書いてみよう

おそばを>作る
おそばに生姜を混ぜる

うまくて生姜ねえ!!に
アレ入れたら
おいしいかなあ!?

うまくて生姜ねえ!!に
アレ入れたら
おいしいかなあ!?



試作① ブルーベリージャム



味	相性	商品化
○	○	△

- ・割合が…
- ・「うまくて生姜ねえ！」の味が…

試作③ キャベツ+マヨネーズ



試作③ キャベツ+マヨネーズ



中身がぎっしり、甘くてシャキシャキ!
雪下キャベツ

試作③ キャベツ+マヨネーズ



味	相性	商品化
◎	◎	✕

- ・お好み焼き風
- ・子供も好きそう

磐梯山をイメージしたお菓子を開発



磐梯山 **おかし**

「ラブラブはくちょう」を提案！！



生地生姜が練りこまれています。
生地にバナナが入っています。

「アイシングクッキー」を提案！！



キャンプファイヤーをイメージ！！
磐梯山をカラフルに お客様の目を引く！
猪苗代湖にやってくる白鳥

「ぼんだいあかぬまカヌレ」を提案！！



あかぬまをイメージ
ホワイトチョコレートでコーティング
くぼみにブルーベリーをのせてあります！！

「磐梯山カヌレ」を提案！！



ぼんだい山カヌレ
くぼみにラズベリーをのせてあります！！
・生地の中にはイチゴジャムと生姜
・山肌に見立てた表面にはアラザンをちらす。

商品をイメージしたキャラクター



資料4 トップシェフ・敏腕バイヤーが選ぶ、「料理王国100選」に選出



山菜と生姜がたっぷりに入った万能調味料

福島県立猪苗代支援学校と吾妻食品がコラボ。生徒が約1年かけて開発した商品です。タケノコやワラビなどの山菜と生姜がたっぷりに入った一品です。ご飯に乗せても、おにぎりの具にも。うどんやそばの具にもおすすめ！ シャキシャキとした食感が楽しめる万能調味料です。

- 230g

松本良英／子供や若い人に好かれる味付けかも。
池尻綾介／山菜の活用は素晴らしいと思います。

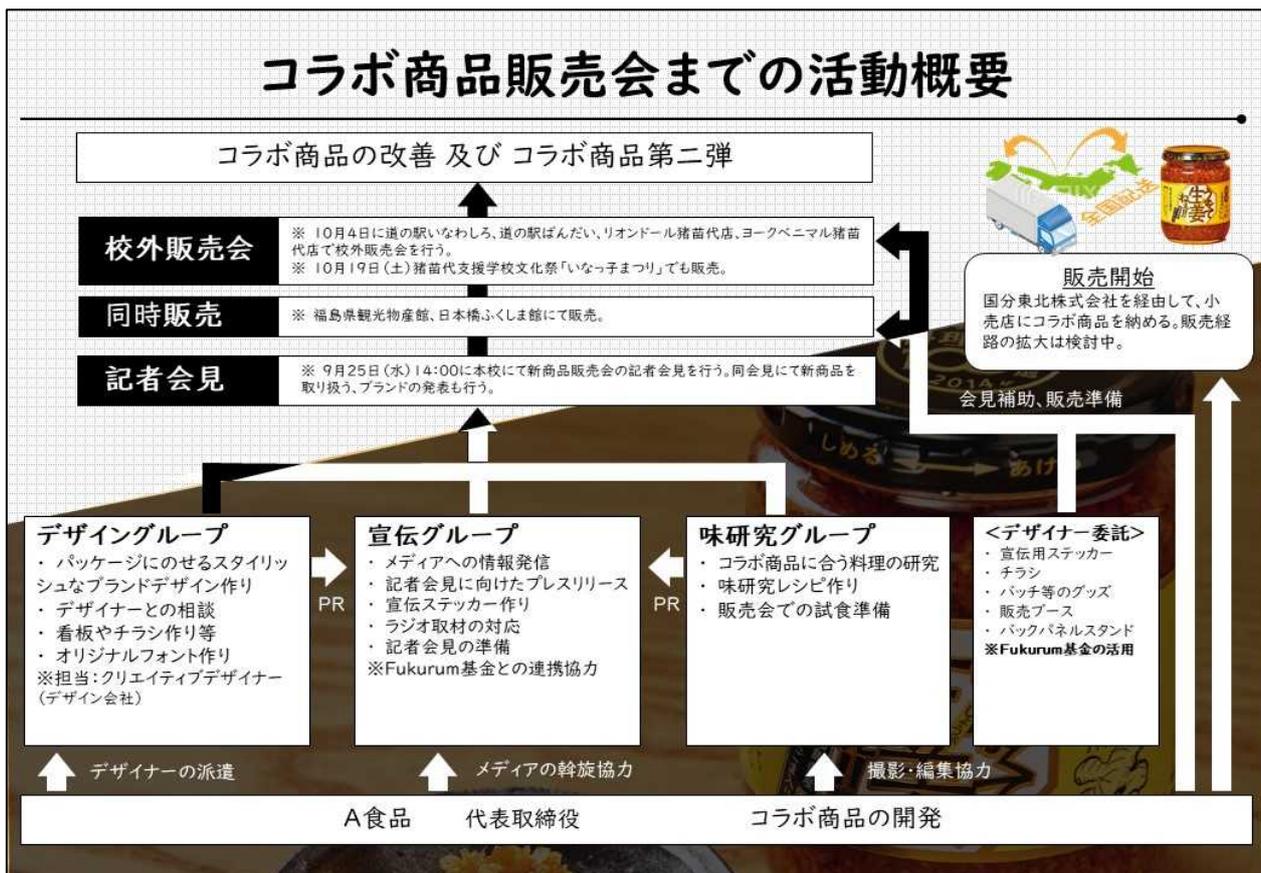
資料5 コラボ商品開発までのロードマップ1

令和6年度商品開発進行計画の案

■ 猪苗代支援学校サイド

- 4月～7月**
単元名「うまくて生姜ねえ!!を開発して売ろう!」
・昨年度の振り返り
・グループに分かれてPR方法の検討(テレビ、新聞、ラジオ、雑誌への投稿などを考えています。)
・販売会に向けて、商品と合う調理方法の検討
・チラシやポスターの作成
- 4月以降**
・山菜入りうまくて生姜ねえの商品開発及びカヌレの試作、パングループの案についての進捗状況はどうでしょうか。
・パッケージデザインのヒアリングについてのご相談
・メディア媒体への斡旋のご相談
- 10月**
単元名「商品販売会」
・生徒が直接販売会場に向いて、販売活動を行う。
・販売場所は、道の駅いなわしろ、道の駅ぼんだい、リオンモール猪苗代店ヨークベニマル猪苗代店が候補(10月4日) ※販売前にメディアでの宣伝
- 10月**
道の駅いなわしろでの販売会のご相談
・販売数量
・道の駅での販売権利について
- 11月**
行事名「いなっこ祭り」
・いなっこ祭りでの販売会
・製品販売
・学習のまとめ
・いなっこ祭りでの発表
- 11月**
・いなっこ祭りでの販売会のご相談
・販売数量
- 12月**
単元名「うまくて生姜ねえ!!とコラボ商品を開発しよう(第二弾)」
・売り上げや販売経路などを確認し、さらによくできることを検討する。
- 12月**
・今年度の売り上げや学校側ができる改善点についてのご相談

■ 吾妻食品様サイド



審査の観点及び審査総評

【審査の観点】

- (1) 研究の意図が明確で、主題が適切なものであるか。
- (2) 研究の対象が明確であるか。
- (3) 研究の計画及び内容が適切であるか。
- (4) 論旨が一貫しており、説得力があるか。
- (5) 必要な資料が精選され、整えられているか。
- (6) 結論の導き方は適切であるか。
- (7) 今後の実践に生かす手だてを講じているか。

【総 評】

令和7年度の研究論文の出品総数は26点であり、令和6年度と比較し6点減少した。26領域中、12領域への出品であった。小学校からの出品が多く見られた(26点中16点)。また、昨年度に引き続き、特別支援学校からの出品も多く見られた。大きな教育の動向、目の前の児童生徒や地域の実態を踏まえて研究主題が設定されており、先生方が目の前の児童生徒一人一人を大切した教育を実現しようとしていることが伝わってくる。

研究の成果を発信するためには、研究主題から成果と課題を述べるまで、筋道を立てた記述を心がける必要がある。主張に必要な説明は本文にしっかりと論述し、資料はあくまでも補足説明のために添付するように心がけていただきたい。

福島県教職員研究論文は、今年度で54回を迎えたということである。長年にわたる多くの教職員の研究の蓄積が本県の教育を支えている。次年度も多くの研究論文の出品に期待したい。

(別紙2)

令和7年度 福島県教職員研究論文 応募状況

1 全応募論文数 26点

2 内 訳

(1) 教育事務所別(総論文数)

県北	県中	県南	会津	南会津	相双	いわき	計
1	5	4	6	3	4	3	26

(2) 学校種別(総論文数)

幼稚園	小学校	中学校	義務教育学校 (小中合同含む)	高等学校	特別支援学校	計
0	16	4	0	1	5	26

(3) 各教科・領域等及び教育事務所別内訳(総論文数)

	幼稚園	小学校	中学校	義務教育学校 (小中合同含む)	高等学校	特別支援学校	自然の家	計	県北	県中	県南	会津	南会津	相双	いわき	計
学校経営		1						1						1		1
学年経営		1						1		1						1
学級経営								0								0
学習指導 一般		2						2		1					1	2
国 語		1			1			2		1		1				2
社 会 地理歴史								0								0
算数・数学		3	1			1		5	1	1	1			2		5
理 科		3	1					4			1	1		1	1	4
生活・総合			1			1		2		1		1				2
音 楽		1						1				1				1
図画工作 美術								0								0
技術・家庭								0								0
体育 保健体育		2						2			1	1				2
外国語 英語								0								0
道 徳								0								0
特別活動								0								0
道徳・ 特別活動								0								0
教育課程								0								0
生徒指導								0								0
特別支援 教育		1				2		3				1	1		1	3
学校保健			1			1		2				1	1			2
食育・ 学校給食								0								0
放射線教育								0								0
図書館教育								0								0
幼稚園教育								0								0
学校事務		1						1			1					1
合 計	0	16	4	0	1	5	0	26	1	5	4	6	3	4	3	26

令和7年度 福島県教職員研究論文 応募者一覧

領域等	個人 団体	学校名	氏名・代表者名	研究主題名
学校経営	個人	相馬市立桜丘小学校	木村 裕之	子どもたちが今日学校にきてよかった、明日学校にくるのが楽しみな学校を目指して ～学校課題解決に向け、学校経営方針の具現化を図る校長のマネジメントサイクル～
学年経営	個人	郡山市立富田小学校	齋藤 純子	OJT による若手教員を活かし育てる学年経営 ～日々の授業実践を通して～
学習指導	団体	三春町立沢石小学校	伊藤 七重	「協同的学び」での探究型授業による確かな学力の向上 ～異学年で学び合う新複式授業で非認知能力を高める～
	団体	いわき市立平第五小学校	渡辺 貴生	たくましく学ぶ ～児童と教職員を育む校内研修を目指して～
学習指導 (国語)	個人	石川町立石川小学校	岩谷 友太	自分の考えを書き、伝え合い、自己の成長を実感する子どもの育成 ～国語科「読むこと」における、授業のUDの視点を取り入れた全員が 「分かる・できる」授業づくりを目指して～
	個人	福島県立葵高等学校	村松こずえ	本質を掴み、解決策のヒントを異なる分野から見つける力の育成 ～思考ツールによる可視化と、具体と抽象を往還することを通して～
学習指導 (算数) (数学)	個人	福島市立佐原小学校	上遠野雄喜	「分かった！できた！」成功体験を積み、主体的に学ぶ児童の育成 ～授業のユニバーサルデザインを目指す、算数科学習指導を通して～
	団体	鮫川村立鮫川小学校	吉田 智	自ら考え主体的に学ぶ児童の育成 ～伝え合い 聴き合い 自己の考えを深める算数科の授業づくりを目指して～
	個人	相馬市立中村第一小学校	熱海佑一郎	主体的に課題を追究し、互いの考えを深めることのできる児童の育成
	個人	相馬市立向陽中学校	田中 涼太	対話的な学びを通じた「主体的・対話的で深い学び」の具現化 ～数学科における生徒の実態に即した授業づくり～
	個人	福島県立須賀川支援学校	小野 淳美	病弱特別支援学校における主体的に学習に取り組む態度の育成 ～高等部数学科における個別最適な学びと協働的な学びの検討を通して～
学習指導 (理科)	個人	白河市立みさか小学校	川尻 みほ	伝えることを通して思考を深める理科学習の在り方
	個人	昭和村立昭和小学校	二瓶 拓海	「思考と試行」を通して主体的に問題解決する力を育む理科指導の在り方 ～小学校理科「てこのはたらきとしくみ」の授業実践を通して～
	個人	相馬市立向陽中学校	佐藤 拓也	福島で学び、福島に誇りを持つことができる「福島を生きる」教育の実践(2年次) ～中学3年間を見通した放射線教育を通して～
	団体	いわき市立郷ヶ丘小学校	蛭田 紀隆	自ら見いだした問題を科学的に解決しようとする児童の育成
学習指導 (総合的な学 習の時間) (総合的な探 求の時間)	団体	天栄村立天栄中学校	市川 知広	探究的な学びを通して、夢の実現に向かう生徒の育成(3年次) ～『天栄ならではの教育』を目指して～
	個人	福島県立猪苗代支援学校	本間 久登	総合的な探究の時間における地域資源を活用した協働的な学びの実践 ～万能調味料「うまくてごめんな山菜」の開発を通して～
学習指導 (音楽)	個人	南会津町立桧沢小学校	小寺 真紀	【子どもの発達特性を軸にした授業設計の理論と実践の研究】 「音楽が嫌い」にならない授業作り～発達段階に基づく音楽指導モデルの構築～
学習指導 (体育)	個人	西郷村立羽太小学校	若松 優	運動の楽しさや喜びを仲間と共に育んでいく体育学習 ～運動が苦手な児童に視点を当てた、指導と評価の一体的な充実を目指して～
	個人	猪苗代町立猪苗代第二小学校	町野 藍	意欲的に運動に励み親しみ子どもの育成 ～体育科の授業における「できる」「楽しい」という実感を伴った運動の経験を通して～

領域等	個人 団体	学校名	氏名・代表者名	研究主題名
特別支援 教育	個人	只見町立朝日小学校	横田みなみ	通級指導教室における特別支援教育のセンター的機能を意識した取り組み ～縦横のつながりを活かした切れ目のない支援体制の充実を目指して～
	個人	福島県立猪苗代支援学校	佐藤 修一	施設併設特別支援学校における進路指導の在り方について ～学校、家庭、関係機関との連携をとおした子どもたちの夢の実現～
	個人	福島県立平支援学校	昆 瑞希	肢体不自由を伴う盲ろう児の自分らしく生きる力を育むために ～「わかる」「できる」を積み重ねる授業実践～
学校保健	個人	南会津町立田島中学校	関谷 里美	「今元気！ずっと元気！」生涯健康でいるための自己マネジメント力の育成～健康行動を 振り返る教育活動を通して～
	個人	福島県立猪苗代支援学校	佐藤 雄哉	知的障がい児を対象とした特別支援学校における保健指導について
学校事務	個人	白河市立みさか小学校	根本 翼	生成AI×音声入力で拓く通知表業務改革

おわりに

「福島県教職員特選研究論文集」は、県内教職員による優れた教育実践を広く普及することを目的として発刊しております。

今年度は小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、特別支援学校から団体6点、個人20点の計26点に及ぶ応募をいただきました。改めて、研究に取り組みました皆様の教育に対する熱意と努力に心より敬意を表します。

教育現場での日々の実践の中で試行錯誤を重ね、その成果を論文という形で共有してくださることは、本県の教育の発展にとって大変意義深いものです。一つ一つの論文に込められた「目の前の子どもたちの学びや成長を支え、よりよい教育を実現したい」という真摯な願いは、必ずや本県の教育の質を向上させる力になると確信しております。

この特選論文集が多くの教職員や学校、教育関係機関等で活用され、本県の教職員の互いの学びを支えるとともに、現場での実践を深める一助となれば幸いです。

結びに、教職員の皆様が、次代を担う本県の子どもたちのより豊かな学びや成長を目指し、引き続き日々の教育実践に励まれることを心から願うとともに、次年度もより多くの先生方からの御応募をお待ちしております。

令和7年度 福島県教職員特選研究論文集

令和8年2月発行

編集・発行 福島県教育委員会
